

はじめに

明海大学は、平成28年度に、教職を目指す学生に対して、免許状の取得に必要な教職課程の履修、教育実習、教員採用試験、赴任後に求められる授業実践力など、教職に関するさまざまな課題をトータルにサポートするために全学的な組織である「教職課程センター」を設置した。また、教職を目指す学生や教職課程担当の教員が、計画的・継続的に、浦安市をはじめ広く千葉県、東京都等に所在する小学校、中学校、高等学校、これを所管する教育委員会及び地域社会に対して、本学の教育研究の成果を発信し、還元することを目的に、「教職課程センター」の設置に併せて「地域学校教育センター」を設置した。爾来、明海大学は、公立高等学校6校、東京都足立区、千葉県浦安市教育委員会、秋田県横手市と教育に関する連携協定を締結して、連携先における児童生徒の英語力向上や教師に対する研修等を継続的に実施してきた。

創設以来、中学校・高等学校の英語の教員養成の取組を開始したところであるが、教職に就く学生にとっては、小学校における外国語活動や導入がすでに決定していた教科外国語についての指導内容等に関する基礎的理解の修得が不可欠であると考え、平成30年度には、小学校英語指導者認定協議会(J-SHINE)から登録団体の認証を受けるとともに、同年度から、教職課程に「小学校英語基礎概論」という科目を新設した。このように明海大学は時代を先取りして、将来英語の教員となる学生の教員養成の改善に努めてきたところである。

折しも、文部科学省は、小学校中学年での外国語活動、高学年での外国語科が導入された学習指導要領(平成29年3月31日告示)を円滑に実施するため、教師の負担を軽減しつつ、質の高い授業を行えることを目的に、令和2年度から教員養成機関等と連携した講習等を開発実施する公募事業を実施してきている。

明海大学は、令和2年度の最初の公募事業から継続して応募して、令和2年度から令和5年度まで、連続4回にわたり採択決定を受け、小学校の教員等に対して講座を実施してきたところである。連携教育委員会も広がりを見せ、令和2年度では東京都足立区、千葉県浦安市、秋田県横手市の3つから、令和3年度には福島県いわき市、新潟県妙高市、令和4年度からは東京都狛江市、令和5年度には北海道釧路市、岐阜県岐阜市、茨城県土浦市、群馬県前橋市が加わり、10の自治体の教育委員会を連携教育委員会とし講座を実施してきた。これまでの講座を受講した教員参加者数は延べ約6,400名となった。

なお、令和5年度の本事業においては令和4年度と同様に佐賀県伊万里市教育委員会にボランティア・オブザーバー参加資格を付与して講座を実施してきた。併せて、講座とは別に、外国語活動や外国語科に関する現場の教員がもつ日頃の悩みや相談などに対応するため、「Zoomによる小学校英語・なんでも相談交流室」を昨年度に引き続き開設した。

令和5年度の本事業成果報告書においては、公益財団法人日本英語検定協会、J-SHINEや小学校英語教育学会愛知支部理事を協力機関として実施した内容について、本学が応募するまでの取組、委託決定後から講座実施前までの取組や各講座の内容を明らかにするとともに、各講座への参加者のリフレクションに関する分析、各講座参加者の評価アンケート結果や分析を詳説した。本成果報告書が広く全国の小学校外国語教育の関係者の皆様方の参考となれば幸甚である。

令和6年3月
明海大学副学長
高野 敬三

目次

はじめに

I 事業概要

1. 事業委託決定までの取組	04
2. 委託決定後から講座実施までの取組	06
3. 検討委員会設置要綱、委員名簿及び検討委員会議事概要	08
4. 講座開発・実施チーム設置要項及び講座開発・実施チーム委員名簿	11
5. 組織図・協力・連携体制	14

II 講座概要

第1回講座～第3回講座	15
第4回講座	19
第5回講座	20
第6回講座	21
第7回講座	23
第8回講座	25
第9回講座	26
第10回講座	28
第11回講座	29
第12回講座	30
第13回講座	32
第14回講座	33
第15回講座	36
「Zoomによる小学校英語・なんでも相談交流室」	37

III 講座受講による意識の変容

第1回から第3回 過去の講座を視聴するオンデマンド型	38
第4回から第13回 授業研究	40
第14回・第15回 オンライン講義	46

IV 講座内容に対する評価 48

V 講座運営に対する評価

全講座総合評価アンケート結果分析	66
------------------	----

VI 講座全体の総括 72

VII 教育委員会・受講者等の総括

1. 東京都足立区教育委員会総括	76
2. 東京都足立区受講者感想	77
3. 千葉県浦安市教育委員会総括	77
4. 千葉県浦安市受講者感想	78
5. 秋田県横手市教育委員会総括	79
6. 秋田県横手市受講者感想	80
7. 福島県いわき市教育委員会総括	80
8. 福島県いわき市受講者感想	81
9. 新潟県妙高市教育委員会総括	82
10. 新潟県妙高市受講者感想	83
11. 東京都狛江市教育委員会総括	83
12. 東京都狛江市受講者感想	84
13. 北海道釧路市教育委員会総括	85
14. 北海道釧路市受講者感想	86
15. 岐阜県岐阜市教育委員会総括	87
16. 岐阜県岐阜市受講者感想	88
17. 茨城県土浦市教育委員会総括	88
18. 茨城県土浦市受講者感想	89
19. 群馬県前橋市教育委員会総括	90
20. 群馬県前橋市受講者感想	91
21. 講師総括	92

終わりに

I

事業概要



1. 事業委託決定までの取組

1 公募要領の公表

文部科学省から、教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業(小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業)に関する公募が公示され募集が始まったのが、令和5年1月11日であった。公募要領によれば、その目的に、「小学校中学年の外国語活動、高学年の外国語科が導入された新学習指導要領(平成29年3月31日告示)を着実に実施するため、教師の負担を軽減しつつ、質の高い授業を行える指導体制を構築することが喫緊の課題である。このため、現職の小学校教師等を対象に、外国語活動及び外国語科(英語科)の指導の充実を支援する講習等を開発し、実施する。」とある。また、事業内容としては、①小学校外国語活動・外国語科、中学校・高等学校の外国語科(英語)の専門性の高い指導者養成のための講座・講習を開催することと、②小・中・高等学校を通して、より深く多様な専門性を持った外部人材を外国語(英語)教育に活用するために必要な講習・講座等の開発・実施をすることが示されていた。そして①では、中学校教諭免許状(外国語(英語))を取得するための免許法認定講習等の開発・実施や、現職教師や教師を目指す学生等を対象とした、小学校外国語科・外国語活動に係る専門的な指導力・英語力向上に係る講座等の開発・実施が例示されていた。

さらに、今回の公募でも、講座の開設にあたっては、新型コロナウイルス感染症に係る現下の状況を鑑み、講習・講座の全部又は一部を対面により予定通り実施することが困難と認められる場合には、対面による講習・講座に相当する教育効果を有すると開設者において認められるものについては、対面によらない講習・講座として実施することを認めることや、新型コロナウイルス感染症への様々な対応で教育委員会及び現職教師等の負担が増えることに鑑み、教育委員会・受講者に負担がかからないよう配慮することが示されていた。また、実施する講習・講座については、継続的に能力の育成を図り、一回限りの講演会やセミナー等ではなく、複数回にわたって行われ、かつ総時間数が少なくとも6時間以上の講習・講座であることが望ましいこと、いずれの講習・講座においても単に英語力向上のみを目的とする内容のもの(実質的に英語民間試験の対策講座となっているものを含む)については、本事業の対象外とすることや、いずれの講習・講座においても、小学校、中学校及び高等学校の学習指導要領等の内容に対応していたり、「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」及び「小学校教員研修外国語(英語)コア・カリキュラム」「中・高等学校教員研修外国語(英語)コア・カリキュラム」を参考とした内容としたりしていることなどが示されていた。さらに、本事業によって得られた成果等は、委託先において、報告書をホームページに掲載する等普及に努めることや、講習・講座の開発に伴い、作成した教材や関連資料等をわかりやすくまとめ、成果物としてホームページで広く公表する等、講義・講座終了後も受講者が自主的に学び続けることができる、受講者以外の者もアクセスできるように成果普及に努めることが明記されていた。

2 公募準備開始

前述の公募要領によると、公募開始が令和5年1月11日で、公募締切が2月1日となっており、以下に示すような段階を経て、事業実施計画書を提出することとした。

① 学内組織の検討

事業実施主体は、昨年度同様、明海大学教職課程センター・地域学校教育センターとし、事務局には本学企画広報課が当たることとした。その上で、本事業に係る教職員の担当を決定した。

② 協力機関の検討

昨年度同様、具体的な事業実施内容を決定し実行に移していく上で、以下に示す検討に入った。過去20年にも亘り小学校英語の指導者を認定してきたJ-SHINEを協力機関・外部有識者とする。具体的には、J-SHINEの井熊ひとみ・共愛学園前橋国際大学客員教授、育英短期大学非常勤講師(J-SHINE理事)と鈴木菜津美事務局長に協力を仰ぐ。また、小学校英語に関する学会である「小学校英語教育学会」愛知支部理事である池田周・愛知県立大学教授を外部有識者とする。そして、公益財団法人日本英語検定協会を協力機関とし、当該協会の会長である吉田研作・上智大学名誉教授の協力を仰ぐこととする。

③ 連携教育委員会の検討

前述のとおり、すでに本学と教育に関する連携協定を締結して事業を実施している、東京都足立区教育委員会、千葉県浦安市教育委員会、秋田県横手市教育委員会を連携教育委員会とした。さらには、本学との教育連携協定を締結してはいないものの、一昨年度から本事業における連携教育委員会である福島県いわき市教育委員会(いわき市総合教育センター)、新潟県妙高市教育委員会、昨年度から連携教育委員会である東京都狛江市教育委員会に加え、今年度から北海道釧路市教育委員会、岐阜県岐阜市教育委員会、茨城県土浦市教育委員会、群馬県前橋市教育委員会を連携教育委員会とするよう検討に入った。

④ 再委託先の検討

公募要領では、新型コロナウイルス感染症の流行といった状況から、オンラインによる講習等の実施が可能であると記載されていた。オンラインでの講座撮影・配信は専門家に委ねることが必要と考えて、英語関係の諸事業を手掛けていて実績のある(株)ハルを再委託先として、オンライン講座の撮影・配信サポートやアーカイブ制作等オンライン環境整備を実施していただくよう検討に入った。

3 公募事業への応募

本事業に参加する小学校等の教員の服務監督者である連携教育委員会を決定しなければならないことから、昨年度実施したMEIKAI-JOEプラス2022で連携教育委員会とした東京都足立区教育委員会、千葉県浦安市教育委員会、秋田県横手市教育委員会、福島県いわき市教育委員会、新潟県妙高市教育委員会や東京都狛江市教育委員会に打診したところ、1月には参加の意思が確認できた。また、北海道釧路市教育委員会、岐阜県岐阜市教育委員会、茨城県土浦市教育委員会、群馬県前橋市教育委員会から本事業に参加の表明があった。協力機関や再委託先としては、昨年度までの協力機関である公益財団法人日本英語検定協会、J-SHINE、小学校英語教育学会愛知支部理事や(株)ハルからも本事業への公募について了解が得られた。その上で、明海大学は、事業の実施体制、実施内容、実施方法や実施日程などを定め、1月中に事業実施計画書を、そして、2月20日付文部科学省からの指摘事項を踏まえて、修正事業実施計画書を2月28日に、文部科学省に提出した。

4 文部科学省からの決定通知

2月20日には、文部科学省から、明海大学に事業を委託することを予定していること、事業採択に当たり改善・見直しを行うべきことなどが文書で指摘された。これを受け、明海大学は、事業実施計画書を修正して、文部科学省に2月28日に提出した。そして、4月3日、文部科学省から明海大学を委託先として正式に決定した旨、文書通知があった。

2. 委託決定後から講座実施までの取組

委託決定を受け、明海大学はその旨を連携教育委員会と協力機関・外部有識者や再委託先である(株)ハルに通知して、実施に向けての準備に入った。まずは、事業を遂行するための検討委員会の設置要綱並びに講座内容の開発のための「講座開発・実施チーム」の設置要項を4月3日に決定した。ここで事業名についても、昨年度との違いが分かるように、MEIKAI-JOEプラス2023という略称を使用することとした(昨年度は、明海大学のMEIKAI、協力機関のJ-SHINEのJ、そして教育委員会のOffice of Educationの頭文字をとって、協力機関が増えたことからプラスと加えて、MEIKAI-JOEプラス2022という略称を使用)。

以下が、令和5年度におけるMEIKAI-JOEプラス2023の事業を円滑に進めるために取り組んだ内容である。

1 明海大学事務局の取組

事業の正式決定を受け、事業実施計画書に基づき事業運営を円滑かつ適切に行う必要があることから、以下の取組を行った。

① MEIKAI-JOEプラス2023・ミーティングの実施

学内組織ではあるが、本事業の進行管理のため、「MEIKAI-JOEプラス2023・ミーティング」を事業正式決定直後の4月から毎週月曜日に定例開催することとした。本事業に係る組織には、明海大学と関係する協力機関が3つ、再委託先が1つ、教育委員会が10あり、明海大学がそれぞれとの連絡調整を行ったり、協力機関・再委託先・教育委員会相互間の中で明海大学が本事業実施主体として連絡調整したりすることが多くあることから、事業の進行管理のために実施してきた。

また、MEIKAI-JOEプラス2023の事業の肝となる講座内容については、明海大学の関係する教員が共通理解の下、教材開発を行う必要があることから、併せて教材開発の検討も行ってきた。特に、明海大学教員が担当する回の講座については、その開発した教材について、協力機関に指導を仰いだ上で、微修正を行い講座実施日に備えた。

② MEIKAI-JOEプラス2023共有アドレスの運用開始

MEIKAI-JOEプラス2023事業に参加する各区市の小学校等の先生方、各区市教育委員会事務局、協力機関及び(株)ハルとの連絡専用の共有アドレスの運用を4月から開始した。

③ 各区市教育委員会に対する貸与機材等の配備

15回の講座を円滑に実施するため、明海大学は各区市の拠点校に対してレンタル機器等(ビデオカンファレンスツールCONNECT 1台、第4回講座から第13回講座の授業動画撮影用・iPad 1台、三脚1台及びボイスレコーダー1台)を送付して講座実施に備えた。

④ 検討委員会の企画・開催

事業実施計画書や4月3日に決定されたMEIKAI-JOEプラス2023検討委員会の設置要綱等に基づき、事業期間中の検討委員会の開催の準備を行った。新型コロナウイルス感染拡大が続く中であったので、3回行うこととしていた検討委員会を、すべてZoomで開催するとともに、MEIKAI-JOEプラス2023検討委員会の下部組織である講座開発実施チームとの合同会議とすることとした。

第1回MEIKAI-JOEプラス2023検討委員会は、5月9日に実施してすべての協議題については賛同をいただいた。中間期の事業評価を協議するため、第2回検討委員会を10月5日に開催して、第4回から第13回の講座に関する受講者のアンケート結果を説明して評価と改善点を協議した。そして、令和6年 月 日には、本事業の締めくくりとして第3回検討委員会を開催して、事業の最終評価を確認した。(検討委員会についての詳細は後述。)

2 教育委員会への連絡・調整

本事業の連携教育委員会とは、5月1日にZoomによる会議を開催して、本事業の説明を行い講座内容について事業

実施計画書に基づき説明を行った。併せて、全15回の講座内容、実施日及び時程の調整作業に入るとともに、各教育委員会管下における拠点校(会場校)や参加教員の決定を依頼した。

3 (株)ハルとの連絡・調整

事業の正式委託を受け、4月には、(株)ハルと具体的な講座配信について打合せを実施した。昨年度同様に、明海大学をスタジオとして動画を配信することとし、どのように各区市の参加者にZoomを使用した動画配信を実施するかについて協議を行った。また、併せて、参加する小学校の先生方に提供するMEIKAI-JOEプラス2023事業の専用のWeb pageについて協議した。このようにして、5月から開始する講座の実施に万全を期した。

4 協力機関・外部有識者との連絡・調整

事業の正式決定を受け、5月1日には、財団法人日本英語検定協会の吉田研作会長、J-SHINEの鈴木菜津美・J-SHINE事務局長、池田周・小学校英語教育学会愛知支部理事・愛知県立大学教授及び井熊ひとみ・J-SHINE理事とZoom会議を開催した。ここで、全15回の講座内容、実施方法や実施日等について合意を得た。

上記1から4までの連絡・調整を行うとともに、後述の第1回検討委員会を開催した。ここで、講座内容について連携教育委員会の意向を参酌して、文部科学省に提出した事業実施計画書を微修正した。

その上で、以下の表に示す講座日程、講座内容等を決定した。日程については、受講する各連携教育委員会の先生方の授業日における多忙な業務を考慮して、長期休業中に、2回連続の講座を実施することが適当であると考え、2回講座を連続して受講する日を5日間とった。

拠点校については、全15回の講座開始前には、最終決定をみた。拠点校等(会場校等)については、足立区が新田学園、浦安市は浦安市役所、横手市は市立横手北小学校、いわき市は総合教育センター、妙高市は市立妙高小学校と市立新井小学校、狛江市は市立狛江第一小学校、釧路市は市立朝陽小学校、岐阜市は市教育研究所と市立長良西小学校、土浦市は市立中村小学校、前橋市は桂萱東小学校と決定した。

講座回	日程	時程	講師	講座内容
第1回	5～7月上旬			第1回については、令和4年度第1回講座「学習指導要領の原点」を受講することとした。第2回～第3回講座は、令和2年度から令和4年度までの講座アーカイブから、各受講者がオンデマンドで受講した。
第2回				
第3回				
第4回	7月26日(水)	9:00～10:30	井熊ひとみ(J-SHINE理事)	釧路市授業研究:「聞くこと」「話すこと」の指導
第5回		10:40～12:10	石鍋浩、坂本純一(明海大学)	狛江市授業研究:小中接続
第6回	7月31日(月)	9:00～10:30	井熊ひとみ(J-SHINE理事)	横手市授業研究:「聞くこと」「話すこと」の指導
第7回		10:40～12:10	井熊ひとみ(J-SHINE理事)	足立区授業研究:「聞くこと」「話すこと」の指導
第8回	8月3日(木)	9:00～10:30	井熊ひとみ(J-SHINE理事)	いわき市授業研究:「聞くこと」「話すこと」の指導
第9回		10:40～12:10	百瀬美帆、米村珠子、パトリツィア、タイソン(明海大学)	妙高市授業研究:ティーム・ティーチング
第10回	8月17日(木)	9:00～10:30	井熊ひとみ(J-SHINE理事)	前橋市授業研究:「聞くこと」「話すこと」の指導
第11回		10:40～12:10	池田周(愛知県立大学教授)	浦安市授業研究:「読むこと」「書くこと」の指導
第12回	8月22日(火)	9:00～10:30	金子義隆(明海大学)	岐阜市授業研究:学習評価
第13回		10:40～12:10	百瀬美帆、米村珠子、パトリツィア、タイソン(明海大学)	土浦市授業研究:ティーム・ティーチング
第14回		9月12日(火)	15:20～16:20	吉田研作(日本英語検定協会会長・上智大学名誉教授)
第15回	10月19日(木)	15:20～16:20	吉田研作(日本英語検定協会会長・上智大学名誉教授)	小学校英語の指導に当たって求められる教師の力と小学校英語担当者に期待すること

3. 検討委員会設置要綱、委員名簿及び検討委員会議事概要

本事業を円滑に遂行するため、以下のとおり、設置要綱及び構成メンバーを定めた。また、検討委員会は3回実施した。議事概要も併せて示す。

(設置目的)

第1 明海大学は、文部科学省から委託認可を受けた「令和5年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業(以下、「本事業」という。)」を遂行するため、標記の検討委員会(以下、「MEIKAI-JOEプラス2023 (MEIKAI, J-SHINE and Office of Education Plus2023 ; メイカイ・ジョー・プラス2023)検討委員会」という。)を設置し、本事業を遂行する。

(検討内容)

第2 MEIKAI-JOE プラス2023検討委員会は、次の事項を所掌する。

- (1) 本事業の全体進行管理に関すること。
- (2) 本事業に係る連携教育委員会との間の調整に関すること。
- (3) 本事業の在り方及び成果目標の検討に関すること。
- (4) 本事業の中間評価の実施及び改善策の検討に関すること。
- (5) 本事業の成果公表に関すること。
- (6) その他必要な事項に関すること。

(構成)

第3 MEIKAI-JOE プラス2023検討委員会は、次の委員をもって構成する。

明海大学教員、協力機関(J-SHINE、公益財団法人日本英語検定協会及び小学校英語教育学会愛知支部理事)、足立区教育委員会、浦安市教育委員会、横手市教育委員会、いわき市教育委員会、妙高市教育委員会、狛江市教育委員会、釧路市教育委員会、岐阜市教育委員会、土浦市教育委員会、前橋市教育委員会の職員

2 MEIKAI-JOE プラス2023検討委員会には、委員長及び副委員長を置く。

3 委員長は、明海大学副学長の職にある者を当てる。

4 副委員長は、委員長が指名する。副委員長は、委員長を補佐し、委員長が不在のときはその職務を代理する。

5 委員長は、必要があると認めるときは、関係者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

6 委員は、別表1のとおりとする。

(設置期間)

第4 MEIKAI-JOE プラス2023検討委員会の設置期間は、MEIKAI-JOE プラス2023検討委員会が設置された日から令和6年3月21日までとする。

(講座開発・実施チーム)

第5 MEIKAI-JOE プラス2023検討委員会の下に、専門人材の育成・確保のための講座内容を決定し実施するための、講座開発・実施チームを設置する。

2 講座開発・実施チームの委員は、別表2のとおりとする。

(庶務)

第6 MEIKAI-JOE プラス2023 検討委員会の庶務は、明海大学企画広報課及び明海大学地域学校教育センターにおいて処理する。

(その他)

第7 この要綱に定めるもののほか、MEIKAI-JOE プラス2023検討委員会の運営に関し必要な事項は、明海大学企画広報課及び明海大学地域学校教育センターが別に定める。

附 則

この要綱は、令和5年4月3日から施行する。

1 MEIKAI-JOEプラス2023検討委員会 委員名簿

別表1

	氏名	所属部署・職名	役割分担(専門分野等)
明海大学	高野 敬三	副学長	委員長 (教育行政、英語教育等)
	石鍋 浩	教職課程センター・ 地域学校教育センター教授	講座開発・実施リーダー (学校経営、英語教育等)
	金子 義隆	教職課程センター・ 地域学校教育センター教授	講座開発・実施サブリーダー (応用言語学、第二言語習得、英語教育等)
協力機関	吉田 研作	公益財団法人日本英語検定協会会長 (上智大学名誉教授)	副委員長、講座開発・実施チーフアドバイザー等 (英語教育、言語学)
	井熊 ひとみ	J-SHINE理事(共愛学園前橋国際大学客員教授、 育英短期大学非常勤講師)	講座開発・実施アドバイザー等 (言語学、英語教育)
	池田 周	小学校英語教育学会愛知支部理事 (愛知県立大学外国語学部教授)	講座開発・実施アドバイザー等 (英語教育、言語学)
	Michael Todd Fouts	公益財団法人日本英語検定協会総務部 PRアンバサダー	講座開発・実施アドバイザー等
連携教育 委員会	田巻 正義	足立区教育委員会 学力定着推進課長	講座開発・実施推進調整担当
	勝田 紀仁	浦安市教育委員会 指導課主幹	講座開発・実施推進調整担当
	赤川 美和子	横手市教育委員会 教育指導課長	講座開発・実施推進調整担当
	林 裕一	いわき市教育委員会 総合教育センター研修調査室長	講座開発・実施推進調整担当
	飯塚 教裕	妙高市教育委員会 こども教育課参事	講座開発・実施推進調整担当
	柳田 裕司	狛江市教育委員会 教育部指導室統括指導主事	講座開発・実施推進調整担当
	齊藤 崇	釧路市教育委員会 教育支援課総括指導主事	講座開発・実施推進調整担当
	平木 裕	釧路市教育委員会 教育支援課外国語教育アドバイザー	講座開発・実施推進調整担当
	小出 直弘	岐阜市教育委員会 学校指導課長	講座開発・実施推進調整担当
	田上 秀之	土浦市教育委員会 指導課長	講座開発・実施推進調整担当
田村 裕之	前橋市教育委員会 学校教育課長	講座開発・実施推進調整担当	

2 MEIKAI-JOEプラス2023 検討委員会事務局

	氏名	所属部署・職名	役割分担(専門分野等)
事務局	永田 美絵	企画広報課長	全体統括
	磯見 隆行	企画広報課課長補佐	経理事務・広報総括
	釜澤 萌	企画広報課係長	経理事務・広報
	辻井 文男	企画広報課主任	経理事務・広報
	玉貫 美幸	学事課・教務担当	経理事務補助
	坂本 純一	教職課程センター・地域学校教育センター教授	調整担当
	米村 珠子	教職課程センター・地域学校教育センター教授	調整担当

3

検討委員会議事概要

会 議 名	第1回検討委員会
日 時	令和5年5月9日(火) 午前9時00分から1時間程度
場 所	Zoomによる開催
出席者(敬称略)	高野委員長、吉田副委員長、石鍋委員、金子委員、井熊委員、池田委員、田巻委員、勝田委員、赤川委員、林委員、飯塚委員、柳田委員、齊藤委員、平木委員、小出委員、田上委員、田村委員
<p>【議題】</p> <p>1 検討委員会委員長あいさつ 明海大学副学長 高野 敬三</p> <p>2 協議</p> <p>(1) 事業実施計画等について</p> <p>(2) オンデマンド講座(第1回から第3回)における振り返りシートについて</p> <p>(3) 授業研究について</p> <p>(4) 講座評価アンケートについて</p> <p>(5) リフレクションシートについて</p> <p>(6) 「Zoomによる小学校英語・なんでも相談交流室」について</p> <p>(7) 講座配信への参加方法の説明について</p> <p>(8) 授業動画の撮影について</p> <p>(9) 今後送付する内容等について</p> <p>3 その他</p> <p>⇒特になし。</p> <p>4 検討委員会副委員長あいさつ</p> <p>公益財団法人日本英語検定協会会長(上智大学名誉教授)吉田 研作</p> <p>* 協議の結果、すべてに異論なし。</p>	

会 議 名	第2回検討委員会
日 時	令和5年10月5日(木) 午前9時から1時間程度
場 所	Zoomによる開催
出席者(敬称略)	高野委員長、吉田副委員長、石鍋委員、金子委員、井熊委員、池田委員、田巻委員、勝田委員、赤川委員、林委員、飯塚委員、柳田委員、齊藤委員、平木委員、小出委員、田上委員、田村委員
<p>【議題】</p> <p>1 検討委員会委員長あいさつ 明海大学副学長 高野 敬三</p> <p>2 協議</p> <p>(1) 講座評価アンケート結果について</p> <p>(2) 振り返りシート及びリフレクションシート記述概要について</p> <p>(3) MEIKAI-JOE プラス2023 出席者数一覧について</p> <p>(4) MEIKAI-JOE プラス2023 報告書について</p> <p>3 その他</p> <p>⇒特になし。</p> <p>4 検討委員会副委員長あいさつ</p> <p>公益財団法人日本英語検定協会会長(上智大学名誉教授)吉田 研作</p> <p>* 協議の結果、すべてに異論なし。</p>	

会 議 名	第3回検討委員会
日 時	令和6年3月7日(木) 午前9時から1時間程度
場 所	Zoomによる開催
出席者(敬称略)	高野委員長、吉田副委員長、石鍋委員、金子委員、井熊委員、池田委員、田巻委員、勝田委員、赤川委員、林委員、飯塚委員、柳田委員、齊藤委員、平木委員、小出委員、田上委員、田村委員
<p>【議題】</p> <p>1 検討委員会委員長あいさつ 明海大学副学長 高野 敬三</p> <p>2 協議</p> <p>(1) MEIKAI-JOEプラス2023各講座出席者数について</p> <p>(2) 講座内容に対する評価について(第14回、第15回)</p> <p>(3) 講座受講による意識の変容について(第14回、第15回)</p> <p>(4) 「Zoomによる小学校英語・なんでも相談交流室」の実施内容について</p> <p>(5) 講座運営に対する評価について</p> <p>(6) 各教育委員会からの総括</p> <p>(7) 各講師からの総括</p> <p>3 その他</p> <p>⇒特になし。</p> <p>4 検討委員会副委員長あいさつ</p> <p>公益財団法人日本英語検定協会会長(上智大学名誉教授)吉田 研作</p> <p>* 協議の結果、すべてに異論なし。</p>	

4. 講座開発・実施チーム設置要項及び講座開発・実施チーム委員名簿

本事業を円滑に遂行するため、以下のとおり、設置要項及び構成メンバーを定めた。

1 設置要項

令和5年4月3日

講座開発・実施チームに係る設置要項

(設置)

第1 明海大学は、文部科学省から委託認可を受けた「令和5年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業(以下、「本事業」という。)」を遂行するため、「令和5年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業に係る明海大学とJ-SHINE等及び連携教育委員会との検討委員会設置要綱第5に規定された、講座開発・実施チームを設置する。

(検討内容)

第2 講座開発・実施チームは、本事業を遂行するために、文部科学省から認可を受けた本事業の事業実施計画書に示した講座を開発し実施する。

- (1) 第4回～第15回講座における事前課題・講座資料・事後課題の作成に関すること。
- (2) オンライン講座の実施に関すること。
- (3) 各講座間の調整に関すること。
- (4) その他必要な事項に関すること。

(構成)

第3 講座開発・実施チームは、次の各号に掲げる委員をもって構成する。

- (1) 明海大学教員、協力機関(J-SHINE、公益財団法人日本英語検定協会及び小学校英語教育学会愛知支部理事)、足立区教育委員会、浦安市教育委員会、横手市教育委員会、いわき市教育委員会、妙高市教育委員会、狛江市教育委員会、釧路市教育委員会、岐阜市教育委員会、土浦市教育委員会、前橋市教育委員会の職員
- 2 講座開発・実施チームには、講座開発統括責任者及び講座開発・実施リーダーと講座開発・実施サブリーダーを置く。
- 3 講座開発統括責任者は、明海大学副学長の職にある者を当てる。
- 4 講座開発・実施リーダーは、講座開発統括責任者が指名する。講座開発・実施リーダーは本事業の講座の内容決定や実施に係る職務に当たるとともに、講座開発統括責任者を補佐し、講座開発統括責任者が不在のときはその職務を代理する。
- 5 講座開発・実施サブリーダーは講座開発・実施リーダーを補佐する。
- 6 全15回の講座の実施に関して、講座開発・実施チーフアドバイザーの下、講座開発・実施アドバイザーを置く。チーフアドバイザー及びアドバイザーは全15回の講座内容や実施方法などについて指導・助言を行う。
- 7 委員は、別表2のとおりとする。

(設置期間)

第4 講座開発・実施チームの設置期間は、講座内容・実施チームが設置された日から令和6年3月21日までとする。

(再委託機関)

第5 講座開発・実施チームが円滑に講座を実施するために、(株)ハルを本事業の再委託機関とする。
2 再委託機関は講座開発・実施チームと連携して事業の遂行に当たる。

(庶務)

第6 講座開発・実施チームの庶務は、明海大学地域学校教育センター及び明海大学企画広報課において処理する。

(その他)

第7 この要項に定めるもののほか、講座内容実施チームの運営に関し必要な事項は、明海大学地域学校教育センター及び明海大学企画広報課が別に定める。

附 則

この要項は、令和5年4月3日から施行する。

2 講座開発・実施チーム委員名簿

別表2

	氏名	所属部署・職名	役割分担(専門分野等)
明海大学	高野 敬三	副学長	検討委員会委員長、講座開発総括責任者
	石鍋 浩	教職課程センター・地域学校教育センター教授	講座開発・実施リーダー (学校経営、英語教育等)
	金子 義隆	教職課程センター・地域学校教育センター教授	講座開発・実施サブリーダー (応用言語学、第二言語習得、英語教育等)
	百瀬 美帆	教職課程センター・地域学校教育センター教授	講座開発・実施担当者 (英語教育等)
	坂本 純一	教職課程センター・地域学校教育センター教授	講座開発・実施担当者 (学校経営、英語教育等)
	米村 珠子	教職課程センター・地域学校教育センター教授	講座開発・実施担当者 (学校経営、英語教育等)
	Patrizia Hayashi	多言語コミュニケーションセンター教授	講座開発・実施担当者 (英語教育等)
	Tyson Rode	多言語コミュニケーションセンター准教授	講座開発・実施担当者 (英語教育等)
協力機関	吉田 研作	公益財団法人日本英語検定協会会長 (上智大学名誉教授)	検討委員会副委員長、 講座開発・実施アドバイザー等 (英語教育、言語学)
	Michael Todd Fouts	公益財団法人日本英語検定協会総務部 PRアンバサダー	講座開発・実施アドバイザー等
	池田 周	小学校英語教育学会愛知支部理事 (愛知県立大学外国語学部教授)	講座開発・実施アドバイザー等 (英語教育、言語学)
	井熊 ひとみ	J-SHINE理事(共愛学園前橋国際大学客員教授、 育英短期大学非常勤講師)	講座開発・実施アドバイザー等 (言語学、英語教育)
	鈴木 菜津美	J-SHINE事務局長	講座開発・実施アドバイザー等
連携教育委員会	三輪 政継	足立区教育委員会 学力定着推進課統括指導主事	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)
	高島 健治	浦安市教育委員会 指導課主任主事	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)
	鈴木 真弓	横浜市教育委員会 教育指導課指導主事	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)
	松尾 修吾	いわき市教育委員会 総合教育センター研修調査室指導主事	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)
	重野 準司	妙高市教育委員会 こども教育課指導主事	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)
	吉田 浩幸	狛江市教育委員会 教育部指導室指導主事	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)
	吉岡 康一郎	釧路市教育委員会 教育支援課指導主事	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)
	佐藤 美里	釧路市教育委員会 教育支援課指導主事	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)
	上田 卓	岐阜市教育委員会 学校指導課主査	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)
	杉本 高久	土浦市教育委員会 指導課指導主事	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)
	戸塚 智子	前橋市教育委員会 学校教育課指導主事	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)
	阿部 恵一	前橋市教育委員会 学校教育課指導主事	講座開発・実施推進調整担当者 (英語教育等)

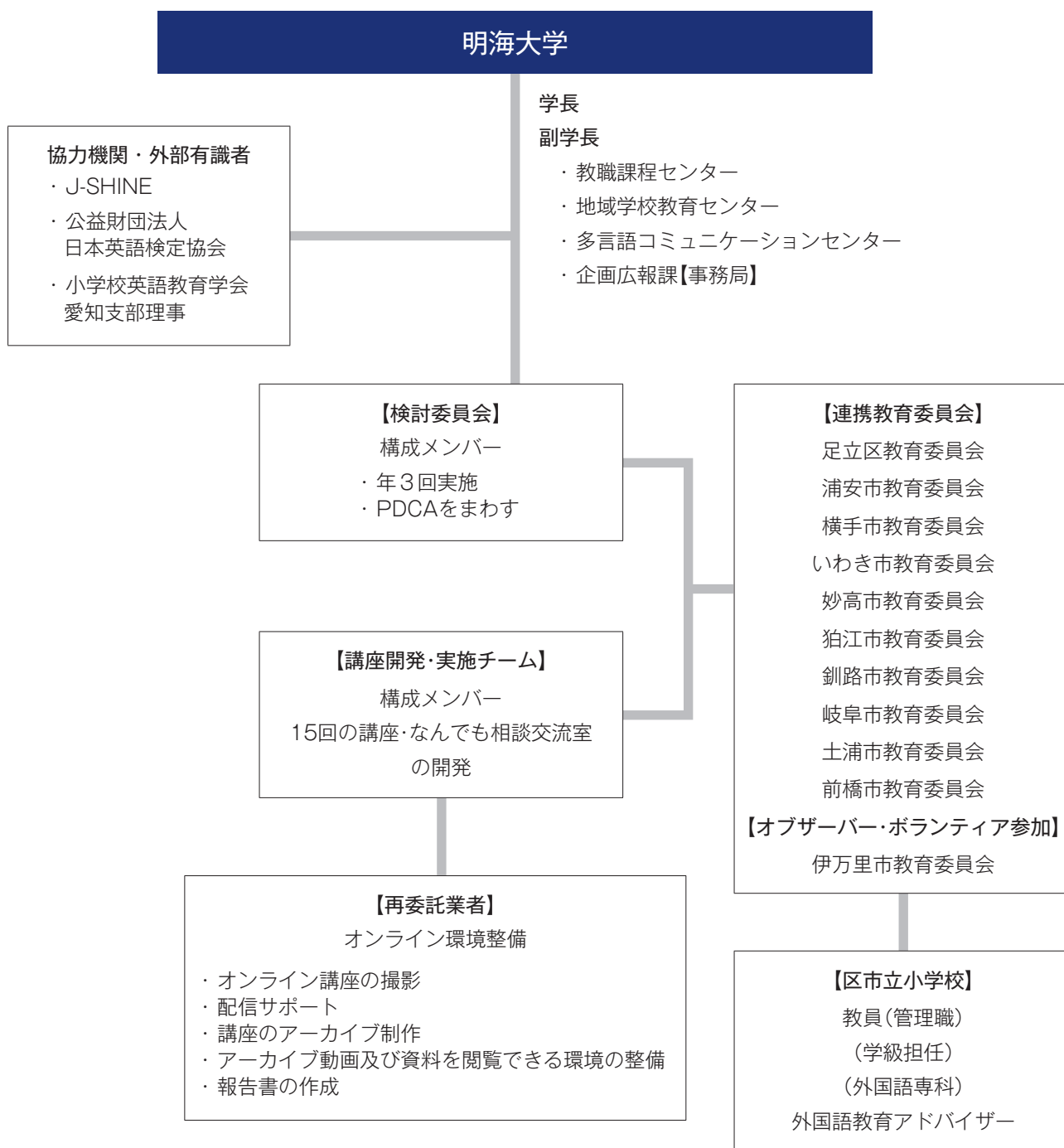
再委託機関 (株)ハル

	氏名	所属部署・職名	役割分担(専門分野等)
再委託 機 関	武藤 雅飛	(株)ハル 執行役員	委託業務統括責任者
	木藤 美紗希	(株)ハル 第1営業部	委託業務担当者
	畑 季枝	(株)ハル 第2営業部	委託業務担当者

講座開発・実施チーム 事務局

	氏名	所属部署・職名	役割分担(専門分野等)
事 務 局	永田 美絵	企画広報課長	全体統括
	磯見 隆行	企画広報課課長補佐	経理事務・広報総括
	釜澤 萌	企画広報課係長	経理事務・広報
	辻井 文男	企画広報課主任	経理事務・広報
	坂本 純一	教職課程センター・地域学校教育センター教授	全体統括
	米村 珠子	教職課程センター・地域学校教育センター教授	全体統括
	玉貫 美幸	学事課・教務担当	経理事務補助

5. 組織図:協力・連携体制



II

講座概要



第1回講座～第3回講座 オンデマンド講座

第1回講座については、本学から令和4年度第1回講座「新学習指導要領の原点」を指定し、214人が受講した。

第2回講座から第3回講座までは、これまで本学が実施してきた令和2年度から令和4年度までのアーカイブ講座(下表)の中から2つの講座を選択し、オンデマンドで視聴して受講する講座とした。その際、各教育委員会が「期間・講座を指定」、「日時・講座を指定」、「期間のみ指定」、「学校が日時を指定」の4つの方法から選択し、次ページの表のとおり指示した。実際に受講者が選択・視聴した講座ごとの人数は、下表のとおりである。

オンデマンド講座の受講者数(第2回と第3回講座の合計) ※網掛けは授業研究講座

テーマ	令和2年度	令和3年度	令和4年度	計
①現行学習指導要領の趣旨	第1回講座 1人	第1回講座 1人		2人
②聞くこと・話すことの指導		第4回講座 5人 第5回講座 4人 第8回講座 1人 第9回講座 5人 特設講座 1人	第3回講座 62人 第9回講座 7人 第11回講座 2人	87人
③読むこと・書くことの指導		第2回講座 8人 第7回講座 1人	第4回講座 16人 第8回講座 5人	30人
④Small Talk	第3回講座 33人			33人
⑤学習評価	第4回講座 8人		第5回講座 28人	36人
⑥チーム・ティーチング	第2回講座 33人	第3回講座 12人 第10回講座 2人	第2回講座 20人 第7回講座 9人 第10回講座 14人	90人
⑦小中接続	第5回講座 4人	第6回講座 9人	第6回講座 21人 第12回講座 2人	36人

○第2回講座と第3回講座の受講者数は、延べ314人である。

○授業研究講座(網掛け部分)の受講者数は、49人である。

テーマごとの受講者数の割合は、「①聞くこと・話すことの指導」及び「⑥チーム・ティーチング」がそれぞれ約3割、「③読むこと・書くことの指導」、「④ Small Talk」、「⑤学習評価」、「⑦小中接続」がそれぞれ約1割であった。

「①聞くこと・話すことの指導」が約3割を占めたのは、小学校学習指導要領で、「音声で十分に慣れ親しませる」指導や、「自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句を聞き取るようにする」指導や、「日常生活に関する身近で簡単な事柄について話すようにする」指導が小学校の基本であることの現れであると考えられる。

また、「⑥チーム・ティーチング」も約3割を占めたのは、小学校学習指導要領で、「授業を実施するに当たっては、ネイティブ・スピーカーや英語が堪能な地域人材などの協力を得る等、指導体制の充実を図るとともに、指導方法の工夫を行うこと」とされているが、チーム・ティーチングに慣れていないため、具体的な指導方法を知りたいことを反映していると考えられる。

オンデマンド講座 受講内容・実施期間など

教育委員会	第1回講座(必修)	第2回講座	第3回講座
足立区	○期間・講座を指定 5/15(月)～6/9(金) R4第1回新学習指導要領の原点	○期間のみ指定 6/12(月)～7/14(火)	○期間のみ指定 6/12(月)～7/14(火)
浦安市	○期間・講座を指定 5/19(金)～6/2(金) R4第1回新学習指導要領の原点	○期間のみ指定 6/5(月)～6/20(火)	○期間のみ指定 6/21(水)～7/5(水)
横手市	○期間・講座を指定 5月～6月下旬 R4第1回新学習指導要領の原点	○期間・講座を指定 6/1(木)～6/30(金) R4第10回授業研究④横手市	○期間・講座を指定 7/3(月)～7/25(火) R4第3回聞くこと・話すこと
いわき市	○日時・講座を指定 5/23(火) 15:20～16:20 R4第1回新学習指導要領の原点	○期間のみ指定 5/24(水)～6/5(月)	○期間のみ指定 5/24(水)～6/5(月)
妙高市	○日時・講座を指定 5/24(水) 15:30～ R4第1回新学習指導要領の原点	○期間を指定 ○学校が日時を指定 6/1(木)～7/10(月)	○期間を指定 ○学校が日時を指定 6/1(木)～7/10(月)
狛江市	○期間・講座を指定 5/10(水)～6/30(金) R4第1回新学習指導要領の原点	○期間のみ指定 5/10(水)～6/30(金)	○期間のみ指定 5/10(水)～6/30(金)
釧路市	○日時・講座を指定 6/1(木) 15:00～ R4第1回新学習指導要領の原点	○期間のみ指定 5/24(水)～7/21(金)	○期間のみ指定 5/24(水)～7/21(金)
岐阜市	○日時・講座を指定 5/19(金) 14:30～ R4第1回新学習指導要領の原点	○期間・講座を指定 5/19(金)～6/30(金) R4第5回パフォーマンス評価	○期間・講座を指定 5/19(金)～6/30(金) R4第6回小中接続
土浦市	○期間・講座を指定 5/1(月)～5/15(月) R4第1回新学習指導要領の原点	○期間・講座を指定 5/15(月)～5/22(月) R2第3回Small Talk	○期間・講座を指定 5/22(月)～5/31(水) R2第2回チーム・ティーチング
前橋市	○期間・講座を指定 5/22(月)～7/10(月) R4第1回新学習指導要領の原点	○期間のみ指定 5/22(月)～7/10(月)	○期間のみ指定 5/22(月)～7/10(月)
伊万里市(佐賀県)	(オブザーバー参加)		

概要及び講座を選択した理由

ここでは、視聴を指定した令和4年度第1回講座の概要と、テーマごとに最も視聴者数が多かった講座の概要及び受講者が当該講座を選択した理由を記す。

1 令和4年度第1回講座「新学習指導要領の原点」

【概要】

本講座では今回の学習指導要領が従来のものとどう違うのかについて説明した。なぜ、今回の学習指導要領が今までにないものになっているのかについて、その理論的背景を考えながら、具体的な教育理念と学習、指導のあり方について見ていった。現在はまだまだ「教室」という「金魚鉢」的な環境の中での英語教育が中心に議論されているが、今後は、そこで学んだ英語をどのように活かすかについて考えなければならなくなるであろう。現代のネット時代における「教室」の概念は従来のものとは変わってきている。そして、そのような新時代の教育環境に見合った英語教育は、まさに「大海」で英語が使えることを念頭に置いたものでなければならない。本講座では、このような点について考えた。

2 令和4年度第3回講座「聞くこと」「話すこと」の指導

【概要】

「小学校外国語活動」・「外国語」の授業において学習指導要領に求められている目標を理解し、その技能や資質、能力をどのような手順で育成するかを学んだ。日本に育つ子供たちが英語に触れ、学ぶプロセスからコミュニケーションに意欲をもって学びを進められるかを先生方と一緒に探していった。そのための目的、場面設定、状況をどのように創り出していか、そのためにはどのようなコミュニケーションが必要で子供たちの気付きを促せるような活動を行うかを考えた。

【本講座を選択した理由】

本講座を選択した理由としては、「自分自身のニーズに適合していた」が最も多く、続いて「学校全体で決定した」「教育委員会から指定された」の順に多かった。

3 令和4年度第4回講座「読むこと」「書くこと」の指導

【概要】

小学校「外国語」では、「読むこと」の領域の目標イとして「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする」が設定されている。この目標に向けた指導について、小学校学習指導要領(平成29年告示)解説外国語・外国語活動編には、「児童の学習の段階に応じて、語の中で用いられる場合の文字が示す音の読み方を指導することとする。その際、中学校で発音と綴りとを関連付けて指導することに留意し、小学校では音声と文字とを関連付ける指導に留めることに留意する必要がある。」と述べられている(p. 78)。本講座では、この指導の目指すところは何か、また、どのような理論に基づくものかの理解を目標とするとともに、そこから発展させた「読むこと」と「書くこと」の領域の指導における支援や工夫のあり方について具体的に考えた。

【本講座を選択した理由】

本講座を選択した理由としては、「自分自身のニーズに適合していた」が最も多く、続いて「教育委員会から指定された」「学校全体で決定した」の順に多かった。

4 令和2年度第3回講座「Small Talkの実際とデジタル教科書への接続」

【概要】

令和2年度から始まった外国語科および外国語活動におけるSmall Talkの実際と教科書のより効果的な使い方を知ることができる内容とした。なお、講師によるMicro Teaching (Small Talkや必然的なActivityなどを含む)を実施する。講座の中で、講師と受講者とのやり取りを随時行った。(ワークショップ型)。

【本講座を選択した理由】

本講座を選択した理由としては、「自分自身のニーズに適合していた」が最も多く、続いて「教育委員会から指定された」「学校全体で決定した」の順に多かった。

5 令和4年度第5回講座「言語活動の効果高めるための工夫とパフォーマンス評価」

【概要】

本講座では、「言語活動」の基本的な考え方を確認した後に言語活動の効果高めるための工夫を受講者と共に考えた。学習指導要領で意図された言語活動を実践するために3つの工夫(必然性のある場面設定、インタラクションの働き、フィードバック)について扱った。最後に、評価の基本的な考え方について確認した。

【本講座を選択した理由】

本講座を選択した理由としては、「教育委員会から指定された」が最も多く、続いて「自分自身のニーズに適合していた」「学校全体で決定した」の順に多かった。

6

令和2年度第2回講座「効果的なチーム・ティーチングの在り方」

【概要】

チーム・ティーチングにおける学級担任の役割、ALTの役割について理解できる内容とした。具体的には、ALTとの親和関係の構築方法や有用表現を紹介した後、それらの知識や技能を応用して授業前の打合せに必要なALTとのやりとりや、絵本の読み聞かせなどの活動指導におけるALTとのやりとりを受講者同士またはALT役の講師と練習した。講座中に講師と受講者とのやり取りを随時行った(ワークショップ型)。

【本講座を選択した理由】

本講座を選択した理由としては、「自分自身のニーズに適合していた」が最も多く、続いて「教育委員会から指定された」「学校全体で決定した」の順に多かった。

7

令和4年度第6回講座「学校段階間の接続の重要性」

【概要】

小学校段階において育むべき資質・能力を、三つの柱に沿って、教育課程全体及び教科等ごとに明確化し、中学校以後の学びに円滑に接続させることが求められている。本講座では、各地区における学校段階間の接続の成果と課題を出し合い、小学校から中学校以後の指導へ円滑に接続できるようにするための指導方法や言語活動等について考えた(講義・協議型)。

【本講座を選択した理由】

本講座を選択した理由としては、「教育委員会から指定された」が最も多く、続いて「自分自身のニーズに適合していた」「学校全体で決定した」の順に多かった。



授業研究①

聞くこと・話すことの指導

授業者氏名 加藤さと美
 学校名 釧路市立朝陽小学校
 担当学年 第6学年
 使用教科書 NEW HORIZON Elementary English Course 6
 単元名 Unit3 Let's go to Italy
 講師 井熊ひとみ(J-SHINE理事 共愛学園前橋国際大学客員教授 育英短期大学非常勤講師)

参加者

拠点校
77名拠点校外
65名

概要

釧路市の授業研究テーマは「聞くこと・話すことの指導」で、第6学年の授業を提案した。本実践では、「友達と行きたい国やその理由について伝え合うことができる」を本時のゴールイメージとし、児童が自分の考えや気持ちを互いに伝え合う言語活動を繰り返し行うことを通して、ターゲットセンテンスを使い慣れることができるように授業を組み立てた。協議では、そうしたねらいの授業展開となっていたか、児童は言語活動を通してゴールに迫ることができたかについて検討を行った。



研究授業のふりかえり



導入

あいさつ： 既習事項を含めて進められている
 6年生という就学から、よりスムーズな進行（速度）が出せる可能性
 日付や曜日は、スペル確認なども短く行い、頻度の効果

Flag Quiz： 画面を利用した効果とW/UP 復習 ⇒ 本時のテーマへ
 Chant： 生徒全体 Where do you want to go? ALT: I want to go to...
 ALTの行きたい国クイズ：
 列ごとに行きたい国を決めて Q&A ⇒ 英語らしいリズムのやりとり練習
 生徒全体 (Ss) ⇒ Where do you want to go? ⇒ ALT が行きたい国は？
 段階をおって、グループの練習ができる効果。

本時の目標を児童と共有する：行きたい国をたずね合う

導入から

- ① 全体練習⇒グループ練習⇒ペア活動への移行効果
- ② リズムボックスを使用するナチュラルな英語へのドリル活動
- ③ 本時の目標を2段階に分けて進行する計画 国のみ ⇒ 理由をつけて

事前課題

授業動画(釧路市立朝陽小学校)の視聴

協議概要

【協議の視点】コミュニケーションを行う目的・場面・状況を設定し、児童が自分の考えや気持ちを伝え合う言語活動を繰り返し行うことで、相手意識をもち、ターゲットセンテンスを使い慣れるよう、授業が組み立てられていたか。

[成果]

- ・ 児童が興味をもって楽しんで取り組むことができるような授業の展開が必要だと感じた。目的・場面・状況を具体的にし、児童自ら「やりたい」と思えるよう、工夫をしていくことが大切だと学んだ。
- ・ 聞く活動における対話の活用の必要性、活動の必然性・目的の設定の大切さを感じた。
- ・ 授業冒頭から教師やALTがモデルを提示する際に「リキャスト」や「リアクション」を行っていたため、児童は自然にリキャストに挑戦することができていた。
- ・ ターゲットセンテンスを焦点化し、授業の序盤から終盤まで使い込んでいたことが良かった。
- ・ 単に、ターゲットセンテンスの練習をするのではなく、やり取りを行う中で使えるようになっていくのだと、改めて感じた。
- ・ やり取りのモデルを丁寧に示すことや、言い方が分からない児童への支援のタイミングなどを学ぶことができた。ま

た、「リキャスト」「リアクション」を意識させる教師のモデリングや言葉がけなども大変勉強になった。

- ・話すことについての指導をする際、児童が自信を持つためにメモを取らせることがあったが、今回の授業実践を見て、メモを取らずに繰り返し練習することで、実際の「会話」と同じように学習することができると感じた。

[課題・代案]

- ・今回の実践では、理由が思い浮かばない児童や、国の名前が思い浮かばない児童がいるのではないかと話題がでていた。児童が自由な発想で考える活動はとても大切だが、実態によって、最初は「この中から」という指定があるとよいと感じた。
- ・今回の授業で、児童はスラスラと英語を話していたが、普段の授業では伝える内容を整理する時間が必要だと感じた。
- ・理由を伝える場面があったが、まだ情報が少ない段階でもあったため、使う情報を最初の段階ではしぼって行うことが効果的なのではないかと考えた。
- ・なぜその国に行きたいのかを英語で表現しようとする際、教師から提示するのではなく、児童が考えてやってみる時間があってもおもしろいと感じた。

第5回講座

令和5年7月26日(水)午前10時40分~午後12時10分

授業研究② 小中接続

[講座詳細ページ▶](#)

授業者氏名	福長あおい 伊藤裕美 真野朝子
学校名	狛江第二中学校 狛江第三小学校 狛江第六小学校
担当学年	小学校第6学年 中学校第1学年
使用教科書	小学校 JUNIOR TOTAL ENGLISH 中学校 Here We GO!
単元名	小学校「Lesson9 Who is this?」 中学校「Unit6 Cheer Up, Tina」
講師	石鍋浩 坂本純一(明海大学教職課程センター・地域学校教育センター 教授)

参加者

拠点校
77名

拠点校外
62名

概要

狛江市では令和4年度から中学校区でのコミュニティ・スクールとしての取組を推進している。今回は、狛江第二中学校の学区にある狛江第三小学校、狛江第六小学校の6年生を対象に、狛江第二中学校の1年生が自校の先生を英語で紹介する学習を展開した。単元で育む資質・能力の育成だけでなく、進学先の先生を知ることによる進学への不安の軽減、英語を話す中学生への憧れをねらいとしている。小中連携について気付いた点や各地区の実践について、協議を深めた。



授業研究②

未知の単語の使用



事前課題

授業動画(狛江第二中学校 狛江第三小学校 狛江第六小学校)の視聴



協議概要

【協議の視点①】英語科を軸とした小中連携としてふさわしいものであったか。

○良かった点

- ・中学生が相手意識をもっており、また連携の意図が明確であった。
- ・中学生にとっては自分の英語が伝わる達成感があり、小学生にとっては進学先の教員を知ることができる安心感があつたと思う。
- ・中学校生活への見通し、先輩への憧れをもたせることができる授業であった。
- ・既習を生かした学びで、小学生にも分かりやすくなっていた。
- ・小学生に理解できるよう、絵などを使いながら分かりやすく説明していた。

○課題・改善点等

- ・リアルタイムで直接交流できたら、中学生がより達成感を感じられたのではないか。
- ・2つの小学校での実践を統一できればよかったのではないか。
- ・三単現の「s」の扱いが、小学校の内容と合わないのではないか。
- ・スタートが、「小学生から中学生へのお願い」という形式を取れば、より意欲的な取組になる。
- ・小学生が受け身になってしまう。小学生からレスポンスが必要だと感じる。
- ・中学生のアクティビティとしてはよかったが、指導内容との整合性はどうか。

【協議の視点②】地区の英語科に関する小中連携の実践紹介

- ・小中一貫校の取組として、常日頃、各種のテスト内容及び結果を共有し、課題を見出している。
- ・小学校1年生から大使館等との交流を行っている。
- ・中学校の教員が出前授業を行っている。中学校での体験入学の際、英語の体験授業を受けている。
- ・中学校籍の教員が市内小学校の数校で5・6年生対象に授業をしている。
- ・パフォーマンステストの形式を小・中学校で揃えている。
- ・外国語教育の研修会を小・中学校合同で行い、情報交換もしている。

第6回講座

令和5年7月31日(月)午前9時~午前10時30分

授業研究③

聞くこと・話すことの指導

講座詳細ページ▶



授業者氏名	小田島 李花
学校名	横手市立横手北小学校
担当学年	第4学年
使用教科書	Let's Try! 2
单元名	Lesson3 I like Mondays.
講師	井熊ひとみ(J-SHINE理事 共愛学園前橋国際大学客員教授 育英短期大学非常勤講師)

参加者

拠点校
114名

拠点校外
78名

概要

横手市では、吉田研作名誉教授(上智大学)からご指導いただいた「Fish Bowl からOpen Seasへ」の考えの基、子供たちが繰り返し英語でコミュニケーションを図りながら、必要な語いや表現を自ら獲得していく学びを目指して、本授業を提案した。本動画には、単元(全4時間)の4時間目の学習場面を収めている。子供の気付きや問いを大切にしながら、「大海で生きる学び」を子供たちと共につくることができるように、参加者と一緒に考えていった。



研究授業のふりかえり



Opening

Routine Questions : 気分・天気・曜日のスムーズな進行
How **was** the weather yesterday? (昨日)
⇒ 今日、昨日まるごと英語で**事実に基づいて尋ねている**
Chant : 曜日のチャンツでWarm-up (復習)

Today's Goal

今日何をめあてて行うのかを児童と共有
⇒ HRTがよく児童に問いかけている様子

導入から

- ① 復習を行いつつ、**Classroom Englishがたくさんあって児童の反応が速い。**
- ② 曜日のチャンツについては、言いやすいので、**イニシャルサウンド(初頭音)**を意識してもよい。リズムボックスや手拍子などを活用してオプショ活動の可能性。
ex.) Gr1: Monday, m,m Gr2: Moon/Monkey/Mickey mouse etc… (既習事項?)
- ③ ゴールの共有について、単元の始めに立てたことを児童が覚えている (**目的can-doの共有**)

事前課題

授業動画(横手市立横手北小学校)の視聴

協議概要

(1)本実践に関して、参考にしたいこと

①音声面、態度面における、授業者の適切なモデル

ゆっくり明瞭に話すこと、ジェスチャーを交えながら受容的に相手と関わることなどにおいて、学級担任とALTの姿がモデルとなり児童の豊かなパフォーマンスにつながっている。児童がよく聞いて、まねることができるような授業づくりを行っている。

②英語での発話量の多さ

授業者のClassroom English使用への挑戦が大変よかった。また、児童にも英語の使用を促していて、英語で理解しやり取りすることが当たり前になっている。あいさつや天気・曜日などの一般的な表現に加え、授業中の指示や応答、やり取りをできるだけ英語で行うことは、英語での理解度を徐々に高め、英語使用への意欲を高めていることにつながっていた。

③よりよいコミュニケーションが意識された学び

相手の英語をよく聞き、受容的にやり取りをする児童の姿がよかった。相手の発話に対しても、好意的なリアクション(Nice./ I see./ Me,too.など)が自然に使われていた。日々の学級経営が英語でのコミュニケーションの素地や基礎を養う土台となっていることを感じた。楽しさ、あたたかさ、チャレンジのある授業だった。

④年間を通した目的意識と相手意識

今年度、授業者は「外国語活動を通して友達のことをもっとよく知ろう」という大きなテーマを設定している。そのため各単元の学びにおいても、目的をもってコミュニケーションを図り、次の見通しをもつことにもつながっていた。

⑤「英語で言いたかったけれど言えなかったこと」の共有

英語での言い方がわからない時は、「How do you say () in English?」を用いてALTにたずね、自らことばを獲得できるように支援していた。言語活動の中間シェアリングの際にも児童はこの表現によく慣れ親しんでいて、必

要な時に主体的に使用していた。

⑥ ICTの効果的な活用

学習支援ソフトMetaMoji Classroomを活用し、言語活動を通してわかった友達の情報(本時では好きな曜日)を記録していた。1年間の言語活動で収集した情報を、同一シートに記録できるように工夫がされていた。

(2)さらによりよい授業にするための改善案

①本時の目標「相手に伝わるように工夫して」において目指す姿を明確にもつこと。

目指す姿を明確にもつことで、本時のより早い段階で子供たちに意識付けをすることができる。例えば、「I like Sundays. I play baseball on Sundays.」のように曜日を加えて表現できることを目指すとすれば、「on Sundays」と加えて表現することを児童の姿を通して価値付ける。また、理由の適切さや豊かさに着目するならば、「I like Mondays. I play the piano. I play majono takkyubin(魔女の宅急便).」と表現している児童がいたので、中間評価などのシェアリングの際にこの点をもっと取り上げて、理由としての適切さ豊かさの視点を全体に広めていくこともできる。言語活動で目指す姿を明確にもつことで、よりねらいに迫った学びを展開することが可能となる。

②子供たちのインプット量を増やすためにも、指導者の英語での発話をさらに増やしていくこと。

③音への気付きを促すために、イニシャルサウンド(初頭音)を意識させること。

本単元では曜日を取り扱うので、「Monday mm…… Monkey」などの活動を適宜取り入れることで、楽しみながら、適切な音を獲得させることができる。

④やり取りで必要となるリアクション表現を増やし、より適切に選択できるようにすること。

今回は、Nice./ I see. / Me, too.などがよく使われていた。今後は徐々にバリエーションを増やし、状況に応じてより適切なものを児童が選択できるようにしていきたい。そのことがより生きた英語におけるコミュニケーションにつながる。

第7回講座

令和5年7月31日(月)午前10時40分~午後12時10分

授業研究④

講座詳細ページ▶



聞くこと・話すことの指導

授業者氏名	竹田 佐和子	参加者	拠点校	拠点校外
学校名	足立区新田学園 足立区立新田小学校		113名	68名
担当学年	第5学年			
使用教科書	NEW HORIZON Elementary English Course 5			
単元名	Unit 2 When is your birthday?			
講師	井熊ひとみ(J-SHINE理事 共愛学園前橋国際大学客員教授 育英短期大学非常勤講師)			

概要

足立区では、第5学年の授業を提案した。本動画では、単元目標「友達にバースデーカードを贈り、喜んでもらうために、誕生日や欲しいものなどを聞いたり答えたりし、伝え合おう。」のもと、本時のめあて「たん生日にほしいものについて、くわしく伝え合おう」を設定した。このめあてを具体的に実践するために、友達とのやり取りを繰り返していき、表現に十分に慣れ親しんだ上で、「くわしく」とは何かを考え、それにせまるために具体的な説明やそれを引き出すための質問



について子供たち同士で考えさせる場面を大事にした。子供たちが自分の言葉で進んでコミュニケーションを図るために効果的な指導方法について参加者と一緒に考えていった。

まとめ



- ① この単元目標「話すこと（やりとり）」に即した進行
- ② 児童に学習の目的が理解できるような指導者の導き
- ③ 児童の互いに聞き合ったり、教え合ったりする姿 関心や意欲をもった態度

提案として：

- ① 質問文を忘れてしまった、などの繰り返しの機会を与える ⇒ 定着による児童の自信練習とは目的に支えられた活動 ⇒ 何のために練習をするのかを児童が納得しているか。
- ② 文章が長くなると、「まるごと覚えている（状態の）」児童と、年齢から思考して自身の意見を持つことをふまえて、言いたいことがすぐに英語で表現することの困難さを実感する。「わかった」をどれだけ作れるか（繰り返しの練習）それを乗り越えるための「できた」「わかった」をどれだけ作れるか（繰り返しの練習）I want ～ の後ろをどう表現したらいいの。（知らなければ言えない）訊ねる側も、相手の情報を聞き出すために、どんな質問があるのか、（言えるための手段）条件の設定などで、言えることを増やす可能性はあるか。
- ③ やりとり＝答え方も同時にできるようにすること
⇒ 相手意識をもった聞き方と聞いた事への理解（Small Talkの活用）自分のほしいものをくわしく表現できるように支援する児童にとっての「くわしく」とは既習事項もふりかえりながら深める学び、スパイラルに学ぶことの意味を指導者が意識して活動に取り入れる工夫。

事前課題

授業動画(足立区新田学園 足立区立新田小学校)の視聴

協議概要

動画視聴にあたり、以下の視点を提示し、小グループに分かれて協議を行った。参加者から寄せられた主な意見を記す。

本時の目標を達成するための手立てについて

（「伝え合う活動」、「やり取りとやり取りの間の指導」を繰り返す展開は、本時のめあてを達成するために効果的であったか。）

【各市より】

- ・ 導入で2つの動画を見比べ、本時のめあてを児童と共に設定している点がとても参考になった。前半の動画は情報量が少なく伝わりにくいが、後半の動画は欲しい物について詳しく説明されていて分かりやすいことを子供たちに気付かせ、詳しく説明することの必要感をもたせていた。その結果、展開の「やり取り」で子供たちが主体的に考えて伝え合う活動につながっていた。
- ・ やり取りとやり取りの間の指導で「最初の質問の仕方がわからない」と言った児童に対して、先生が活動を止めて確認を全体行い、児童が言えるようになったことを確認してから、やり取りを再開していた。また、伝えたい内容があるが、どう表現したらよいかわからないときに、みんなで考え、様々な既習表現を活用して、自分たちで解決できるように先生がリードしていた。このような安心感を生み出す指導や配慮が、児童の意欲的なやり取りや思考の深まりに繋がっていた。
- ・ 黒板に表現を書かない理由について教えていただきたい。
→ しっかり耳で聞いて自分の中で自分の言葉として発言できるようにさせるという意図がある。黒板に表現を書いたり掲示をしたりすることで、自力で表現できる力があってもそこに頼ってしまう。新出語句を絵カードと共に掲示することはあるが、単元後半になり、子供たちが十分に慣れ親しんできたと判断したら、絵カードを掲示しないようにしている。

授業全体について

- ・ 子供たちの意欲が高い。
- ・ 担任の先生が登場した導入動画による動機付けが有効であった。
- ・ コミュニケーションの必然性があった。
- ・ 「伝え合う活動」「やり取りとやり取りの間の指導」の時間が十分に確保されていた。

授業研究⑤

講座詳細ページ▶



聞くこと・話すことの指導

授業者氏名	平樂 裕美
学校名	いわき市立小名浜第一小学校
担当学年	第5学年
使用教科書	NEW HORIZON Elementary English Course 5
单元名	Unit3 What do you want to study?
講師	井熊ひとみ(J-SHINE理事 共愛学園前橋国際大学客員教授 育英短期大学非常勤講師)

参加者

拠点校
63名拠点校外
51名

概要

いわき市では、「共に夢に向かってがんばっていくために、学びたい教科やなりたい職業を友達に伝えることを通して、英語で伝え合うことの楽しさや相手に伝わったことの喜びを感じながら、外国語学習に意欲的に取り組む児童の育成」というテーマで、第5学年の授業を提案した。本動画には、单元(8時間)の第4時の学習場面を収めている。児童が英語で伝え合う楽しさを体感するためのよりよい指導の在り方について協議した。



Activity

コミュニケーション活動①HRTとALTのやりとりをまねて練習する
コミュニケーション活動②中間支援(やりとり確認・単語確認)
コミュニケーション活動③と④ 今日のやりとり練習



⇒ ペア活動
⇒ ペア活動
⇒ ペア活動

活動から

- ①先生から与えられたいいいなやりとり例(モデル)は、子どもたちにとって**知る、わかる、理由があったか**。⇒ 場面・状況のわかりやすい設定が必要
時間割をつくる⇒勉強したい科目を伝える I want to study 科目。 **納得性のある必然があるか**
言わせる活動 < 言いたい活動になっているか
- ②複数の文章(復習も含め)によるやりとりがスムーズに行われていたか ⇒ 言えることで練習効果
言えない、言えていない状況が見られた時、どこまで戻る必要があるのか。
⇒全体で練習することができても、すぐに個人活動は難しい
- ③リアクションの示し方 ⇒ 「やりとり」には、リアクションをいれてみる。⇒自然な反応
④活動の合間の、中間支援⇒ 児童の理解の確認と、どこがよかったかを共有できる方法

事前課題

授業動画(いわき市立小名浜第一小学校)の視聴

協議概要

<成果として考えられる点>

- 教師の英語が聞き取りやすく、テンポがよかった。
- 英語ルームでの授業であったが、掲示物、四線黒板、電子黒板など児童が英語の学習する環境が十分に整えられていたのがよかった。
- 児童が積極的に活動に参加する様子がたくさん見られたのがよかった。
- 本時のめあてだけでなく、単元のゴールも示されている点よかった。
- クラスルームイングリッシュも効果的に取り入れられており、日本語で説明するべきところと適切に使い分けされているところがよかった。
- 活動と活動の間に児童の気付いた点を聞き取り、改善すべき点についても中間指導が入ったのがよかった。
- 振り返りシートでは振り返りの視点が細かく設定されていたのがよかった。

<改善や検討が必要と思われる点>

- "Hello. How are you?"などの定型的なあいさつは外国語活動で2年間経験しているので、もう少しテンポよく進

められるようにしたい。

- 児童が活動している様子から目的をもって活動に参加できていない児童の姿が見られた。ペアでのやり取り・小グループでのやり取りの活動の後に、学級全体でのやり取りを行わせることで、児童がスムーズに活動に参加できると思われる。
- 学習の流れが教科書をもとにしているが、本時の目標であれば、なりたい職業を聞き、その理由を聞くほうがコミュニケーションの流れからは自然である。
- 言語活動の中間指導の際に、教師の指導も大切ではあるが、もっと児童の発言から引き出したかった。友達とのやり取りの内容にも注目したほうがよいのではないか。

第9回講座

令和5年8月3日(木)午前10時40分～午後12時10分

授業研究⑥

講座詳細ページ▶



ティーム・ティーチング

授業者氏名	笠野 恭子
学校名	妙高市立新井小学校
担当学年	第6学年
使用教科書	Blue Sky
単元名	Unit2 Welcome to Japan.
講師	百瀬美帆(明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授)

参加者

拠点校
78名

拠点校外
30名

概要

妙高市では、6年生の授業を提案した。単元(全6時間)のゴールを「自分の住む地域やよく知っている場所の魅力を紹介することができる。」と設定し、本時(第4時)は単元のゴールを意識して、国内各地の写真を用いて、写真にある場所やものの魅力等を児童がペアでALTに紹介する活動を行った。当該ティーム・ティーチングにおける指導者の役割分担や児童への働きかけの在り方について協議した。



妙高市・新井小学校

授業研究⑥



3 指導技術 「相手意識」(PT/PT+指導)



事前課題

授業動画(妙高市立新井小学校)の視聴

協議概要

授業動画の視聴後、市区単位でグループ協議を実施した。以下に参加者から寄せられた主な意見を記す。

【良かった点、継続すべき点】

- ・ ALTと専科教員のチーム・ティーチングについて、言語面の壁がなく、2人が普段からとてもよい関わりをされていることが伝わり、スムーズな協力もあって、参考になった。
- ・ 黒板の左端に1単位時間の流れが示されていて、子供たちが見通しをもって活動できるようにしているところが素晴らしいと感じた。
- ・ フォニックスの指導が継続的になされていて、それが児童の学ぶ姿に色濃く反映されていると感じた。また、タブレット(ロイノート使用)でフォニックスの定着のための取組(言葉と絵を結びつける活動)を個々にさせていたので、とても参考になった。
- ・ ワークシートに、活動の目的が明示されていたり、見た目も分かりやすく紙面が工夫されていたりして、その作り方がとても参考になった。
- ・ 子供たちの活動の様子を見た時に、とても意欲的に活動していることが印象的だった。実際にALTにお薦めの場所を紹介しているペアはもちろん、それ以外の発表の準備をしている子供たちも熱心に準備していた。また、専科教員が準備をしている子供たちを支援している様子を見て、役割分担が素晴らしいと感じた。
- ・ ALTは基本すべて英語で伝えていたが、専科教員は子供たちの実態を踏まえて、日本語が必要な所は日本語を用いて、子供が考えやすいように進めていたのでよかった。
- ・ ALTに伝えるという目的意識がはっきりしていたため、子供たちが主体的に学習に取り組むことができている中で、子供たちがスキルを身に付けていっている様子が伺えた。
- ・ ALTが言ったことを、専科教員がジェスチャーを利用して説明し、子供たちに気付かせる働き掛けができていてよかった。

【課題点、代案等】

- ・ 子供たちがALTにお薦めの場所を伝えて、Good job.と言って○をつけてもらうことがあったが、いわゆるCan-doチェックのような形で終わっていた。やはりALTがいる意味は、子供たちに自分たちの英語が伝わる喜び、伝える喜びを味わわせることだと考える。ALTから子供たちの説明に直接的に関わるリアクション、例えば、「君の話聞いて行きたくなったよ、もっと知りたくなったよ」とか「君は行ったことあるの」といった問いかけがあれば、子供たちには伝える喜びや伝わる喜びをもっと味わわせることができたのではないかな。
- ・ 専科教員だけですべてのグループを支援することが時間的に難しいので、子供たち同士で教え合えるような機会を設定すれば、時間的に難しいという課題がクリアできるのではないかな。
- ・ ゴールについて、ALTに写真を用いて日本の素敵な所をたくさん紹介しようと子供たちの側から発信していたが、そうではなく、ALTから日本についてこんなことが知りたい、紹介するためにもっと教えてほしい、というように、ALT側からのアプローチがあると、もっと子供たちの積極性を引き出すことができたのではないかな。
- ・ せっかくALTがいるので、「〇〇先生が自分の国や行ったことのある国の説明をしてくれたから、次はみなさんが日本のことをALTに教えてあげよう」というように、ALTが先にモデルを示す流れがあるとよかったのではないかな。
- ・ 子供たちが発表する時に、ALTが目の前にいるので、発表の途中に、例えば、「あなたはここをどう思うの?」などと、ALTとのやり取りが1つ2つあると、コミュニケーションとしてもっと深まったのではないかな。
- ・ ALTのいるメリットを考えた時、例えば、本時のめあてを提示する時に、ALTとのデモンストレーションを通じて提示することも1つのよい方法ではなかったか。要は、日本語使用を減らす意味でも、できるだけALTの英語を聞いて生徒が気付く、理解できるような流れを第一に考えて指導することが重要ではないかな。



授業研究⑦

聞くこと・話すことの指導

授業者氏名 三輪 美鈴
 学校名 前橋市立桂萱小学校
 担当学年 第3学年
 使用教科書 Let's Try! 1
 単元名 Unit4 I like blue.
 講師 井熊ひとみ(J-SHINE理事 共愛学園前橋国際大学客員教授 育英短期大学非常勤講師)

参加者

拠点校
60名拠点校外
44名

概要

前橋市からは、授業テーマ「聞くこと・話すこと」で、第3学年の授業を提案した。児童に単元ゴールを明確に示し、意識させ、ゴールへ向かって何ができるようになるのか、児童自身が目的をもって活動に取り組めるよう工夫をした。「めあてステップ」の活用で単元ゴールに向かって見通しをもたせることが、児童の外国語活動に主体的に取り組むことができることに有効であったか、また、『教師とのやり取り』が児童のめあてに向かう活動に有効に働いたかの2つのポイントについて、協議した。



前橋市・桂萱東小学校

研究授業のふりかえり



Opening

Routine Questions: 気分・天気・曜日のスムーズな進行(自然な速度)
 Song
 1 Hello Song
 2 Seven Steps (1~7・7~1などのバリエーション)
 3 COCONUT song (文字に慣れ親しむ身体を使った活動)

Today's Goal

今日何をめあてに行うのかを児童と共有
 ⇒ 前時のふりかえり(発表) ⇒ 本時の目標へ

事前課題

授業動画(前橋市立桂萱小学校)の視聴

導入から

- ① Routine Question から songのW/UPがスムーズな進行⇒ナチュラルスピードで練習
 Accuracy < Fluency (児童期の学習にとって)
 ② めあての共有は、子どもたちといっしょに。⇒ 「めあてステップ」の可視化した共有
 ③ 本時に児童が自分で取り組む学習をていねいに導き出す。⇒ 児童自身が何をするのか理解

協議概要

授業視聴後に行われたグループ協議の発表で挙げられた、主な意見や改善・提案事項を記す。

協議ポイント1 「めあてステップ」は、児童が単元ゴールに向かって、見通しをもち、外国語活動に主体的に取り組むことができることに有効であったか。

- ・ 単元ゴールを最初に示すのは児童に見通しをもたせることができ有効である。
- ・ 活動の明確化がされ効果的である。
- ・ 児童の言葉を使って合意形成がされ、めあてを決めていた。
- ・ めあてやゴールが授業中に掲示されていて、いつでも見て確認ができることは児童が何に向かって学習しているのか理解しやすくて良い。
- ・ 既習事項もわかりやすく示され、児童もここまでできたと自信もてる。
- ・ 本時の見通しがあると、もっと、わかりやすかった。
- ・ インタビューでファイルを持たせているとジェスチャーがしにくい。

- ・ 単元を通して、ゴールのために好きな色を尋ね合うことは必然性があって良いが、本時のめあての引き出し方が強引だったと感じた。

協議ポイント2「教師とのやり取り」が児童の本時の、めあてに向かおうとする姿に有効に働いたか。

- ・ 自信のない子が話すきっかけとなっていた。
- ・ 教師からの問いかけが多かったので、児童がめあてに対してしっかり考えられていた。
- ・ 中間指導が2回あったが、児童が活動に自信をもつことができ、レベルアップしていた。
- ・ 振り返りのポイントを先生が質問をすることで示していて、有効な振り返りとなっていた。
- ・ 尋ねる手段や聞き手の態度、ジェスチャーの必要性という本時のポイントを児童から引き出していた。

第11回講座

令和5年8月17日(木)午前10時40分~午後12時10分

授業研究⑧

講座詳細ページ▶



読むこと・書くことの指導

授業者氏名	齊藤 千咲 Heute Elmiolle Caelle
学校名	浦安市立見明川小学校
担当学年	第5学年
使用教科書	NEW HORIZON Elementary English Course 5
単元名	Unit 2 When is your birthday?
講師	池田周(小学校英語教育学会愛知支部長、愛知県立大学教授)

参加者

拠点校
42名

拠点校外
33名

概要

本時では、誕生日の日付や欲しいものについてペアでやり取りをし、聞き取った情報を正しくバースデーカードに書くことが主な活動となっている。本講座のテーマである「書くこと」に関しては、まだ慣れていない児童も多いため、仲間と協力して確認をしたり、英文を書く際の注意点を思い出させたりしながら丁寧な授業を心がけた。これから増えていく書くことの指導について、参加者からいただいた様々な意見や提案について協議した。



浦安市教委

1 単元名	Unit 2 When is your birthday?
	NEW HORIZON Elementary English Course 5 (東京書籍)
2 単元の目標	誕生日やほしいものについて、短い話を聞いておおよその内容を理解したり、友達と伝え合ったりすることができる。 <u>アルファベットの小文字を書くことができる。</u>
3 児童の実態	Let's SingやLet's Chantでは楽しく元気に歌ったり、Let's Listenではたくさんメモを取ったり、前向きに学習に取り組む児童が多い。一方で、一対一のやり取りになると、外国語で伝えることの自信のなさから、なかなか言い出せない児童もいる。また、大文字と小文字を書くことにおいては、 <u>大文字をなぞったり写したりすることはほとんどの児童ができるが、4線の正しい位置に書いたり、文字を聞かずに書いたりすることはまだ難しい児童もいる。</u> 大文字と小文字の使い分けや、4線に正しく書くことなどにも、少しずつ取り組んでいるところである。
4 指導計画(全8時間)	1・2校時 誕生日やほしいものについてのやり取りのおおよその内容を理解する。 3・4校時 誕生日やほしいものについてたずね合う。 5・6校時 (本時:5校時) 「バースデーカード」を作って、誕生日やほしいものについてやり取りをする。 7・8校時 世界の1年について考え、世界と日本の文化に対する理解を深める。



事前課題

授業動画(浦安市立見明川小学校)の視聴

協議概要

「読むこと・書くことの指導」というテーマを受け、「バースデーカードを書いて友達に渡す活動」を主な言語活動に設定した。「読むこと」に関しては含められなかったが、代わりに「書くこと」と「話すこと[やり取り]」を統合させた活

動を取り入れた。受講者からも、この活動形式は肯定的に受け止めていただけたようであり、意欲を掻き立てる活動となったと感じている。一方、ワークシートの在り方については、多くのご指摘をいただけたので、今後の参考にしていきたいと考えている。

また、本市は、ALTとのチーム・ティーチングの授業を充実させることに力を入れているため、「HRTとALTの役割分担が適切であったか」、「2人のよさが十分に発揮できているか」という視点で見ていただいた。協議では、チーム・ティーチングが効果的に行われているとの評価をいただけたので、今後も意識して取り組んでいきたい。主な協議内容としては、以下をご覧ください。

(各市より)

- ・ HRTとALTで協力しながら教室を回り、一人一人の児童が書いた単語や文章を丁寧に確認しているところがよかった。
- ・ 書く活動や話す活動の流れが児童にとってわかりやすいようにまとめられていた。
- ・ ただ書かせるだけでなく、書く活動と話す活動を統合して行うことで、児童が書く活動に意欲的に取り組めるようにしていた。
- ・ ALTとの役割分担がよくできており、ALTの活躍の場が多かった。HRTとALTのやり取りが自然であり、HRTがPCを作業しているときにはALTが児童に話しかけて場をつなぐなど、英語の雰囲気や途切れさせないところがよかった。
- ・ 書き写すとはいえ、5年生のこの段階で長い2つの疑問文を書かせることは負担が大きいため、授業を分けて1時間に1文にするとよいのではないか。
- ・ 誕生日を書かせる際、1st、2nd、3rdなどは特に児童が書き間違いやすいものである。机間指導をしながら個別に指導する場面があったが、書く活動の前に全体指導をしてもよかったのではないか。

第12回講座

令和5年8月22日(火)午前9時~午前10時30分

授業研究⑨

学習評価

講座詳細ページ▶



授業者氏名	古田 優介 Marcus WORRELL
学校名	岐阜市立長良西小学校
担当学年	第6学年
使用教科書	NEW HORIZON Elementary English Course 6
单元名	Unit3 Let's go to Italy
講師	金子義隆(明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授)

参加者

拠点校
89名

拠点校外
47名

概要

岐阜市では市内46小学校すべてにおいて、令和2年～令和12年に「教育課程特例校(英語科)」を編成し、第1・2学年18時間の英語科、第3・4学年35時間の英語科、第5・6学年70時間の英語科を行っている。本時では、Can-Doリストをもとに設定した単元の目標の達成に向けて、教科書を活用した言語活動を行った。主に言語活動を通じた学習評価について協議した。



事前課題

授業動画(岐阜市立長良西小学校)の視聴

授業研究⑨

見習いたいポイント2: Visual Aidsの活用

- 黒板を中心に単語や表現、写真が適切に提示されている。
- 児童がコミュニケーション活動中にすぐに頼りにできる。
- 必要なインプットに効果的に何度も出会う。

協議概要

【協議の視点①】本時の学習過程、言語活動について

参考にしたいところ

- ・ Small Talkの導入が、シルエットクイズに答えるだけでなく話題を推測する場面が設定されており、英語を聞く必然のあるものであった。表現を示さずに対話を始め、対話が終わった後に表現を確認する流れで進められていても、子供たちがたくさん話していたところからこれまでの指導の積み重ねを感じた。
- ・ 子供はパワーポイントやキーワードのみで対話を進められており、単元の学習の成果を感じた。
- ・ 中間交流の後に再構築の時間が設けられており、子供たちが自力解決に向かう姿が見られた。
- ・ 再構築の時間にALTが個別指導することを取り入れていきたい。
- ・ 「Is that so?」と思わせよう。」と、内容面を大切にされた課題を設定したことで、子供たちの「伝えたい」意欲が高まっていた。
- ・ 表現を身に付けさせるだけでなく、目的に応じて表現を活用できる技能を育成しようとする教師の姿勢が参考になった。
- ・ たっぷり話して慣れ親しんだ表現を書くという指導の流れを参考にしたい。

提案、改善案等

- ・ ALTとのモデルを示さずに言語活動を行うことは、自分たちで表現を考えられる一方、コミュニケーションが苦手な子、英語の力が低位の子にとっては、ある程度の型を示してもよいのではないか。
- ・ ALTの活躍の場面がさらにあるとよい。
- ・ 子供の発話量をさらに増やしていくとよい。
- ・ 再構築した後の変容が分かるような手立てがあるとよい。

【協議の視点②】本時の学習評価について

参考にしたいところ

- ・ ICTを活用し「Is that so?」と思ったところを即時的に交流することで、子供たちの「伝わった」「できた」を授業内で実感させる手立てを参考にしたい。
- ・ 児童の活動の様子を撮影し、中間交流で全体共有することで適切な指導、評価につながった。

- ・ICTの活用によって、子供の活動の見届け、指導、評価できるところが参考になった。

提案、改善案等

- ・中間交流で共有した姿から、子供たち自身で目指す姿を見つけられるとよい。
- ・中間交流を受けてActivity2で“Do you ~ ?”を入れて対話をしている子供が増えたことを本時の評価としてもよかったのではないか。
- ・本時の子供の目標は「話すこと」であったが、教師の評価規準は「書くこと」であったため、指導と評価にズレがあったのではないか。
- ・思考判断表現を観点とした場合「何ができればよいか」を子供と共有する必要があるのではないか。
- ・本時は、たっぷり話して慣れ親しんだ表現を書き写す評価でも十分ではなかったか。

第13回講座

令和5年8月22日(火)午前10時40分~午後12時10分

授業研究⑩

講座詳細ページ▶



チーム・ティーチング

授業者氏名	湯山 渉 MAIBELLE DEL LEON ALVERO
学校名	茨城県土浦市立中村小学校
担当学年	第3学年
使用教科書	Let's Try! 1
单元名	Unit 5 What do you like?
講師	米村珠子(明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授)

参加者

拠点校
89名

拠点校外
51名

概要

土浦市では、Small Talkの充実とALTとの効果的なチームティーチングを通して、相手のことを考えながら積極的にコミュニケーション活動に取り組むことができる児童の育成を目指している。児童は「学級で一番人気の食べ物は何か」を調べるために「What food do you like?」を使って会話をした。小学校3年生では活用できる語彙や表現が少ない中でも、会話を最後まで継続して行えるように、簡単なコメントを伝えたり、あいづちやジェスチャーを使ったりする授業を提案した。Small Talkと効果的な



授業研究⑩

事前課題

授業動画(茨城県土浦市立中村小学校)の視聴

MEIKAI-JOEプラス2022 第2回講座資料より

チーム・ティーチングにおけるT1、T2の役割分担

HRT (学級担任) の役割 (T1です!)	ALT (英語指導助手) (T2です!)
<ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒についてよく知っている。 → 個に応じた発問、受け止め、支援ができる。 ・英語母語話者ではない、学習者である。 → 英語を学ぶ人・使う人としてのロールモデルを示すことができる。 ・継続して指導を行うことができる。 → 授業を改善できる。 <p>☆ 自信をもって指導にあたりましょう!</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・英語母語話者または使用者である。 → 音声の特徴、文化について指導することができる。 → 児童・生徒が英語を使う必要性を作り出すことができる。 ・指導においてHRTのパートナーである。 → 児童・生徒の活動を見取り、HRTに情報を提供することができる。 <p>☆ 母語話者としての特性を生かして指導しましょう。</p>

互いに英語でコミュニケーションを促す児童・生徒のモデルになりましょう!
信頼関係を構築しましょう!



協議概要

授業動画の視聴後に、研究協議を実施した。良かった点、改善点に関して参加者より寄せられた主な意見を記す。

(1)良かった点

- ・バッドモデルとグッドモデルを提示して、どのようにすればもっと良いコミュニケーションにつながるか児童に考えさせた点が良かった。
- ・HRTとALTのやりとりの中で大きなジェスチャーが用いられていたり、重要な部分はゆっくり発音したりと工夫がなされていた。グッドモデルがあることで児童が何をするのか分かっていた。
- ・中間指導を入れることで、児童が困っていることを共通理解することができた。
- ・コミュニケーション活動でのあいづちを学ばせることはとても大切と感じた。あいづちをしてくれていると児童が感じることで、安心して会話ができているようであった。
- ・グッバイチャレンジを全員で行うことで、HRTとALTは全ての児童の評価を適切に行う事ができていた。一人一人の実態を把握することで、個別最適な学びにつなげることができると考える。
- ・グッバイチャレンジで児童はHRTやALTと話することができたという経験をすることで、自信をもってコミュニケーションができるようになって感じた。

(2)改善点

- ・コミュニケーション活動に重きを置く時は、ワークシートは持たせないようにするとか、持っていったとしても活動中は使用しないように指導する必要がある。相手の表情を見ながら、会話をする中で、相手に配慮をする態度が身につく。
- ・バッドモデルを提示したときには、どうしたら良くなるかをただ考えさせるのではなく、本時の目標に戻して考えさせるともっと良かったのではないかと考える。
- ・目的・場面・状況をきちんと児童と共有することが大切であった。そうすることで、何のためにコミュニケーションをするのか理解ができたのではないかと思う。

第14回講座

令和5年9月12日(火)午後3時20分～午後4時20分

授業研究講座全体を通して見えてくる課題と成果 各校の授業実践を振り返って

講座詳細ページ▶



吉田研作(日本英語検定協会会長 上智大学名誉教授)

参加者

拠点校
105名

拠点校外
64名

概要

各校の授業及びその後のディスカッション、また、講師の話を通して、この講座の成果が随所に現れていて、感心した。全体を通して外国語活動、外国語、そして小中連携、JTE一人の授業からALTとのチーム・ティーチングまで、小学校英語でみられるほぼ全ての形態が実現されていた。全体としては非常に良い授業ばかりだと思うが、いくつか気になった点について今回の講義で伝えることにした。

授業研究講座全体を通して見えてくる課題と成果

1) スモール・トークについて

本授業で扱われる表現や言語形式にどれだけ限定するべきものなのか、本時の「めあて」の前が良いのか後が良いのか。

- テーマ、言語形式を無関係な small talk、英語の環境作り（生徒が興味を帯てる話（e.g. アニメ、小中学生向けの話題、JTEやALTが経験した面白い話など）、ジェスチャー、非言語情報等を使う
- テーマ、内容につながる small talk（特にその時の授業で導入される言語形式と直接関連している必要なし。）テーマと関係のある単語や意味概念を導入し、児童が見当がつくように gesture や五感を利用して scaffolding する
- 言語形式の導入 (Input flood) や input enhancement で児童にとって意味内容という点ではやさしいもの → 言語形式に意識を向けられるように
- TTなど対話の中で行うのが一番だが、一人の場合は必ず児童との理解を確認しながら行う



- 1) スモール・トークについて。本授業で扱われる表現や言語形式にどれだけ限定するべきものなのか。本時の「めあて」の前が良いのか後が良いのか。
- 2) 文法(例えば、3人称単数の-sはどこまで実用なのか(生徒へのインプットと生徒のアウトプットの関係)
- 3) 日本語がどこまで必要なのか(生徒自らの「気付き」の機会を奪ってしまっていないか)
- 4) 小中連携は何を共有することなのか(内容、単語、構文、それとも教授法)
- 5) recast と repetition、requesting、confirmation等の関係
- 6) 中間評価の役割及び振り返りなどについて

事前課題

下記のようなポイントからもう一度各校の授業を見直してみることに

- 1) スモール・トークについて。本授業で扱われる表現や言語形式にどれだけ限定するべきものなのか。本時の「めあて」の前が良いのか後が良いのか。
- 2) 文法(例えば、3人称単数の-sはどこまで実用なのか(生徒へのインプットと生徒のアウトプットの関係)
- 3) 日本語がどこまで必要なのか(生徒自らの「気付き」の機会を奪ってしまっていないか)
- 4) 小中連携は何を共有することなのか(内容、単語、構文、それとも教授法)
- 5) recast と repetition、requesting、confirmation等の関係
- 6) 中間評価の役割及び振り返りなどについて

事後課題

事後課題は、講義の後、もう一度各校の授業を見直してみることに

講座評価アンケートに寄せられた質問に対する回答

Q 1

スモールトークの代わりに毎時間歌を歌っています。デジタル教材についているチャンツです。それでもスモールトークのように導入になりますか？

A 1

もちろんなります。児童がこれから英語を勉強するのだという気持ちになることが大切です。もう一点、歌やチャンツが良いのは、声出しの練習になることです。一度声を出しておけば、その後の活動でも声が出やすくなると思います。

Q 2

授業者に、英語に苦手意識があるとき、どのようにすれば良いかアドバイスをいただきたいです。

A 2

児童が英語が苦手だと言ってきたとき、先生はなんとおっしゃいますか？多分、間違えても大丈夫だから楽しんで英語を使ってみよう、のような形で励まされるのではないのでしょうか。もしそうなら、その同じ励ましのことばを自分に言ってあげてください。

Q 3

話すことから書くことへの円滑な接続についてどうしたらよいかお聞きしたいです。

A 3

学習指導要領では、各活動は音声で慣れ親しんだ英語を見て文字で認識し(リーディング)、認識した文字を「書き写す」ように言っています。一番良いのは音声での認識、認識したものを文字で確認し、文字で確認したものを書き写す、とい

うプロセスでしょう。小学校ではスペリングテストなどはしませんので、書き写す機会を十分確保できればそれで良いと思います。

Q 4

いわゆる「課題」と「まとめ」の「まとめ」のあり方について伺いたいです。様々な方の指導案を拝見しましたが、本時の課題(というよりも目標なのではないでしょうか)はわかりますが、いわゆる他教科でもある「まとめ」は見つけれませんでした。必要ないのでしょうか？

A 4

先生は授業の最初に「めあて(課題)」を提示し、それを本時でできるように授業を組み立てるでしょう。最後は先生の「まとめ」があっても構いませんが、それより大切なのは、児童が最初に提示された「めあて」ができるようになったか、という「振り返り」です。振り返りで今日のめあてだった「～ができるようになる」という目標をどこまで達成できたかを児童自身に問う。例えば、「できるようになった」「大体できるようになった」「まあまあできるようになった」「あまりできるようにならなかった」で答えてもらうと同時に授業に対する児童の感想等を書いてもらうので良いと思います。

Q 5

吉田先生はCLILについて、小学校での授業に取り入れる事は、どうお考えでしょうか？ 12月に6年生対象の、社会科からのアイヌの題材で、CLIL風の研究授業をしますが、事前の協議で市の研究会の方に、難し過ぎる、6年生はアイヌに興味もたない、等々否定的なご意見をいただきました。心が折れそうです。何かアドバイスがあれば、教えてください。よろしくお願いします。

A 5

6年生がアイヌに興味を持つかどうかは、英語以前の問題ですので、まず、日本語でアイヌについて児童がどれだけ知っていてどう思っているかについて聞くことが大切だと思います。色々な音声、視覚資料(かたりべの話や音楽、踊りなど)を用いて、アイヌがどのような人たちで、どのような生活を、現在どうなっているのかなどについて児童の興味を向けることが必要のように思います。例えば、昔は口頭のみ伝承されていたアイヌ文化を、有名な言語学者金田一京介の指導の下、『アイヌ神話集』にまとめ、わずか19歳で亡くなった知里幸恵さんの話などは心に響くものがあるかもしれません。

英語でやったら難しいかどうかは、児童がそのテーマについて前提知識をどれだけもっているか、興味をもっているかにかかわってきます。また、アイヌ文化に関する語彙を英語でなんというか(CLILの前に日本語でアイヌの話をするときでできた重要な語彙の英語化)など色々準備する必要があるでしょう。

昔、私たちの研究会で、高校の英語の教科書に載っていたMartin Luther King jr. の有名な平和のスピーチ(原文)と同じく有名な Mother Theresaの様々な偉業について新聞記者が書いた記事のどっちが分かりやすく、面白かったかを高校生に聞いたみたことがあります。King牧師のスピーチは原文のままだったので、英語としては難しく、凝った表現等も多くありました。それに対してMother Theresaについて書かれた記事は分かりやすく易しい英語で書かれました。しかし、生徒へのアンケートの結果、King牧師のスピーチの方が人気がありました。つまり、英語の難しさよりも、King牧師についての前提知識と興味が英語の理解にも反映したのだと言えるでしょう。

ということで、まずは、児童が興味をどこまで持ってくれるかがこの場合は一番大切ではないでしょうか。



小学校英語の指導に当たって求められる 教師の力と小学校英語担当者に期待すること

吉田研作(日本英語検定協会会長 上智大学名誉教授)

参加者

拠点校
107名

拠点校外
79名

概要

今年度を通して理論と実践の両面で様々な学びがあった。そこで、最後の講義では、もう一度小学校における英語教育について全体的な枠組みを再確認しながら、いくつかの点について考えてみることにした。

1. 学習指導要領に載っている「目標」を実現するための「言語活動」について考える
2. 言語とコミュニケーションの違いを認識すること
3. 小学校の先生がより自信を持って英語を教えること
4. ICTやAI をどのように道具として利用するか、またその限界を知る

小学校英語の指導に当たって求められる教師の力と小学校英語担当者に期待すること

Open Seas に出ていくために必要な準備

Input	Uptake & Forced Output	Intake	Output
意味のある文脈からの音韻インプット	気付きに基づき教えられた表現等を意識的に使ってみる	気付いた言語形式が定着し、修得につながる	修得された言語形式が使えるようになる

意識的に「言語形式」や「発音」「単語」を意味のある文脈を通して練習するステージ
→ inputで導入された表現を決す。さらに自分で選んだ表現に応用してみる
spiral learning & teaching

気付きを促すための focus-on-form (意味のある文脈の中で言語形態に気付かせる)

Scaffolding (支援) : recast, prompt の重要性 (生徒の誤り等を直接直すずに正しい表現を与えることで気付かせる)

事前課題

下記の学指導要領の目標について次のことを考えてみよう。この目標にある「基本的な表現」「簡単な語句」などの言語要素はどのように授業で扱えばよいか。

小学校外国語

話すこと [やりとり]

目標

- ア 基本的な表現を用いて指示、依頼をしたり、それらに応じたりすることができるようにする。
- イ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができるようにする。
- ウ 自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする。

「Zoomによる小学校英語・なんでも相談交流室」

昨年度の委託事業から、全15回の講座に加え実施した自由参加の相談・交流コーナーである。全4回実施した。実施方法は、再委託機関を通さず、明海大学が指定したZoomに希望者が入室することとした。全4回とも講師は、明海大学の高野敬三、石鍋浩、金子義隆、百瀬美帆、坂本純一、米村珠子が担当した。相談内容について講師が回答することに加えて、相談者同士の実践事例の交換も行った。以下がその概要である。

実施日	参加者	相談内容	講師からの回答
第1回 5/23 (火) 15:20 ~ 16:20	狛江市 専科教員 釧路市 学級担任 足立区 学級担任	ALTの活用方法について	ALTと学級担任とのやりとりを児童に見せること。ALTと学級担任との信頼関係づくりが大切である。あくまでも学級担任がT1である。
		普通の授業づくりにつて	目的、場面、状況の設定が大切である。単元のゴールを児童と共有すること。宝物紹介の言語活動では、絵や写真を活用してもよい。
		英語専科としての役割	専科であっても専門的な知識を定着させるのではなく、コミュニケーションに慣れ親しませることが大切である。
		児童の発話を増やす工夫	「ぐるぐるチャンツ」を試みることを勧めたい。学級担任と英語アドバイザーと児童の三者でやりとりをする。
第2回 6/27 (火) 15:20 ~ 16:20	足立区 学級担任 釧路市 専科教員	興味を引き出す授業展開	歌やチャンツで雰囲気づくりをすることが有効である。教師が楽しそうにしていることが児童を引き込む。
		文字指導について	大文字、小文字を書く活動、目的をもって簡単な語句や基本的な表現を書き写す活動、言葉を選んで書く活動を行うことが重要である。
		授業に消極的な児童への対応	小さな成功体験を積み重ねることである。担任の先生から当該の児童のほめられるところを聞き出しほめることも有効である。
		2校を担当しているが、2校の差をなくす方法	2校とも同じレベルにする必要はない。完璧な英語を目指すのではなく、間違っても大丈夫と励ましながら英語を使わせることが肝要である。指導の展開・流れを揃えることは大切である。
第3回 7/25 (火) 15:20 ~ 16:20	釧路市 専科教員	児童が乗ってくる活動が知りたい。	「ぐるぐるチャンツ」の応用として、答が初めから決められているもの他に、自分の好きな物を言わせてもよい。文科省の小学校外国語活動・外国語研修ガイドブックも参考にしてほしい。
		単語にルビを振ることの可否	教師が片仮名を提示するのは避けるべきである。児童が備忘のために自らルビを振るのを禁止する必要はない。
		単語をあらかじめ覚えさせることの是非	自分が覚えたいという気持ちにさせながら単語を指導するのはよいことである。グループ対抗戦にすると個人の負担感なく覚えられる。ただし、定着まで図る必要はない。
第4回 9/28 (木) 15:20 ~ 16:20	岐阜市 学級担任	児童の気付きを促す授業改善について、Focus on Form で指導したいが、具体的な方途が知りたい。参考文献も知りたい。	Focus on Form は、意味中心の言語活動の中で指導するものである。そのためには、ねらいとするFormを自然に使わせる仕掛けが必要である。中間指導が大切であり、1回目では言えなかったことを振り返らせながら、指導することである。また、フィードバックを個人に対して行いながらFormに気付かせることも有効である。児童全体に対しては、めあての達成状況を確認させることが大切である。『フィードバック研究への招待』（名部井敏代他、くろしお出版）や『フォーカス・オン・フォームを取り入れた新しい英語教育』（和泉伸一著 大修館書店）も参考になる。

Ⅲ

講座受講による意識の変容



1. 第1回から第3回 過去の講座を視聴するオンデマンド型

第1回講座では、受講者全員が2022年度第1回講座「新学習指導要領の原点」を視聴し、第2回、第3回では教育委員会、所属校、または個人で選択した講座を視聴した。

第4回以降の講座との違いを明確化するために、オンデマンド型講座については、「振り返りシート」という表題とし、次の5項目について受講者に回答を求めた。

1	名前
2	所属
3	勤務校
4	講座を受講して新たに学んだことや気付いたことは何ですか？
5	今回学んだことを今後どのように活用したいですか？

質問項目5についての振り返りシートの内容の集約を1とし、2として集約されたフィードバックから見える成果と課題を付記した。

第1回 令和4年度第1回「新学習指導要領の原点」

1. 振り返りシートの集約

これまでの授業では、音読や発音や文法などを中心に行っており、金魚鉢に入っている魚のような制限のある学習をしていたので、大海を泳ぎ回る魚のように、ディベートやディスカッションなど相手に伝えることに取り組んだり、教科書の要約をしたりしてみようと感じた。そして、scaffoldingやrecastを意識しながら授業していけるようにしていきたい。

教師のrecastやacceptabilityの考え方は、英語に限らず様々な場面で必要になると思う。

教師が知識を教えるだけの授業ではなく、支援に回るよう心がけ、児童の活動を引き立てていけるような授業にしていきたい。

外国人と会話するときは間違いを恐れずに気にせず話せるが、児童と話をするときは1字1句間違えてはいけないということに囚われていたので、相手に伝わるのが大切だということを児童にも伝えたい。

表現の正確さにこだわらせるのではなく、「自分の思いが相手に伝わった」「相手の思いが伝わった」という経験を多く積ませていきたいと思う。また、質疑応答の中にあつた特別支援学級との交流についても、どのような取組ができるか考えていきたい。

オンラインを活用した授業をやってみたい。大海で泳げるようになるための英語にするためには、児童に、英語で自分の思いを語ったり、表現したりする機会があることが大切だと思う。オンラインの活用は、そういった場の設定を可能にしていくものだと思うので積極的に活用していきたい。

Thank youだけでなく、I love it. I always wanted it.など自分や相手に関する簡単な質問や答え方ができるようにすることで、知識だけでは生まれたい自信をつけさせることができるようにする。授業を教室の中だけでなく、国際社会の中で社会や世界とどのようにかわり生きていくかなどの、学びに向かう人間力を高めていけるように活用していきたいと思う。

2. 振り返りシートから見える成果と課題

言語の正確さよりも、相手に思いや情報を伝えることの重要性に焦点を当てた指導への意識が高まった。

教師が間違いを恐れずに英語使用者としてのモデルとなり、scaffoldingやrecastの手法を取り入れて、児童のコミュニケーションの支援を行えるようになることが課題である。

第2回・第3回

視聴数上位2講座について、質問項目5についての振り返りシートの内容の集約を1とし、2として集約されたフィードバックから見える成果と課題を付記した。

1. 令和4年度第3回「聞くこと」「話すこと」振り返りシートの集約

まずは担任自身がたくさん英語を聞いてたくさん真似ること、そしてそれを使ってみる姿を見せること、その姿勢を見せていくことを大切にしていきたい。「言わせる」のではなく、児童が「言いたい」と思える活動を考え、単元の最後にどのような姿になってほしいのかを明確にして教材研究にあたりたい。

児童の興味関心や発達段階、学習レベルに合わせたたくさんのインプット、英語のシャワーをし、児童自身が少しでも「わかった」「できた」という達成感を味わえるよう工夫していきたい。評価にもつながるCAN - DOリストを活用することで、児童自身も自分の学習状況を振り返るきっかけになると思う。

各unitの導入やsmall talkでは、教員が児童に身につけさせたい英語表現や、児童自身が「こう話したい」と思う題材、テーマをしっかりと考え、より意欲的に学べるような導入にしていきたい。これまで私は児童の「こういうことを話したい、伝えたい」ということを優先しすぎて、児童の英語表現に制限をつけないことが多くあったが、それが児童の困り感へと繋がったりしていたこともあった。今回の講義で、話す内容を選択させたり、絞ったりしても、十分に自己表現ができることがわかった。今後の指導に生かして、児童の達成感につながる学習にしていきたい。

練習だけで終わらないようにするために、やりとりや発表を単元の中に設定し、体験的な活動を取り入れていきたい。また、small talkで単元のねらいを導入し、イラストや写真は児童の様子を見て提示をしていきたい。そして、練習をするためにゲームやチャンツなどのアクティビティを行うということを意識して単元の計画を立てていきたい。

2. 振り返りシートから見える成果と課題

生徒に「言わせる」のではなく、「言いたい」と思わせる活動を取り入れることにより、児童が自己表現をする機会を提供することの重要性に気付いた。練習と言語活動の違いを認識することが課題である。

第2回・第3回

1. 令和2年度第2回「効果的なTTの在り方」振り返りシートの集約

ALTとの打ち合わせは必要なこと。英語は得意ではないが、なるべくALTと積極的にかかわっていくことが必要だと思った。

外国語の授業の際に、できるだけ多くの英語に触れさせることを行いたい。その際にALTと打ち合わせをしっかりと行い、児童たちからALTに質問できるようにサポートしていきたい。

わからなくても必死に伝えようとする姿や喜びを感じる姿を見せていきたいという思いを持った。また、ALTへの挨拶や何気ないお願いの文章も、好ましい伝え方があることがわかった。より良い協力関係を構築できるよう教師自身も英語に対する知識を高め、ALTとやりとりをしていく必要がある。

実際にALTとレッスンプランを相談する時間をとるのが難しいと思うが、短い時間の中で行えるような手立てを学んだので、是非活用したい。

授業前に、短時間でもいいので、レッスンプランを確認しようと思う。その上で、授業や児童たちの変容を見て修正したい。

どういう表現を使ってALTと指導案を共有したり、授業中においてお願いしたりしたら良いかが分かった。ALTにお願いしたい指示を英語で伝えられるようにしたい。

2. 振り返りシートから見える成果と課題

学級担任が積極的にALTとコミュニケーションを図る姿を児童に見せることの意義、短時間であってもレッスンプ

ランの打ち合わせを行いALTとの信頼関係を構築することの重要性、また基本的な表現等を理解した。一方、打ち合わせに割く時間を捻出することが課題である。

2. 第4回から第13回 授業研究

それぞれの講座終了後、受講者には次の6項目についてリフレクションシートに回答するよう求めた。

1	名前
2	所属
3	勤務校
4	授業実践発表を見て新しく学んだことや気付いたことは何ですか？
5	振り返り協議後に新しく気付いたことは何ですか？
6	講師の指導助言から学んだことや気付いたことは何ですか？

質問項目4、5、6についてのリフレクションシートの内容の集約を1とし、2としてリフレクションシートから見える成果と課題を付記した。

第4回 授業研究① 「聞くこと・話すことの指導」(釧路市)

1. リフレクションシートの集約

(1) 受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気付いたこと」(質問4)

児童の実態に合わせて、スモールステップで授業を進めていくことで、徐々にレベルが上がっていき、児童も取り組みやすいことを学んだ。ALTと教員のやりとりを段階ごとに見せて聞き慣れ、その後児童が使い慣れるという過程があり、児童の様子からも見られた。見本を見せて突然児童にやらせてしまうと、混乱を招いたり苦手意識のある児童の意欲が低下したりしてしまうため、段階を踏むことの重要性に気付いた。

授業のパターン化によって児童たちが安心して授業を受けられること。

みとりの大切さを再確認できた。授業者がねらいを明確化した上でリキャストを意識し、形成的評価をしながら児童のコミュニケーション力を高めていくには、児童の実態を的確に把握していなければいけないと思った。

(2) 受講者が「振り返り協議後に新しく気付いたこと」(質問5)

児童たちが自分たち自身で考えて取り組むことができるような活動も必要だと思った。児童が話しやすいように型を提示することも大切だが、その前に一度自分で考える時間を少しでも与えることが必要だと思った。

Today's goalは教師が決めて示すことだと思っていたので、Small talk などを見せた後に、その授業でのToday's goalを児童たちから引き出すという意見があって、発想が新鮮だった。

(3) 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気付いたこと」(質問6)

学習活動を競争ではなく、協力の目的を明確にして設定するという考え方についてどの教科での学習活動においても根幹となる考え方だと思った。

コミュニケーションを行う目的を明確にしてあげることが大切だということも学んだ。また、「頻度の効果」ということも学んだ。一回の活動では定着には繋がりにくいので、単元を通して同じ活動を続けていくことで定着につながるということも学んだ。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

授業をパターン化し、スモールステップで進めることで児童に安心感を与えられること。同時にその段階を経る中で形成的評価を行うことの重要性に気付いた。学習活動を競争の場ではなく協力の場とすることを学んだ。教師側から本時の目標や、活動パターンを与えるだけでなく、児童から引き出す指導法を身に付けることが今後の課題である。

第5回 授業研究② 「小中接続」(狛江市)

1. リフレクションシートの集約

(1) 受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気付いたこと」(質問4)

小中連携しての授業は、児童・生徒の思いが鍵になると感じた。教師主導で進めても、子供たちの気持ちがついていかなければ中途半端になってしまうが、しっかりと丁寧な導入(目的・場面・状況を意識させるような)をし、小学生・中学生と双方向のやりとりがあれば、小学生・中学生にとって大きな財産になるのではないかと感じた。

中学進学不安を外国語の活動を使って少しでも減らすという観点が自分にはなかったので勉強になった。

(2) 受講者が「振り返り協議後に新しく気付いたこと」(質問5)

中学校の先生が出前授業にくることによって、中学校への憧れを抱くことができ、進学のハードルを下げて中1ギャップが起これにくくできることを学んだ。

「リアルタイムでの交流」をすることができればより充実するのではないかと思った。児童が気になったことを簡単な表現で質問したり、中学生とのやりとりを楽しんだりすることで、さらに中学校生活への期待が高まるのではないか。中学生の「自分の英語が伝わる」という実感をもたせるためにも、この小中連携での学習は有効であると改めて感じた。

小中連携の難しさを感じた。日頃の業務に加え、綿密な打ち合わせや授業実践に合わせた授業進度など、気を配る部分が多いように思った。他方で、児童が安心して中学校生活をスタートするために、校種を超えて協力することが児童への支援になるのだと改めて気付いた。

(3) 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気付いたこと」(質問6)

小中接続を学ぶことは、児童が中学校へ入学したときに英語の授業スタイルの違いや目標の違いを感じるギャップを和らげることにつながると感じた。小学校で学んだことを中学校教員が理解していたら、授業での言葉がけのバリエーションも増え、生徒に寄り添った指導ができると思った。

小学校での教科導入をされたが、中学校での英語は依然としてアルファベットの学習からスタートする。足立区の小中一貫のように児童生徒の英語能力の情報を中学校に移行するというスタイルが汎用できると良いと思った。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

小中が連携することにより中学校への進学に関する児童の不安を軽減させ、期待を抱かせる効果があることに気付いた。一方、小中連携のための業務が増えることが課題である。

第6回 授業研究③ 「聞くこと・話すことの指導」(横手市)

1. リフレクションシートの集約

(1) 受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気付いたこと」(質問4)

リアクション(Oh, I see. Me, too.など)が日頃からよく指導されており定着しているし、ペアでの活動時だけでなく、一斉指導の際も児童が自然に使っていたことで授業中生きた英語を使う場面が増えている。

教師が授業のスタイルを確立し、児童と一体になって英語を楽しく学ぶ雰囲気をつくると、児童が大きな声で自信を持って受け答えすることができることに繋がると思った。

(2) 受講者が「振り返り協議後に新しく気付いたこと」(質問5)

会話はワークシートを使わず、授業の最後にメタ認知シートに記録をしていたことについて、児童が会話を覚えているのは大変そうと思ったが、協議によって、活動がコミュニケーションがメインの場合は、ワークシートがあると、書くことに一生懸命になり、アイコンタクトやジェスチャーの妨げとなるため、今回の授業では、ワークシートはなしで良かったと気付いた。

やり取りとやり取りの間の中間指導での工夫が大切だと思った。練習しても言えない児童への対応はどのようにしていくか、「上手に気付かせるように伝え合う活動」、「やり取りとやり取りの間の指導」を繰り返す展開の中に組み込んでいけるように考えていきたい。

(3) 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気付いたこと」(質問6)

教師が話すスピードについて、まずはゆっくり、はっきりを意識して、子供の理解度に合わせてだんだんナチュラルスピードにしていけばよいということを学んだ。

表現が苦手な児童に対してはペアではなくグループ活動にすることで、他者の表現を見る時間を作ることができる。それにより、自分の伝えたいことをどのように表現すればよいかを考えることができる。また、教師のリアクションや、児童のやりとりに反応する一言も大切な支援につながることを学んだ。

4年生であっても、「なぜ英語で話さなければいけないのか」その目的、場面、状況の設定が大事だと改めて思った。それがfish bowlから open seasにつながる。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

教師自身が相手にリアクションをしたり、ジェスチャーを使ったりして楽しくコミュニケーションを図る姿を児童に見せることの重要性に気付いた。児童がワークシートを記入するタイミングを考慮することが課題である。

第7回 授業研究④ 「聞くこと・話すことの指導」(足立区)

1. リフレクションシートの集約

(1) 受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気付いたこと」(質問4)

めあてをこちらから提示するだけでなく、児童から引き出していくことが大切である。そうすることで、児童が意欲的に取り組めるようになる。

中間指導の中で児童が困ったことについて問いかけて全体で共有したり、児童が必要を感じてから練習したりなど、主体的な学びになるような手立てがいくつもなされていた。個別支援も細やかで、全体で練習した後に発言した児童ができるようになったか確認していて参考になった。

クラスルームイングリッシュをたくさん使っていた。児童もたくさんの種類の単語を使っていたので、クラスルームイングリッシュの有効性を感じた。

(2) 受講者が「振り返り協議後に新しく気付いたこと」(質問5)

児童のコミュニケーションや、自ら考えようとする意欲を引き出すための板書の量について考えさせられた。わからない児童にとっては自分が話す言葉が板書されていることで安心感を覚えるが、書きすぎると自分から学びとろうとする姿勢が失われてしまう。途中で外していくという考えがあり、納得した。

教師の英語使用については、児童の実態もあると思うが、積極的に使っていく必要があると思う。

(3) 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気付いたこと」(質問6)

オールイングリッシュを目指すのだということを改めて意識した。そのためには、英語が先で日本語を後に話すことでより効果的に英語の学びを深めることができると学んだので、やってみようと思った。

練習は目的に支えられた活動であるということを学べた。なんのために練習をするのかを子供たち自身が理解して活動することが必要だということを学ぶことができた。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

児童から意欲や学習の目的を引き出すことの重要性を学んだ。授業を英語で行うことの意義を学び、授業を改善する動機づけとなった。一方教師の日本語使用量を減らしていくことが課題である。

第8回 授業研究⑤ 「聞くこと・話すことの指導」(いわき市)

1. リフレクションシートの集約

(1) 受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気付いたこと」(質問4)

ユニットゴールを児童と共に考えて決め、本時にすべきことを明確化することは、児童が主体的に学ぶことができる環境を

つくりだしやすい。

コミュニケーション活動には改めて目的意識と場面設定が大切であると学んだ。主体的な学び手として児童を位置付けなければ、授業者の都合で単に練習する活動となってしまうことがわかった。

JTEとALTとの会話が多くの児童が実際に英語に触れる機会を増やすことで、やる気を引き出すことに気付いた。

(2) 受講者が「振り返り協議後に新しく気付いたこと」(質問5)

児童に発話させる活動ではなく、児童が発話したいと思う学習活動や目的を設定すること。

自然な会話ということを念頭に置き、発音はナチュラルスピードで行うべきであると気付いた。ルーティーンクエスションのバリエーションを増やしたり、やり取りの中で相槌をしたりするなど、常に自然な会話につながるよう意識したい。

(3) 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気付いたこと」(質問6)

自然な英語を聞かせたり、自然なやり取りをしたり、わくわくするような内容を設定し、子供たちの「言いたい」「知りたい」気持ちを刺激するような授業を構築していきたい。言わせる活動ではなく言いたい活動となるように、心がけていきたい。

中間指導では、改善点などマイナス面を指摘することがありがちだが、中間指導を改善点だけでなく、良かったところを共有する場とするという講師の指導助言に納得した。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

単元目標を児童と共に決める等、児童を主体的な学習者として位置付けることの重要性、教師が話す自然な英語に触れさせる重要性を学んだ。中間指導においては改善点を指摘しがちだが、児童が達成できたことも共有していくことが課題である。

第9回 授業研究⑥ 「チーム・ティーチング」(妙高市)

1. リフレクションシートの集約

(1) 受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気付いたこと」(質問4)

ALTとJTEの役割がとても明確で、日本語での説明が必要な場合、ネイティブによる発音指導が効果的な場合など、授業を構成する上で考えるべきだと感じた。

ALTに日本の観光地を紹介するという目的と、相手意識がはっきりしているからこそ、児童たちは生き生きと学習に臨んでいることが分かった。

(2) 受講者が「振り返り協議後に新しく気付いたこと」(質問5)

ロイロノートを、第1時間目から少しずつ作って、単元の最後に活用できるようにするとよい。

ALTとの協力体制を見直そうと思った。打ち合わせでALTの役割を具体的に示したり、関わり方をより良いものにできるようなアドバイスをしたりしたい。

(3) 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気付いたこと」(質問6)

ALTの指導スキル・得意分野・背景等をJTが把握・理解をした上で、互いの役割をどう分け、どこをALTに委ねていくのかを、判断しながら打ち合わせをしていくことで、より良い授業をつくることにつながっていくと感じた。

教師が児童に与える動機付けについて学ぶことができた。教師が期待した答えではなかったとしても、まず児童の発言を受け止めて褒めている姿やジェスチャーを使って児童の意欲を高めている姿を参考にしたい。特に外国語では、まず言う・やりとりしてみることが大切になってくると思うので、児童がとにかく言ってみよう！失敗しても大丈夫！と思えるような雰囲気作りが重要であるとわかった。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

チーム・ティーチングを成功裏に行うためには打合せが必要であること、授業における役割分担を認識することを学んだ。ICT機器の活用が今後の課題である。

第10回 授業研究⑦ 「聞くこと・話すことの指導」(前橋市)

1. リフレクションシートの集約

(1) 受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気付いたこと」(質問4)

「めあてステップ」は、単元ゴールに向かっていく過程が子供から見てもよくわかるのでとてもいいと思った。各授業が単発で終わってしまうのを防ぐためにも有効である。

掲示物、具体物(アイスクリームボックスやYES、NOの札、シールなど)を有効に使うことで、教師とのやりとり、アクティビティがスムーズにできていた。

本時のめあてを、子供たちの声を活かしながら決めたことが、児童の主体的な活動に繋がっていた。

(2) 受講者が「振り返り協議後に新しく気付いたこと」(質問5)

毎時間の「めあてステップ」により、児童が何をすればよいか分かって活動できるということに気付いた。また、振り返りに明確な視点を与えることで、何ができるようになったのかばかりでなく、前時との変容にはっきりと気付くことができるということにも気付いた。

(3) 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気付いたこと」(質問6)

あらためて、「教える<学ぶ>」、「Teacher centered lesson < Student centered lesson」が大事であるということに気付かされた。

「楽しい」「できた」という児童の振り返りは次の授業への意欲につながり、次の授業での活動が変わってくるのだから認めていいのだということがわかった。振り返りは今日学習したことの個人のまとめと考えていたが、振り返ることにより、授業の積み重ねをより固めていくことが可能なのだとわかった。

英語に対して苦手意識のある児童にとって、ゆっくりとしたスピードよりもナチュラルスピードで進行していくことが有効であるというのは新たな発見だった。正確さを求めるより流暢さを重視し、はじめはできなくてもまわりの声を聞きながらだんだんと身につけていくということで、授業のリズム感にもつながると思った。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

「めあてステップ」が児童に活動の目的を知らせ、児童の主体的な活動につながることや、掲示物等が活動を活性化することを学んだ。また、振り返りに明確な視点を与えることにより、単なる本時のまとめではなく、児童自身が前時との変容に気付くことができることがわかった。教師の話す英語のスピードについての理解が課題である。

第11回 授業研究⑧ 「読むこと・書くことの指導」(浦安市)

1. リフレクションシートの集約

(1) 受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気付いたこと」(質問4)

指導要領改訂以前の英語学習だと、外国語に親しむことが大切だからスペルはやらなくていいという風潮が私の周りにはあり、それが強く根付いてしまい、Wednesdayのスペルを確認する活動には少し違和感があった。しかし、児童たちの様子を見てみると、中学校に向けてよい活動だと思ったばかりでなく、ウォーミング・アップで行っていいと改めて気付くことができた。毎回続けることで効果的であると思った。

書く活動の取り入れ方は難しいが、「聞く・話す」と「読む・書く」を組み合わせた授業展開が大切だと気付いた。

(2) 受講者が「振り返り協議後に新しく気付いたこと」(質問5)

授業の中で繰り返し話す活動をさせて書かせる、ということを見ていると、細切れでその活動が目標に向かっているのかがわからなかった。しかし、先生方の協議を聞いていると、やはり話す活動がしっかりできていないと書く活動も生かされないし、段階として話すこと書くことを連動させないといけなと感じた。その上で考えると、児童の発達段階から考えて、それほど長いセンテンスは無理だろうから、短く何度もという形態になるのだとわかった。

5年生の段階で写して書く作業を取り入れていて、この小さな積み重ねが6年生、そして中学生につながるのだと思った。

(3) 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気付いたこと」(質問6)

「アルファベットを読む活動」を積み重ねることが児童の力につながっていくと気づき、様々な場面で取り入れていきたいと思った。読むことで音声と文字を一致させていくことを大切にしていきたい。

書くことの指導において、綴りを覚えて書けるようにするのではなく、そのために聞いてわかる、自分で言えるを十分に得てから書けるようになるということを学んだ。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

「書くこと」が「聞くこと」「読むこと」「話すこと」と合わせて、繰り返し指導されるべきであることを学んだ。「書き写す」から「書く」への指導法についての研修等がさらに必要であることが課題である。

第12回 授業研究⑨ 「学習評価」(岐阜市)

1. リフレクションシートの集約

(1) 受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気付いたこと」(質問4)

中間で振り返る際に教師があらかじめ撮影した2～3グループの動画を効率よく見せていたことが大変参考になった。

中間指導のあとにすぐコミュニケーション活動に入るのではなく、再構築の時間を取って自分の発表を振り返る時間を取っていたことがとてもよかった。この時間が自分のやり取りや発表につながっていくのだと感じた。2学期からの授業に生かしていきたい。児童たちがタブレットを迷うことなく使いこなしていることもすばらしかった。自分自身のICTスキルをさらに高めることが必要だと感じた。

(2) 受講者が「振り返り協議後に新しく気付いたこと」(質問5)

デモンストレーションの大切さや、児童が主体的に活動できるアクティビティを、ゴールを見据えて設定することが大切だと感じた。

「書くことができる」というねらいにおける児童の到達目標を、教師側がしっかりと理解したうえで授業の構成の仕方、見取り方を考えていかなければならないと感じた。

(3) 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気付いたこと」(質問6)

評価規準を領域毎に作成すること、指導計画には記録に残す評価を中心に記載することが分かった。いつ、どのように、どの観点で評価するのということを具体的に記しておくことが大切だということも分かった。

単元のゴールを設定し、そこから逆算的に指導計画を作成することで、一貫した評価計画を作成することができること。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

ICT利用が授業を効率化し、活性化することを学び、受講者自身のスキルアップへの動機づけとなった。また、評価について具体的に学ぶことができた。評価規準の作成について、さらなる研修を要する。

第13回 授業研究⑩ 「チーム・ティーチング」(土浦市)

1. リフレクションシートの集約

(1) 受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気付いたこと」(質問4)

HRTとALTとの役割が明らかにされていた。まずよくない例をALTとのデモンストレーションで見せ、すかさず良くなるための手立てを共有してから練習を行っていたところは素晴らしかった。

授業後に、その日学んだ表現を実際にALTと一対一で使ってみるというグッバイ・チャレンジは、一人ひとりが英語を話す機会となるとともに、教師の評価材料にもなるため、とても良い活動であると思った。ぜひ二学期以降の授業で実践したい。

(2) 受講者が「振り返り協議後に新しく気付いたこと」(質問5)

自然な会話やリアクションを定着させるためには、児童がコミュニケーション活動を行う際の持ち物(シートなど)を持たせるのか持たせないのか、持たせるとしたら、どのような約束で持たせるのかをしっかりと決めておく必要があると感じた。

デモンストレーションでジェスチャーを促すことで、児童たちが対話を楽しみ、気持ちを伝えようとする意欲づけになっていると思った。身体を動かしながら活動を楽しめる場の設定をすることで、円滑なコミュニケーションが生まれた。

(3) 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気付いたこと」(質問6)

ALTの役割として、児童の発話を引き出す英語の提供があり、モデル会話や児童とのやり取りの中でそれを行う大切さを学んだ。事前の打ち合わせにおいて、ALTとこんな表現をこんな場面でこのように児童たちに伝えてほしいと、確認してから授業に臨めるようにしたい。

Small Talkを上手に活用することで、児童が自信をもって言語活動に取り組めるようになるということに気付いた。また、児童にとって必然性のある言語活動とするためには、相手の顔を見て会話をするように。記録用のシートをもたせないことや、会話をもとにランキングを作らせるなど目的をもたせること、さらに児童のニーズに合わせて会話の内容を発展させることなどのポイントがあることを学んだ。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

望ましくないやり取りの例を示すことにより、児童の気付きを促し改善の手立てを児童から引き出すというティーム・ティーチングの指導例や、授業の最後に本時で学んだ表現をALTに対して使ってみるという指導例を学んだ。活動中のワークシート記入が自然な会話やリアクションを妨げるかどうかについて、さらなる検討が必要である。

3. 第14回・第15回 オンライン講義

それぞれの講義終了後、次の5項目について受講者に回答を求めた。

1	名前
2	所属
3	勤務校
4	講座を受講して新たに学んだことや気付いたことは何ですか？
5	回学んだことを今後どのように活用したいですか？

質問項目5についての振り返りシートの内容の集約を1とし、2として集約されたフィードバックから見える成果と課題を付記した。

第14回 授業研究講座全体を通して見えてくる課題と成果

1. リフレクションシートの集約

Small talkでは、自由に話したりやりとりをしたりすることで、生徒に興味をもたせたり、雰囲気づくりを心がけたい。

中間評価の役割について、教師が多くの児童の中に共通して見出される問題を取り上げ、正しい表現のくり返しを実行していきたい。児童の面白いよい表現を取り上げ、その状況にあった表現を考えたり既習の表現を広げる活動に力を入れていきたいと思う。

Classroom Englishはもちろん、活動の導入や内容の確認については極力英語で行い、児童に気付きのチャンスを与えた上で、必要があれば日本語で確認しようと思う。

今後は自信をもって、ALTと打ち合わせができると思う。今までの授業はALT主導で、口をはさみたくても、何が正しいのかわからなくて言えなかったが、講義を聴いて自分なりの「よりよい指導」が少し確立できた。講座後の外国語活動で、座学になりそうなところを、「時間をとって、たくさん話をさせよう」と提案できたり、空欄に好きなものを書く活動では、「習っていない言葉を使ってもよい」や、「英語では、何というのかALTの先生に教えてもらいましょう」と指示を出したりできた。そうすると、児童がいつもより生き生きしているように見えた。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

Small talkや中間評価の役割について再認識することができた。教師の授業における英語使用についての目的を再認識し、これまで以上に使用していこうとする動機づけとなった。ALTとの打合せにおいて学級担任や専科教員がイニシアチブをとることが課題である。

第15回 小学校英語の指導に当たって求められる教師の力と小学校英語担当者に期待すること

1. リフレクションシートの集約

自分の英語を卑下しないということが今回印象に残っている。他者とのよりよいコミュニケーションを図るために使うものということ意識して、今後は自信がなくても積極的に英語を使っていこうと思った。

「正確さではなく、有用性が大切。誤解のないように話せばいい」とのお話を肝に銘じて、指導者としての自分が、臆せず話すモデルになるべく努めたいと思った。

授業の中で教師自身が積極的に子供たちの前で英語を使って見せることの大切さを改めて感じた。自分の英語の間違いを恐れずに積極的に使うだけでなく、ALTとのスモールトークを行う場面も増やしていくことができたら良いと感じた。

児童に正しさを求めるよりも、主体的なコミュニケーションや表現意欲を引き出す授業づくりを目指していきたいと思う。そのために、児童たちが「話したい」「聞きたい」と思えるような学習内容とするために、先行実践に学ぶとともに、クラスの児童たちの目線で教材開発に努めていきたい。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

コミュニケーションにおいては、正確性よりも有用性が重要であるので、教師自身は英語使用者としてのモデルを示すことが重要であることを再認識した。児童から表現意欲を引き出す授業づくりをする動機づけとなった。教師自身が自分の使う英語に自信を持ち、英語使用者としてのロールモデルとなる必要がある。

IV

講座内容に対する評価



各講座終了後に受講者に対して講座内容に関する評価アンケートを実施した。基本的には、受講者には講座終了後3日以内をめどに回答をしてもらった。ここからは、第4回から第15回までの各講座の評価アンケートの結果と分析を記す。第1回から第3回講座は過去の講座をビデオ視聴するオンデマンド式であったため、評価アンケートを実施しなかった。

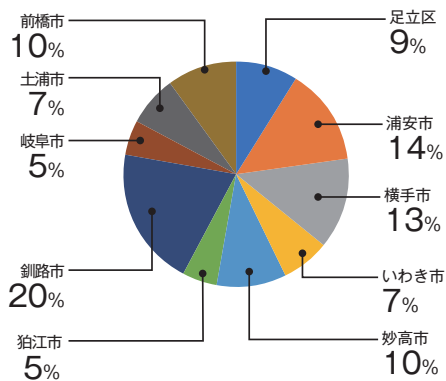
講座は第4回から第13回までが授業研究形式で、第14回と第15回は講義形式であった。そのため、アンケートの質問も講座形式によっていくつかを変更した。どちらの形式でも、最初に受講者の属性を知るための4つの質問を設けた。その後に講義形式では15個の質問を、授業研究形式では11個の質問を設けた。

第4回～第15回講座全受講者の属性に関する質問の結果分析

最初に、受講者の属性に関するアンケート結果を分析する。各講座終了後に評価アンケートに協力してくれた受講者は第4回講座から第15回講座まで合わせて延べ1207人であった。

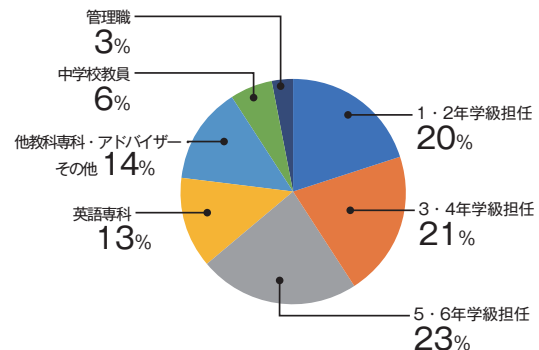
属性① 所属地区

全回答者1207人中、釧路市の受講者が20%、次いで浦安市14%、横手市13%、妙高市と前橋市10%、足立区9%、いわき市と土浦市7%、そして狛江市と岐阜市5%という結果であった。



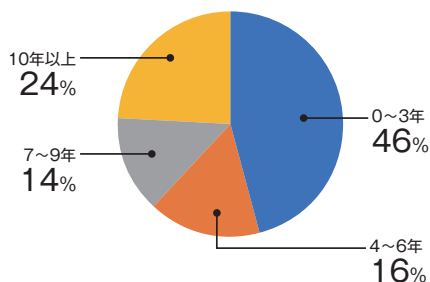
属性② 立場

「5・6年学級担任」が全体の23%で最大であった。次に、「3・4年学級担任」が21%で続き、「1・2年学級担任」が20%、「他教科専科・アドバイザー・その他」が14%、「英語専科」が13%、中学校教員6%、「管理職」3%であった。



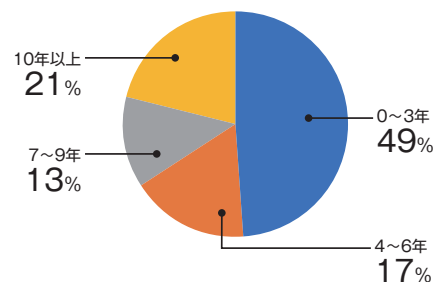
属性③ 外国語(活動)指導経験年数

「0～3年」が最大の46%を占めた。次に、「10年以上」が24%、「4～6年」が16%、「7～9年」が14%と続いた。この結果から、経験の浅い「0～3年」の受講者が約半分を占めていたことが分かった。また、7年以上の経験のある受講者も「10年以上」というベテラン教員と合わせて38%という高い割合を占めていた。



属性④ 外国語(活動)TT経験年数(日本人とのTTも含む)

属性④の結果は、属性③のそれとわずかに違うだけでほとんど類似していた。これによって、TT経験者は属性③の「外国語(活動)指導経験年数」より若干少ないことが分かった。この結果から、学校での外国語(活動)指導では、TT指導もほぼ同時に取り入れているということが分かった。

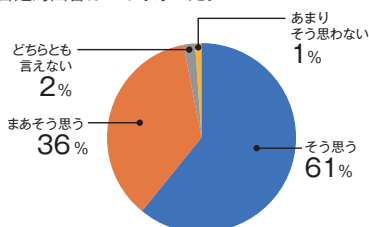


第4回講座 評価アンケート 結果分析

質問1

授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」(61%)と「まあそう思う」(36%)を合わせて肯定的意見が97%を占めた。「どちらとも言えない」が2%で、「あまりそう思わない」という否定的回答は1%であった。



質問2

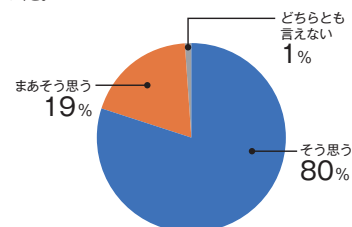
質問1で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

質問3

動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が80%で、「まあそう思う」が19%で、肯定的回答は合わせて99%とかなり高かった。一方、「どちらとも言えない」が1%で否定的回答はなかった。



質問4

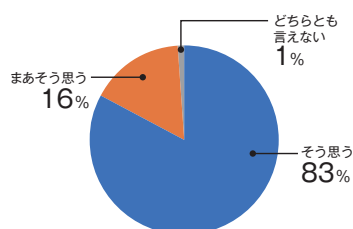
質問3で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。

・回答なし。

質問5

講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が83%を占めた。「まあそう思う」が16%で肯定的回答が99%であった。「どちらとも言えない」は1%で、否定的回答はなかった。



質問6

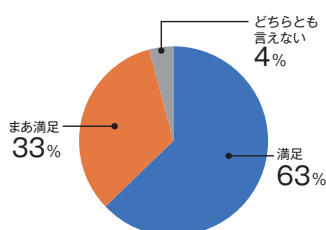
質問5で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

質問7

総合的にこの講座に満足できましたか

「満足」が63%で、「まあ満足」が33%となり、肯定的回答は合わせて96%であった。一方、「どちらとも言えない」は4%で、否定的回答はなかった。



質問8

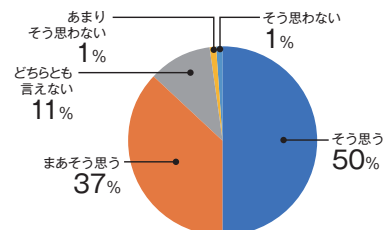
質問7で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

質問9

このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて87%と高かった。一方、「どちらとも言えない」は11%で、否定的回答は2%であった。



自由コメント

- ・中間支援の方法や丁寧な中間支援の大切さを今回知ることができました。2学期からの授業に生かしていきたいと思えます。
- ・リズムによってターゲットセンテンスの練習をするのが参考になりました。単語練習をメトロラーニングでやることはよくあっても、ターゲットセンテンスはいつもチャンツにたよっていました。チャンツが難しすぎたり、一つのチャンツに覚えることが多かったときは普通にリピートしたり、ゲームに入れ込んで練習させていましたが、リズムマシンをつかってやってみようと思えました。リキャストを意識してやり取りを工夫したり、やり取りにリアクションを工夫するなど少しずつ積み上げていきたいと思えました。さらに慣れてきたところで理由を加えてやり

- 取りをすることによって、既習事項を活用して習熟させていくことができるうえ、児童の思考・判断・表現の力を強化していくことができると思いました。Why? という問いかけに I want to ... I like ... といった既習事項をひきだしていく力を児童につけていきたいです。リキャストによって、徐々にやり取りがつながっていくように児童の思考判断表現の力を高めていけると思いました。
- ・自分が外国語科の授業を行うに当たって、どのような流れや活動量にすればよいのかを考え、振り返ることができました。勉強になりました。
- ・中学校教員として、大変勉強になりました。
- ・全国の先生方と研修する貴重な経験ができました。
- ・高学年の外国語活動を見させていただくのは初めてでしたが、どの

自由コメント

児童もいきいきと取り組んでいたのが印象的でした。授業を提供して下さった先生や運営に携わって下さった先生方に感謝申し上げます。

- 小中の連携の取り組みとして先生同士の交流も大切だが、子供同士の交流ももっと大切にしたら良いなと思いました。予定を合わせるのが難しいところではありますが、授業の交流や質問コーナーなどもっと増やしていけると良いなと思います。英語に関しても同様で今回のように小学校と中学校でつないで授業をできるの良いなと思いました。
- ALTとの良好な関係や、児童が英語に親しむ姿が見られて、とてもよい雰囲気の中で学習が進んでいるように感じました。
- やはり私たちの仕事は実際の授業をみさせていただくのが一番の学びになるので、録画の一部ではあっても授業をみせていただけてよかったです。
- 音声トラブルに対応していただき、ありがとうございました。
- 同学年の小学生を集めて自由に話したり活動したりする取り組み(小中の連携はあるものの、同じ中学校区の小学生同士の関わりは中学校入学までないから)。
- 小中連携とは違うかもしれませんが、本校は海外赴任で外国へ転出する児童が多くいるので、現地とオンラインで繋げてコミュニケーション取れたらいいなと感じました。小中連携では、中学の英語の専科の先生が、小学校でも指導できたらいいなと感じました。(出前授業ではなく、継続的に)
- いろいろと自分でもまねをして実践してみようと思った場面が多く見られてよかったです。
- 外国語専科の先生がいらっしゃるため、私自身まだ外国語指導の経験はありませんが、いざやるとなったときにお手本にしたい授業だと思って拝見させていただきました。活動のながれ、テンポ、先生の声かけなど勉強になりました。本日の協議会で、ほかの先生方からのご意見も参考になりました。
- 外国語活動に絞って考えるならば、土曜活動日の同時設定でスピーチ大会などで何か授業交流ができたらよいと思います。とはいえ、外国語以外の教科でも交流することがほばない中で、外国語に特化する必要性が見出せません。それ以外で考えると、行事への相互参加や災害教育と一緒に活動すると地域のためにもなると思います。子供たちは小から中へ行って変わることが多いと思いますが、教員側はそれぞれやってきているので、連携の話し合いはすすめて来ていますが、お互いの校種をもっと知ることが必要だと思います。
- 中学校1年生と、その校区内の小学校6年生が交流できる場を作れたらいいという話になりました。小学生同士が「中学校で楽しみなこと」「中学生になったらやりたいこと」をたくさん交流し、中学生は先輩として聞き、リアクションやアドバイスをできる場を作れたら、直接交

流で楽しめそうだと感じました。

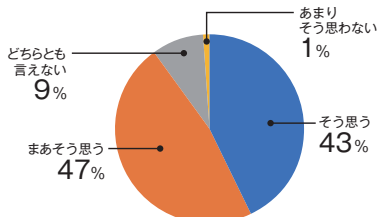
- 大変勉強になりました。今後に生かしたいと思います。
- 小中連携について、小中で釧路を外国語科(英語科)を通して盛り上げるような活動ができればいいなと思う。例えば、釧路市は夏に避暑地として外国人観光客も多くなるため外国人観光客が多く訪れるような観光地や施設にその場所の魅力を紹介するようなポスターや動画などを作るなど、釧路の若者(小中学生や高校生)が釧路を盛り上げるような直接関わるような活動を通して、地元をもっと好きになってもらいたい。
- 小中連携では、小中学校の教師の交換授業、小中学生の相互の学校訪問の機会を増やせば良いと考えます。
- 今回6年生の公開授業を見させていただき、英語を話そうとする雰囲気や挑戦した児童、がんばった児童に対して自然とほかの児童が拍手をしたりしており、日頃の学級経営の素晴らしさを感じました。外国語というハードルを乗り越えるためには、失敗したり間違えたり、うまくできなくても大丈夫だという雰囲気が児童の学習意欲を高め、コミュニケーションを行う上でとても大切だとわかりました。また、教師によるdemonstration→challenge→feedback→challengeといったように、児童が活動する場が2回設けられていた。これは、1回で活動を完結させず、2回行うことで、児童自身が「次はもっとこう言いたい」「次はうまく言いたい」という意欲を促す良い取り組みだと思いました。私も外国語活動を担当している身として、今回の授業を参考にこれからの自身の授業改善や教材研究・教材開発に生かしていきたいです。
- 小中連携でやってみたいのは、行事の協働です。運動会や子供まつり、展覧会や音楽会と一緒にできると学びが広がると思いました。
- なかなか全国の他の地域の先生方と関わる機会はないので、大変貴重な時間だと感じ、1回だけの講座参加になりましたがとてもとても勉強になり、今後の授業に生かしていきたいと思いました。
- 中学校の先生方の授業を6年生が受ける機会があるとよいと思います。
- 音声の聞き取りやすさや映像の見やすさが改善できればありがたいです。
- 同じ中学校区の児童同士で交流をする活動がないので、中学校進学のことを考えて交流の活動があってもいいと思いました。外国語で行うとしたら、1回目は自己紹介を英語で行ったり、それに対して質問をしたりする活動などが取り組みやすいと思います。
- 講座の中でもあったが、ターゲットセンテンスを児童に習得させる際に、リアクションを取り入れて会話をいうことだけに集中させないことが良かった。ぜひ取り入れたいです。

第5回講座 評価アンケート 結果分析

質問1

授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」(43%)と「まあそう思う」(47%)を合わせて肯定的意見が90%を占めた。「どちらとも言えない」が9%で、「あまりそう思わない」という否定的回答は1%であった。



質問2

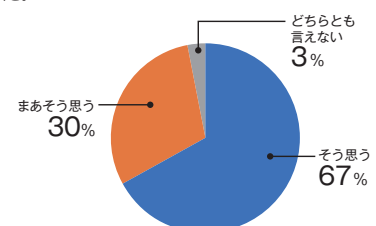
質問1で「あまりそう思わない」が「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 小中連携についての実践でしたが、2つの理由から以上のように考えました。1つは、目的意識の視点です。今回の目的であれば、外国語でやる必要感があまり感じられないのではないかと思います。もう1つは、小中連携という視点で、立場上実施しにくいと思ったからです。

質問3

動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が67%で、「まあそう思う」が30%で、肯定的回答は合わせて97%とかなり高かった。「どちらとも言えない」が3%で、否定的回答はなかった。



質問4

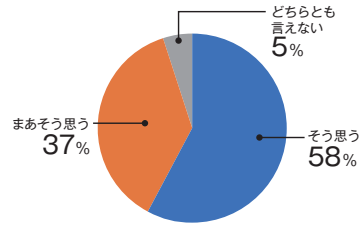
質問3で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- ・回答なし。

質問5

講師の指導・助言役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が58%を占めた。「まあそう思う」が37%で肯定的回答が95%であった。「どちらとも言えない」は5%で、否定的回答はなかった。



質問6

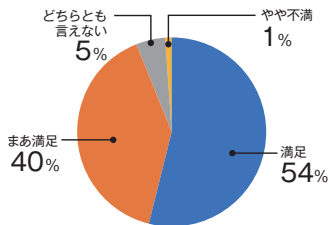
質問5で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- ・回答なし。

質問7

総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が54%で、「まあ満足」が40%となり、肯定的回答は合わせて94%であった。一方、「どちらとも言えない」は5%で、「やや不満」という否定的回答は1%であった。



質問8

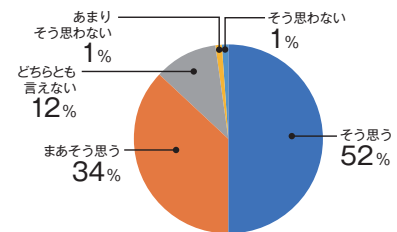
質問7で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- ・授業動画がカットされすぎていて、メインの活動で子供が何をしているのかがあまり見取れませんでした。子供の様子をもう少し見せてほしかったなという思いで、やや不満に致しました。

質問9

このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて86%であった。一方、「どちらとも言えない」は12%で、否定的回答は2%であった。



自由コメント

- ・小中連携の授業の在り方が学べました。相手意識をもって、目的・場面・状況を意識した活動ができるものでした。やはり、実際の相手がいることで、生徒・児童の主体的な学びができるのだと思いました。
- ・小中連携に関して、これまでも行ってきたのですが、Can doの共有は途中で頓挫してしまったので、現任校ではやり遂げたい。ビデオレターなどのオンデマンドではなく、オンラインで即座性のある取り組みも行いたい。
- ・本校では、今年度Unit1であいさつの単元があるので、中学校に出向き、あいさつを中学生にしてみる活動を取り組みました。
- ・小中連携のために、中学生が小学生に英語を使ってパフォーマンスをする。内容としては、小学生で学習した内容を取り入れてみたらどうかと考えた。具体的には、夏休みの思い出を紹介したり、小学生の頃の思い出を紹介したりなど。小学生のレベルと中学生のレベルの差をいい意味で感じさせられると考える。
- ・妙高市は、外国人の観光客も多いので、妙高市のPRを小学生と中学生合同で行う。(小学生はスピーチメインで動画作成。中学生はその内容を文字にし、ポスター作成)
- ・小中連携での外国語活動は、現任校でも取り入れられそうな活動で、非常に参考になりました。
- ・小中連携→小学校の運動会のお手伝いに中学生に来てほしい。合唱祭などの発表を小学生が見る。
- ・中学校に訪問して小学生が中学校の先生から授業を受けてみるのもいいと思いました。新しい環境で学習することも慣れが必要だと感じるからです。できれば近隣校と感想を共有し、横のつながりもできるといいと思いました。
- ・小学6年生の授業に中学生が既習内容を用いて授業する交流授業
- ・小中接続の方法として、今回は中学校の先生紹介でしたが、6年生の子供たちにとって部活動もより関心の高い事柄なので、中学校の部活動紹介を英語で行うのはどうかと思いました。

- ・同学年の小学生を集めて自由に話したり、活動したりする取り組み(小中の関わりはあっても、同じ中学校区の小学生同士の関わりは中学校入学までないから)。
- ・東京都での小中連携の仕方を知り、とても学びになりました。
- ・大変、参考になる取り組みでした。全体の学習指導計画があれば、見てみたかったです。
- ・小中連携というと6年と中1というイメージがありますが、本校では9年が6年に修学旅行の発表をするという取り組みを昨年度行いました。事例紹介でもありましたが、低学年?でも分かる「お買い物ごっこ」を中学生が英語の定員さんになって行うなど、6年中1という枠を超えて「楽しく」取り組むことも、長い目で見ると大事なことはないかと思いました。
- ・小中連携では、小学校の先生と子供が中学校と一緒にいき、先生は中学生に、小学生は中学校の先生に授業をすること方法もいいのではないかと考えました。
- ・小中連携のアイデアとのことでしたが、例えば小学生と中学生が自己紹介や簡単な質問をし合うなどの交流もできると、特に小学生にとって中学校が少し身近に感じられるなど安心感につながるかと思いました。
- ・小中連携アイデアについて。タブレット端末を使用して、小学生と中学生をつなげて交流を図る。事前に小学生に質問等を考えてもらい、それに中学生が答えてもらう、など。外国語に関わったことではありませんが、学習・生活面のそれぞれにおいて、小学生がより安心感を持って中学校入学にそなえられるのではないかと思いました。
- ・小中連携の一つの形を学べました。特に、中学生の子供たちが楽しそうに活動していたことが印象的でした。
- ・まず授業について書かせていただきます。コメントにもあった通り、小学生・中学生、双方向のやりとりがあったら良かったと感じました。例えば、小学生が中学校のことで知りたいことを質問して、実際に中

自由コメント

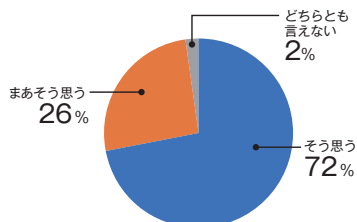
- 学生に答えてもらうなどです。そのような活動を取り入れることで、小中連携も密度の濃くなりますし、児童・生徒の思考・判断・表現もより働くのではないかと思います。授業に関しては、以上です。貴重な授業を見せていただきありがとうございました。次に、小中連携でやってみたい活動です。「小学生が中学校の英語の先生に自己紹介する」、「中学生また中学校の英語の先生が中学校を紹介する」、「小学生が校舎案内を中学校の先生にする」、「中学生が小学生に校舎案内をする」、「中学生が部活紹介をする」などが思いついた活動です。
- 小中連携について、私の取り組みたいことを書きます。6学年の3学期に、児童から中学生に向けて「中学校について教えてください」というメッセージや質問内容を送り、それに答える形で、中学生から授業や部活、学校行事などを紹介する動画をいただきたいです。その後、6学年の最終単元「中学校で頑張りたいことを発表しよう」に取り組みるとよいと思います。
 - 小中連携について、横浜市一中学校に中学校区の小学生の体験入学の際に、英語の授業体験の中で中学生も参加し、行事や部活動のプレゼンの後、質問のやり取りなどの直接交流ができればよい、と思います。
 - 小中連携について、小学校と中学校はもちろん、その校区にある小学校と小学校同士もたくさん交流したいなと強く感じました。特に6年生は来年一緒にクラスになる人たちがいると思うので。
 - 小中連携について、中学生が小学校で学習手伝い。(英単語や、ターゲットセンテンスの見本を見せる等)
 - 小中連携の活動として英語の寸劇はどうでしょうか?中学校の生活を英語で説明してみる。逆に小学生は昔話の英語劇を中学生相手に見せて評価をもらうなど。
 - 小学生が中学校に、または中学生が小学校に向かい、直接交流できれば良いと思いました。
 - 異年齢集団による校内オリエンテーリング(進学する中学校にて)
 - 小中連携授業のアイデア:①中学1年生「中学校の行事・部活動・授業の紹介」→小学6年生:それを聞いて「楽しい授業・入りたい部活動・楽しみたい行事」を感想として伝える
 - 小中連携について・・・英語という教科とは離れてしまうのですが、やはりリアルタイムで児童が中学校の様子や雰囲気を感じることが大事だと思います。例えば、中学生による校内案内や授業体験、中学生との給食試食会などがあるかと思いました。また、英語に関してだと、やはりALTや専科教諭との交流会があるかと思います。中学校生活に不安がある児童の多くは「中学校って大変そう」「学習が難しそう」「どんな先輩や先生がいるかわからないからこわい」といった経験したことがないことからくる不安が多いと思います。つまり、体験したり実際に会ったり、見たりすることで、その不安を軽減できるのではないかと思います。
 - 小中連携で、縦割り班を作り、地域のゴミ拾いや木植え、花壇の整理などを行ってみたいです。
 - 妙高市でかつて行っていた「ブリッジカリキュラム」:6年生で2時間、中学校で1時間の校種をまたいだ単元
 - zoom等でつなぎ、ブレイクアウトルームのような機能で、無作為に選ばれた相手とのコミュニケーション活動
 - 小中連携でやりたいことは、中学生のスピーチコンテストの音声を小学校の給食の時間の放送で紹介することです。
 - 小学生が中学校に訪問し、グループごとに校内を簡単な英語で案内してもらおう活動
 - 小中連携は行事でやってみたいです。運動会や展覧会、音楽会、子供まつりなどの行事を協働して行くと、学びが多いのではないかと思います。
 - 小学生のグループに中学生がリモートで参加し、直接やりとりする活動。
 - 中学校の先生の出前授業、小中合同授業
 - 単なる出前授業というのではなく、同じエリアの小学校に中学校の英語教師が定期的に授業をすること学習できるといいなと思った。時差もあるので動画を撮影したものをアメリカの現地の子供に見てもらって感想をもらったり、手紙の交換は昨年度やりました。伝えたい相手が明確にいるのは、学習者の意欲を駆り立てると思います。
 - 中学校の先生が小学校で、中学校の授業を再現する。(児童が中学校の英語への見通しをもたせるため。)・中学校の先生が小学校へ来て、小学校の英語の授業をする。(中学校の先生が、小学校英語への理解を深め、中1ギャップへ備えるため。)・ビデオレター交換。・実際に会って、互いの発表を見合う。リスポンスも英語で伝え合う。・体育館などの広い場所で、英語のアクティビティをする。
 - 2学期末から3学期にかけて実際に小中の接続授業をやってみます。中学校の先生紹介→小学生の自己紹介 本校は物理的な距離も近いので、実際に訪ねてやってみようと思います。
 - 小中連携のアイデアはこちらでしょうか。グループで話中で、直接交流の機会は大切だと思いました。小学生が中学校へ体験入学したり、中学生が小学校へ来て中学の紹介をしたりといったことができたら良いと思います。そのために、教員同士が打ち合わせたり、準備したりする時間を確保するためのアイデアがあれば教えてください。いろいろ新しい取り組みをしたい気持ちは大いにありますが、業務が多くて時間を捻出するのが難しいと日々感じています。
 - 中学校の先生の授業を小学生が受ける機会があるとよいと思います。
 - 英語劇や英語のスピーチなど、小中連携として、そのような機会があったらどうかなと思いました
 - 自分だったらやりたい小中接続:テストの結果など情報を共有し、その学年にあった授業を展開すること。
 - 小中連携は、「やりたい」「やらねば」という気持ちがありますが、一人でできるものではないので二人の足を踏んでいます。しかし、できることから進めていく必要があるなと感じました。管理職とも相談しながら、進めていければと思います。
 - コロナ禍だったこともあり、外国語の小中接続が滞っていたが、今年からは中学校の先生から英語の授業をしていただく等の機会を作っていきたいと思う。中学校入学前に、小学校よりはテンポの速い中学校の授業を経験させたい。また、学びの履歴の情報交換や、中学校の英語科の先生から6年生の外国語の授業を参観していただくのも良いと思う。中学校側からも関心を持っていただくことが大切だと思う。

第6回講座 評価アンケート 結果分析

質問1

授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」(72%)と「まあそう思う」(26%)を合わせて肯定的意見が98%を占めた。「どちらとも言えない」が2%で、否定的回答は0%であった。



質問2

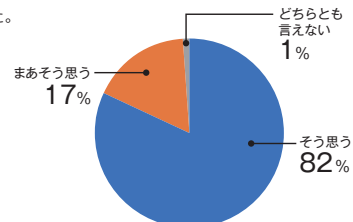
質問1で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

質問3

動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が82%で、「まあそう思う」が17%で、肯定的回答は合わせて99%とかなり高かった。「どちらとも言えない」が1%で、否定的回答はなかった。



質問4

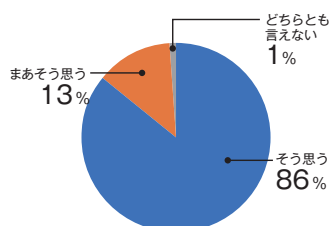
質問3で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

質問5

講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が86%を占めた。「まあそう思う」が13%で肯定的回答が99%であった。「どちらとも言えない」は1%で、否定的回答はなかった。



質問6

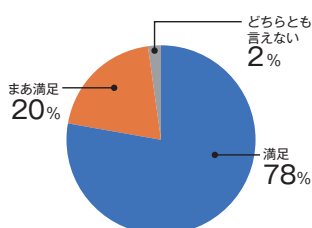
質問5で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

質問7

総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が78%で、「まあ満足」が20%となり、肯定的回答は合わせて98%であった。一方、「どちらとも言えない」は2%で、否定的回答は0%であった。



質問8

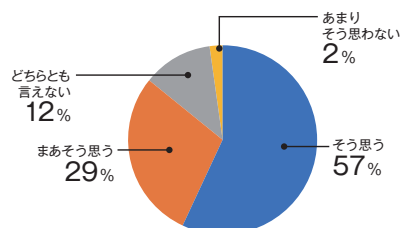
質問7で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

質問9

このような機会があれば、また受講したいですか

肯定的回答は合わせて86%であった。一方、「どちらとも言えない」は12%で、否定的回答は2%であった。



自由コメント

- ・授業実践、とても参考になりました。ありがとうございました。
- ・「友達をよく知ろう」を活かしたダイナミックな活動ができるといいですね。
- ・クラスを持ちながら英語の授業の準備をしっかりとされていて素晴らしいと思いました。
- ・"I see."の発音だけ気になりました。児童は先生の全てを真似するので、よく使う英語については、ブラッシュアップしていけると良いなと感じました。自分自身も頑張ろうと思います。
- ・授業動画に分かりやすい字幕も入れてくださっているの、とても会話の内容が頭にはいつてきやすかったです。とくに吹き出しの挿入が楽しかったです。足立スタンダードをベースにした外国語科授業のイメージがよくわかりました。とても参考になりました。

- ・外国語の指導に関して、漠然としていたことが少しはっきりとてくるいい機会となりました。
- ・大変勉強になる講座でした。
- ・今回授業をさせていただいた横浜市立横手北小学校 教諭 小田島季花と申します。今回は、授業をさせていただいたことで、私自身、外国語活動を教えることに対して自信を持って行うことができるようになりました。また、具体的な助言や指導があったおかげで、さらに指導力を高められる機会になりました。
- ・貴重な学びの機会をいただき、ありがとうございました。
- ・リアクションやジェスチャーをクラスで定着させていてすごいなと思いました。分からない言葉をALTに聞く時間をとったり、授業者の反応も大きくとったりして勉強になりました。

自由コメント

- ・授業の様子から、児童の「楽しい」「やってみよう」などの気持ちが伝わってくる場面がたくさん見られ、大変勉強になりました。
- ・とても充実した講座になりました。私自身1年目ですが、2年目の先生の授業の進め方のスムーズさや児童の語彙の多さ、竹田先生の児童を引き付けるような導入など、参考にさせていただきます。
- ・各地域の先生方の考えを聞くことができ大変勉強になりました。
- ・各地域の先生方の授業を見た感想を共有することができ大変有意義だったと思います。最後に指導主事の講評を聞くことができたことも大変よかったです。

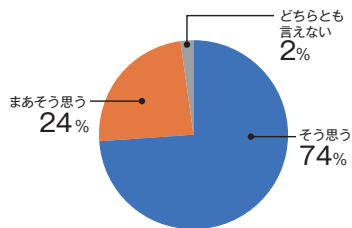
- ・私は現在、初めての英語の授業を日々奮闘しています。私の学校は有り難いことにALTの先生が主導になって授業を展開してくださっています。しかし、今回の発表を聞いて、ALTの活用の仕方や英語の授業の課題設定の仕方が大変勉強になりました。
- ・全国、津々浦々で、学習指導要領を根幹に据え、いろいろな先生方が、たくさんの工夫をされて授業を展開されていることを拝見し、とても勇気づけられました。たくさんの授業のヒントをいただきましたので、できる範囲で、よりよい授業を目指していきたいです。

第7回講座 評価アンケート 結果分析

質問1

授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」(74%)と「まあそう思う」(24%)を合わせて肯定的意見が98%を占めた。「どちらとも言えない」が2%で、否定的回答は0%であった。



質問2

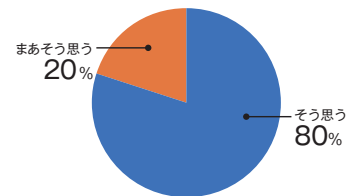
質問1で「あまりそう思わない」が「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- ・回答なし。

質問3

動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が80%で、「まあそう思う」が20%で、肯定的回答は合わせて100%であった。



質問4

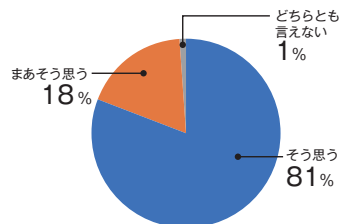
質問3で「あまりそう思わない」が「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- ・回答なし。

質問5

講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が81%を占めた。「まあそう思う」が18%で肯定的回答が99%であった。「どちらとも言えない」は1%で、否定的回答はなかった。



質問6

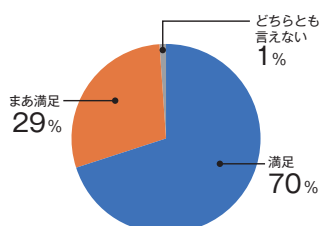
質問5で「あまりそう思わない」が「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- ・回答なし。

質問7

総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が70%で、「まあ満足」が29%となり、肯定的回答は合わせて99%であった。一方、「どちらとも言えない」は1%で、否定的回答は0%であった。



質問8

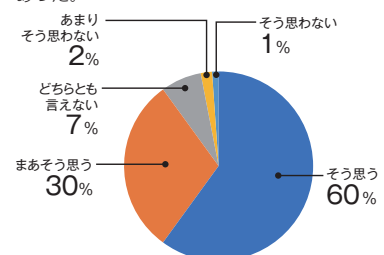
質問7で「やや不満」が「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- ・回答なし。

質問9

このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて90%であった。一方、「どちらとも言えない」は7%で、否定的回答は3%であった。



自由コメント

- Goalの共有の仕方が本当に勉強になりました。
- 一人で外国語の授業をする様子を初めて観ました。
- 授業動画に分かりやすい字幕も入れてくださっているのも、とても会話の内容が頭にはいつてきやすかったです。とくに吹き出しの挿入が楽しかったです。また、担任の先生やゲストが登場する動画の活用を私もやってみたいと思いました。足立スタンダードをベースにした外国語科授業のイメージがよくわかりました。とても参考になりました。
- 5年生を担当しております。今後の授業の参考にさせていただきます。
- 大変勉強になる講座でした。
- 単元のゴールを明確に見据えて、毎時間のめあてを設定したり指導にあたりていくことの大切さを再確認しました。計画や授業準備がとても大切だと改めて感じ、やらなければならないことが多い現状、当たり前のことだけどとても難しいことだと思いました。貴重な研修の機会をありがとうございました。
- 動画を使ってめあてを考える導入が面白かったです。先生がべらべらと英語で子供たちに話してすごいなと思いました。「くわしく」

という視点が明確に分かったのでどんな質問をすればいいか子供たちもわかりやすかったと思います。

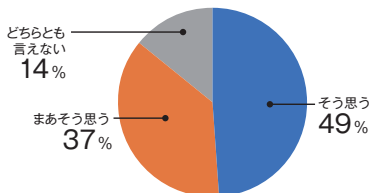
- 貴重な学びの機会をいただき、ありがとうございました。
- 振り返りシートが分かりやすく、簡単で参考になりました。
- 導入のしかたが、児童の気を引くとても面白い授業でした。
- 各地域の先生方の授業を見た後の感想を共有することができて大変有意義だったと思います。
- 素敵な発表ありがとうございました。ALTはおらず、教師一人で英語の授業を進めていく形を初めて拝見させていただきました。デジタル教科書にとらわれず、子供たちの興味が湧くような身近な物を教材にしている大変勉強になりました。また、子供たちが自分で課題に気づき、本時の課題に向かってコミュニケーションをとっている姿もとても印象的でした。2学期から、自分の学級でも今回学んだことを挑戦していきたいです。
- 楽しい授業を参観させていただき、ありがとうございました。参考になることが見つかりました。とてもうれしいです。実践したいと思います。

第8回講座 評価アンケート 結果分析

質問1

授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」(49%)と「まあそう思う」(37%)を合わせて肯定的意見が86%を占めた。「どちらとも言えない」が14%で、否定的回答は0%であった。



質問2

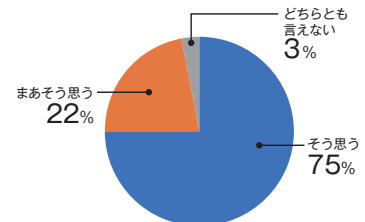
質問1で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 動画がよく見えませんでした。

質問3

動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が75%で、「まあそう思う」が22%で、肯定的回答は合わせて97%であった。「どちらとも言えない」が3%で、否定的回答はなかった。



質問4

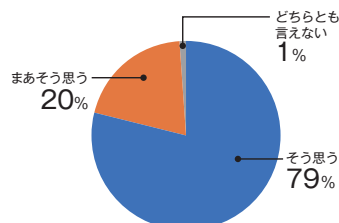
質問3で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問5

講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が79%を占めた。「まあそう思う」が20%で肯定的回答が99%であった。「どちらとも言えない」は1%で、否定的回答はなかった。



質問6

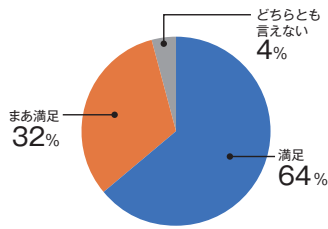
質問5で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問7

総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が64%で、「まあ満足」が32%となり、肯定的回答は合わせて96%であった。一方、「どちらとも言えない」は4%で、否定的回答は0%であった



質問8

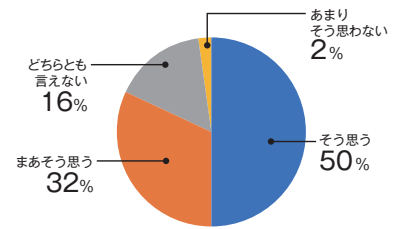
質問7で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

質問9

このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて82%であった。一方、「どちらとも言えない」は16%で、否定的回答は2%であった。



自由コメント

- ・全国の多様な実践をもとにして、視聴・協議・講話に参加できとても良かった。
- ・第4回から第9回まで大変有意義な研修となりました。
- ・自分でできるかはまだ自信がありませんが、とても勉強になりました。

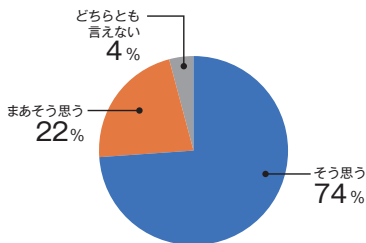
た。準備を十分にすること、ALTとの打ち合わせを十分に行うことで、授業の質が上がるのがわかりました。今後も勉強を続けたいと思います。

第9回講座 評価アンケート 結果分析

質問1

授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」(74%)と「まあそう思う」(22%)を合わせて肯定的意見が96%を占めた。「どちらとも言えない」が4%で、否定的回答は0%であった。



質問2

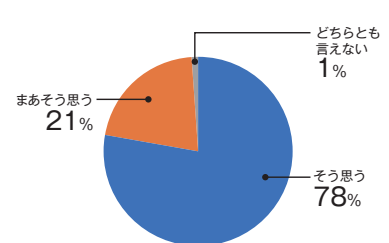
質問1で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

質問3

動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が78%で、「まあそう思う」が21%で、肯定的回答は合わせて99%であった。「どちらとも言えない」が1%で、否定的回答はなかった。



質問4

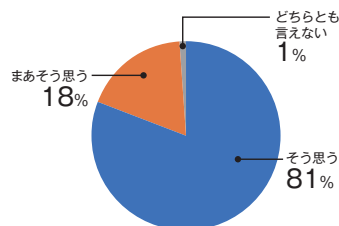
質問3で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

質問5

講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が81%を占めた。「まあそう思う」が18%で肯定的回答が99%であった。「どちらとも言えない」は1%で、否定的回答はなかった。



質問6

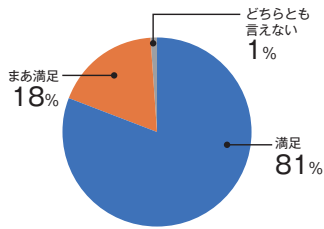
質問5で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

質問7

総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が81%で、「まあ満足」が18%となり、肯定的回答は合わせて99%であった。一方、「どちらとも言えない」は1%で、否定的回答は0%であった。



質問8

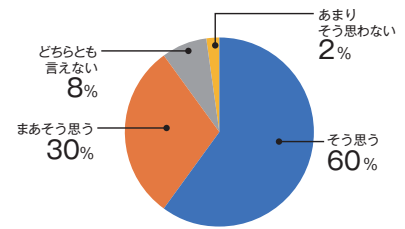
質問7で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 内容はよかったが、音声が聞き取りづらい箇所があった。

質問9

このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて90%であった。一方、「どちらとも言えない」は8%で、否定的回答は2%であった。



自由コメント

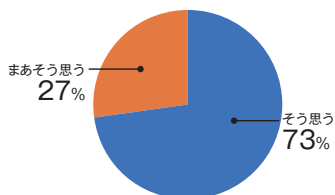
- TTの効果的なやり方、授業の流れなど、勉強になることがたくさんありました。
- 勉強になりました。
- 笠野先生の授業から学んだことをもとにして今後の授業では、①ALTの発話の理解をすぐに和訳するのではなく、気付きを促すための支援となること、②リアクションを示すよきモデルとなること、を生かしていきたいと考えました。
- ALTとの役割分担を適切に行うことで、子供たちの意欲が上がるのが分かりました。フォニックスを積み上げることで、初めての単語も読めるようになるなど、子供たちの自信につながるのだと思いました。

第10回講座 評価アンケート 結果分析

質問1

授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」(73%)と「まあそう思う」(27%)を合わせて肯定的意見が100%を占めた。



質問2

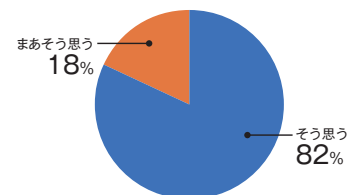
質問1で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問3

動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が82%で、「まあそう思う」が18%で、肯定的回答は合わせて100%であった。



質問4

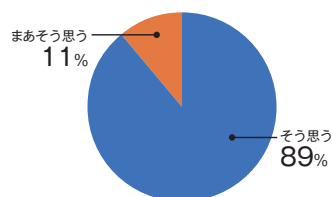
質問3で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問5

講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が89%を占めた。「まあそう思う」が11%で肯定的回答が100%であった。



質問6

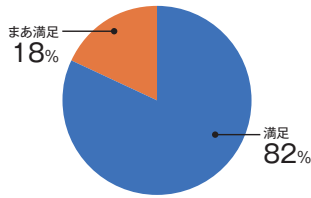
質問5で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問7

総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が82%で、「まあ満足」が18%となり、肯定的回答は合わせて100%であった。



質問8

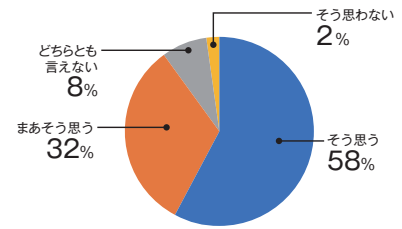
質問7で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

• 回答なし。

質問9

このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて90%であった。一方、「どちらとも言えない」は8%で、否定的回答は2%であった。



自由コメント

- 自分の授業でもぜひやってみたい活動がありました。また、先生の子供たちへの声かけもこれまで素敵でした。めあてステップ、やってみたいです。
- 今後の指導に生かしていきます。
- 小学生の明るく元気な授業で楽しかったです。授業提供ありがとうございました。
- 担当になった学校は大変だったと思います。授業を提供してくださ

た先生をはじめとして、運営に携わってくださった方々に感謝申し上げます。今後の指導に活かしていきたいと思えます。

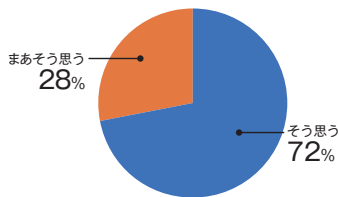
- 大変参考になる授業や貴重なお話ありがとうございました。
- お忙しい中、このような機会を用意してくださり、ありがとうございました。
- 大変勉強になりました。

第11回講座 評価アンケート 結果分析

質問1

授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」(72%)と「まあそう思う」(28%)を合わせて肯定的意見が100%を占めた。



質問2

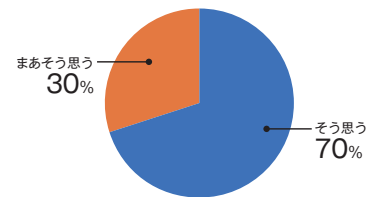
質問1で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

• 回答なし。

質問3

動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が70%で、「まあそう思う」が30%で、肯定的回答は合わせて100%であった。



質問4

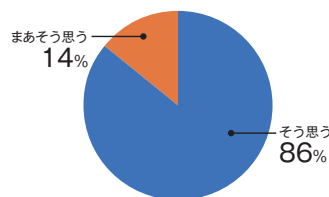
質問3で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

• 回答なし。

質問5

講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が86%を占めた。「まあそう思う」が14%で肯定的回答が100%であった。



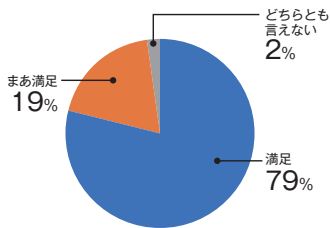
質問6

質問5で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

• 回答なし。

質問7 総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が79%で、「まあ満足」が19%となり、肯定的回答は合わせて98%であった。「どちらとも言えない」は2%で、否定的回答はなかった。

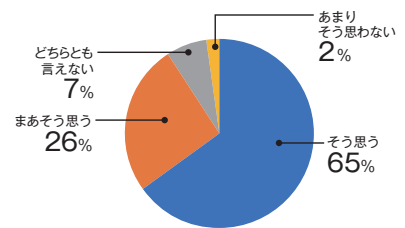


質問8 質問7で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

質問9 このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて91%であった。一方、「どちらとも言えない」は7%で、否定的回答は2%であった。



自由コメント

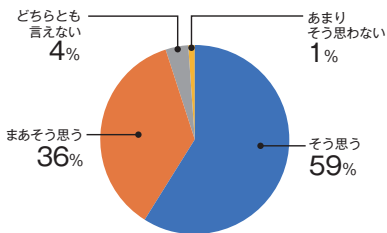
- ・子供たちが楽しそうに学習している様子が微笑ましかったです。先生自身が楽しそうで、穏やかな時間で、子供たちも安心できる空間なのだと感じました。
- ・今後の指導に生かしていきます。
- ・書くことに重きを置いた授業で、スベルの確認等、高学年の外国語科の授業として、大切な視点だと感じました。しかし、ややもすると単語を覚えさせる…というような受験英語的な要素につながってしまい

- ・そうだとも感じました。「小学校では、なぞり書きでOKで書くことに慣れる。」それならば、もう少し子供たちに自由度をもたせて書かせ、修正してあげるという程度でもよいのかも感じました。改めて、高学年における「書く」という視点に立って考える機会となりました。
- ・大変参考になる授業や貴重なお話ありがとうございました。
- ・大変勉強になりました。

第12回講座 評価アンケート 結果分析

質問1 授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」(59%)と「まあそう思う」(36%)を合わせて肯定的意見が94%を占めた。「どちらとも言えない」が4%で、「あまりそう思わない」が1%であった。

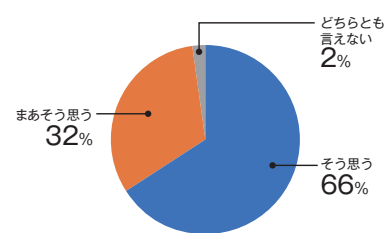


質問2 質問1で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・ハイレベルすぎる。

質問3 動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が66%で、「まあそう思う」が32%で、肯定的回答は合わせて98%であった。「どちらとも言えない」が2%で、否定的回答はなかった。

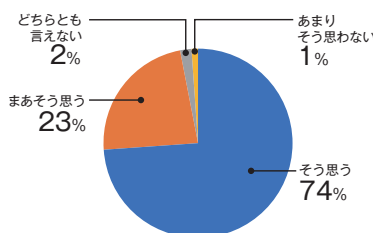


質問4 質問3で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。

・回答なし。

質問5 講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が74%を占めた。「まあそう思う」が23%で肯定的回答が97%であった。「どちらとも言えない」は2%で、「あまりそう思わない」が1%であった。

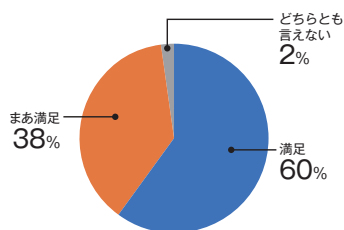


質問6 質問5で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・指導助言の時間が短すぎました。また、金子先生の話はもっと聞きたいと感じていたので残念でした。

質問7 総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が60%で、「まあ満足」が38%となり、肯定的回答は合わせて98%であった。一方、「どちらとも言えない」は2%で、否定的回答は0%であった。

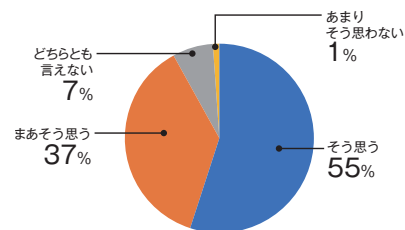


質問8 質問7で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

質問9 このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて92%であった。一方、「どちらとも言えない」は7%で、否定的回答は1%であった。



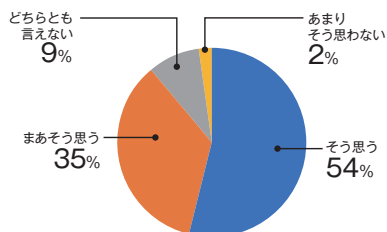
自由コメント

- ・時間がない中だったので仕方ないのですが、金子先生のご講義をもう少し聞きたかったです。
- ・他校の、外国語の実際の取り組みを視聴出来たことや、講師の先生の専門的な講評を聞いたことで、今後の方向性がわかり、とても有意義でした。
- ・岐阜市には素晴らしい先生がいっぱいますね。いわき市の先生方の質問が的確でした。予習は必須ですね！
- ・ALTの先生が机間指導で個別指導をしてくださるのは、子供たちもうれしいと感じました。これまでの学習の積み重ねが分かる授業で、大変参考になりました。
- ・大変勉強になりました。
- ・小学校の授業を見せていただき、中学校での指導に連結していきたいです。
- ・英語の評価の仕方が分からなかったのが、児童の活動のさせ方や、見取り方が勉強になりました。また、ハイレベルな英語の授業を見ることができたので、自分の知らない世界で視野が広がりました。
- ・全国には公立校でもハイレベルな学習ができる学校があることを知り、刺激になりました。いろいろな考え方をすることもできました。金子先生のお話は、明確でわかりやすく、勉強になりました。動画の音声はやや聞き取りにくかったのが、少し残念でした。
- ・スモールトークの中身もデモンストレーションを特に行わないことで子供たちの発言の自由度が高くていいなと感じた。周りの児童を驚かせるように調べるという動機付けは子供の意欲につながっていきそうだなと思いました。
- ・大変参考になる授業でした。
- ・高学年になると、使える英語や活動も増え、ICTを有効に活用した取組が出来ると言うことを学ばせていただきました。また、オールイングリッシュは魅力的ではありますが、本校児童のレベルでは、分からないまま、周りをまねて活動するだけで、そのうち意欲が下がってしまう児童が増えてしまうように感じました。児童の実態に応じて活動を組み立てることの大切さを感じると共に、貴校の児童のレベルの高さを感じました。

第13回講座 評価アンケート 結果分析

質問1 授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」(54%)と「まあそう思う」(35%)を合わせて肯定的意見が89%を占めた。「どちらとも言えない」が9%で、「あまりそう思わない」が2%あった。

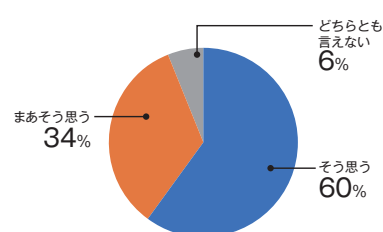


質問2 質問1で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- ・専科以外が、教えた授業という感じだったからです。市内の研究授業では、よいかもしれませんが、市町村をまたぐ授業実践としては、提案内容が焦点化されていないと感じたからです。
- ・目的や場面、状況の設定がなく、言語活動とはあまり言えないと思ったから。

質問3 動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が60%で、「まあそう思う」が34%で、肯定的回答は合わせて94%であった。「どちらとも言えない」が6%で、否定的回答はなかった。

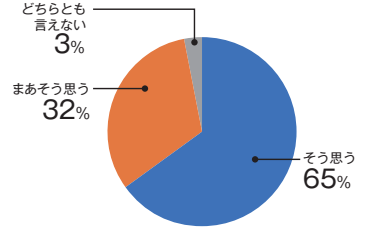


質問 4 質問3で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

• 回答なし。

質問 5 講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が65%を占めた。「まあそう思う」が32%で肯定的回答が97%であった。「どちらとも言えない」は3%であった。

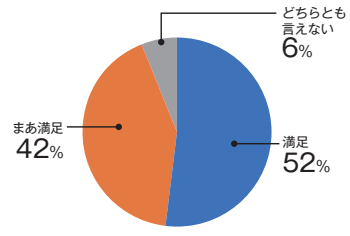


質問 6 質問5で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

• 回答なし。

質問 7 総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が52%で、「まあ満足」が42%となり、肯定的回答は合わせて94%であった。一方、「どちらとも言えない」は6%で、否定的回答は0%であった。

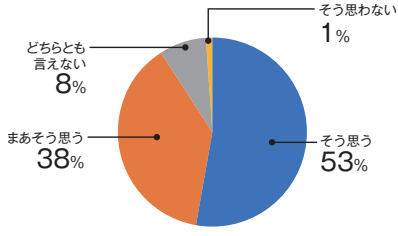


質問 8 質問7で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

• 回答なし。

質問 9 このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて91%であった。一方、「どちらとも言えない」は8%で、否定的回答は1%であった。



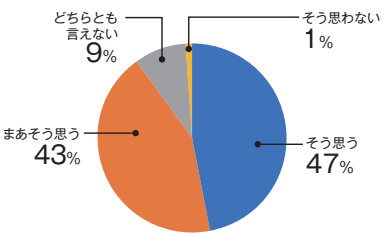
自由コメント

- 授業の動画を見て、良い点や課題の共有ができたことが、今後の指導の参考になりました。
- みんなが楽しく学べる外国語を目指す取り組みが素晴らしいと感じました。
- このような機会を一度でも与えていただき感謝しています。
- 大変勉強になりました。
- 英語専科でない授業者の先生から刺激をいただきました。
- 授業実践、発表、おつかれさまでした。言語活動という意味で、生かしていきたいことが見つかりました。
- ALTの活用の仕方や役割など理解することができました。色々な活動にALTを入れ、子供たちにとって効果的な授業構成を組み立てていきたいです。また、配慮を要する児童に対しても、自信をもって授業に参加できる手立てがあり、勉強になりました。
- バッドモデルを提示してどこが悪いかを子供に気付かせようとしているのが参考になった。グッバイチャレンジはやってみたいと思った。
- 授業の参考にします。
- 忙しい中、授業の準備等大変お疲れ様でした。
- 児童の実態に合わせた活動が組まれていたと感じます。また、スモールトークでの手だて(リアクションしかた)などをこれからも継続することで、続く会話が実現できるのではないかと思います。

第14回講座 評価アンケート 結果分析

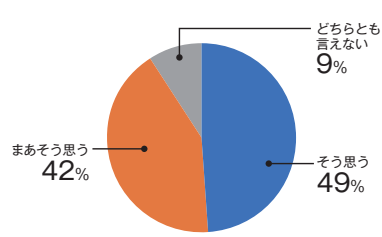
質問 1 講座内容は理解できましたか。

「そう思う」(47%)と「まあそう思う」(43%)を合わせて肯定的回答が90%を占めた。「どちらとも言えない」が9%で、否定的な回答は1%あった。



質問 2 講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「そう思う」(49%)と「まあそう思う」(42%)を合わせて肯定的回答が91%であった。「どちらとも言えない」が9%で、否定的回答はゼロであった。



質問 3 質問2で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

• 回答なし。

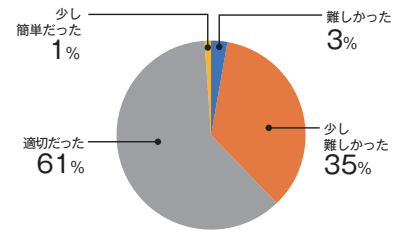
質問4 講座内容をご自分にとって適切でしたか。

「適切だった」との回答が61%あった。「少し難しかった」が35%、「難しかった」が3%を占めた。「少し簡単だった」が1%あった。6割の受講者には適切であったが、4割弱の38%の受講者には難しかったようだ。この結果に関しては、受講者の外国語指導経験年数と関係があるのではないかと考え、クロス集計を行いカイ2乗検定を行った。しかし、結果は表1の通りで、有意差は確認されなかった($p=0.664$ であり、 $p < .05$ ではなかった)。この結果から、この講座内容を適切であったかどうかの判断基準は外国語の指導経験とは関係がないと分かった。

表1 カイ2乗検定

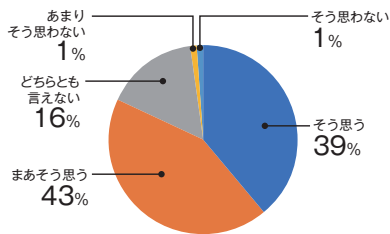
	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearson のカイ 2 乗	6.740 ^a	9	0.664
尤度比	8.621	9	0.473
有効なケースの数	130		

a. 8 セル (50.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は .16 です。



質問5 講座で提示された資料は今後活用できますか。

肯定的回答が82%を占めた。「どちらとも言えない」が16%で、否定的回答が2%あった。

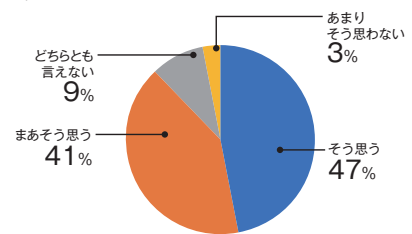


質問6 質問5で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- ・メモをしきれなかったため。資料はモニターに映されていましたが、小さく見辛かったため。
- ・再任用3年目で理科専科なので、活用する機会がない。

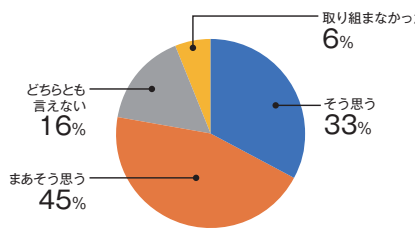
質問7 講師の説明は分かりやすかったですか

「とてもそう思う」が47%で、「まあそう思う」が41%となり、肯定的回答は合わせて88%となった。「どちらとも言えない」が9%で、否定的回答が3%あった。



質問8 講座前タスクは役に立ちましたか。

肯定的回答が78%占めた。「どちらとも言えない」も16%と比較的多かった。また、「取り組まなかった」も6%占めた。

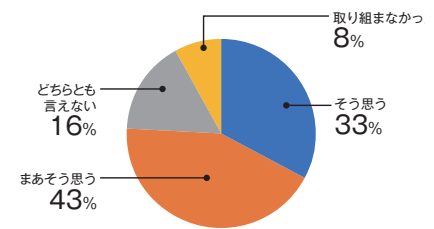


質問9 質問8で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- ・回答なし。

質問10 講座中のタスクは役に立ちましたか。

76%は肯定的に回答した。「どちらとも言えない」が16%で、「取り組まなかった」が8%あった。

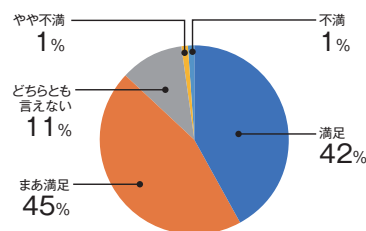


質問11 質問10で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- ・指導要領の比較をして講座に臨みましたが、特に有効だと感じなかったため。

質問12 総合的にこの講座に満足できましたか。

肯定的回答は87%であった。「どちらとも言えない」が11%で、否定的回答は2%あった。



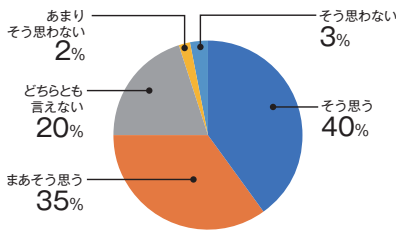
質問13 質問12で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- ・もう少し講義の回数や時間を減らしていただきたい。申し訳ないですが、外国語以外にもたくさん仕事があり、あまり外国語ばかりに時間を割られないという気持ちがあります。

質問14

このような機会がまたあれば、受講したいですか。

75%の受講者が肯定的に回答した。「どちらとも言えない」は20%であった。否定的な回答は5%あった。



自由コメント

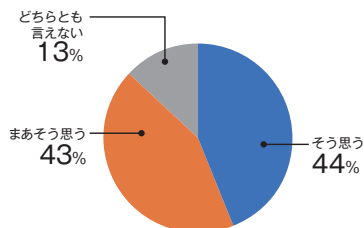
- さらっと講師の先生から、出てくる単語がわからなくて困りました。
- スモールトークで楽しく授業を始められるようにしたいと思います。
- 日本語をどのような場合に使うのかということがよく分かりました。気付きの機会を奪わないように、英語を使う時間をしっかりと保証できるように気を付けて行きたいです。「意味の交渉」は、小学生なら簡単な英語を使っている、これからも取り入れていきたいと思います。
- 大変勉強になりました。
- 中学で教師をしています。中間交流での日本語の使用についてですが、以前文科省の方の視察により授業を観ていただいたとき、今の確認等もできる限り英語の使用をするように求められました。非常に難しいと感じましたが、簡単なことはなるべく伝えていきます。しかし理解できるのは上位の6-10人くらいだと実感しています。わからないことが増えることは英語嫌いにつながると思います。中間交流についてまた知りたいと思いました。
- 現在、学校は小中一貫化や外国語の教科化が進んできている。我々の外国語に対する考え方も今までと同じではなく、常に新しい視点で考えていくことが大切だと感じました。
- 受講内容を授業改善にいかしていきたいと思います。
- 小学校において、担任が英語で話せる前提で授業を進めるのは難しいが、できる範囲で英語をつかって授業を行うのならできると思う。
- Small Talkや小中連携、日本語がどこまで必要か、今まさに仕事をしていて悩みや不安がある部分の話をしていただけたので、本当に多くの学びがありました。
- 今まで見せていただいた授業を通しての具体的な話をたくさん聞くことができ、大変勉強になりました。
- 児童が英語を使う場を確保すること、児童の気付きを促すことを意識して授業づくりをしたいと思います。
- Small Talkが英語の環境作りの潤滑油の役割を果たしていることを再認識しました。また、子供たち同士が会話をするだけでなく、テーマや言語形式も自由に決めて良いということも分かり、実践してみようと思います。また、ALTとの関わり方や授業での効果的な取り入れ方を考えていきたいです。さらに、ポジティブなアクションばかりでなく、言葉が分からないときの反応の仕方も少しずつ学ばせていきたいです。

第15回講座 評価アンケート 結果分析

質問1

講座内容は理解できましたか。

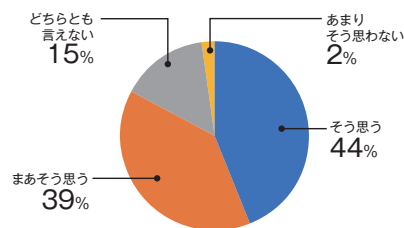
「そう思う」(44%)と「まあそう思う」(43%)を合わせて肯定的回答が87%を占めた。「どちらとも言えない」が13%で、否定的な回答はなかった。



質問2

講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「そう思う」(44%)と「まあそう思う」(39%)を合わせて肯定的回答が83%であった。「どちらとも言えない」が15%で、否定的な回答は2%であった。質問1と2の回答の結果から、多くの受講者にとって講座は適切な内容であったようだ。しかし、質問3の回答から分かるように、一部の受講者はより実践的内容をより好ましいと考えたようだ。



質問3

質問2で「あまり思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 実践的な内容の方が興味があるから。
- 第一回や、第十四回の内容の繰り返しが多く、新たな気付きはほとんど無かった。
- 前回はそうでしたが、音声が聞こえなくなり、残念でした。

質問4 講座内容をご自分にとって適切でしたか。

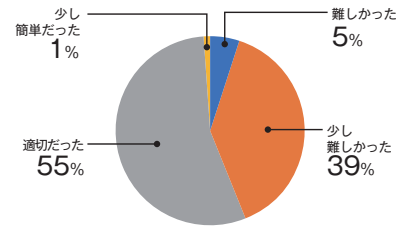
「適切だった」との回答が55%あった。「少し難しかった」が39%、「難しかった」が5%を占めた。「少し簡単だった」が1%あった。

6割弱の受講者には適切であったが、4割以上の受講者には難しかったようだ。「受講者の外国語指導経験年数」と関係があるのではないかと考え、第14回講座同様にクロス集計を行いカイ2乗検定を行った。結果は表2の通りで、有意差は確認されなかった($p=0.737$ であり、 $p < .05$ ではなかった)。この結果から、この講座内容を適切であったかどうかの判断基準は外国語の指導経験とは関係がないと分かった。第14回講座の結果と同様であった。

表2 カイ2乗検定

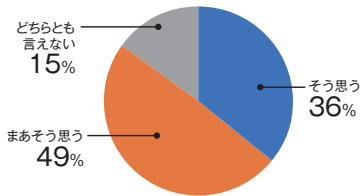
	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearson のカイ 2 乗	6.029 ^a	9	0.737
尤度比	6.202	9	0.720
有効なケースの数	124		

a. 8 セル (50.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は .12 です。



質問5 講座で提示された資料は今後活用できますか。

肯定的回答が85%を占めた。「どちらとも言えない」が15%で、否定的回答はなかった。

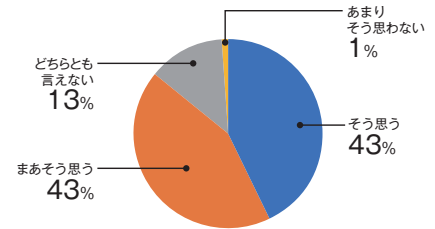


質問6 質問6「質問5で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし

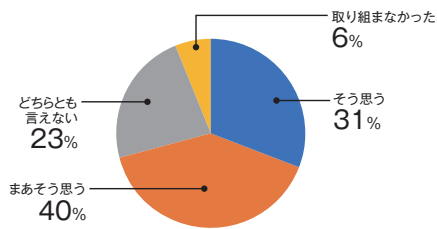
質問7 講師の説明は分かりやすかったですか。

「とてもそう思う」が43%で、「まあそう思う」が43%となり、肯定的回答は合わせて86%となった。「どちらとも言えない」が13%で、否定的回答が1%あった。



質問8 講座前タスクは役に立ちましたか。

肯定的回答が71%占めた。「どちらとも言えない」も23%と比較的多かった。また、「取り組まなかった」も6%占めた。

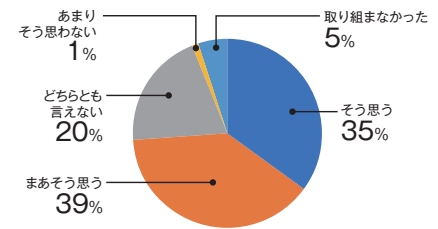


質問9 質問8で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・回答なし。

質問10 講座中のタスクは役に立ちましたか。

74%は肯定的に回答した。「どちらとも言えない」が20%で、否定的回答は1%であった。また、「取り組まなかった」が5%あった。

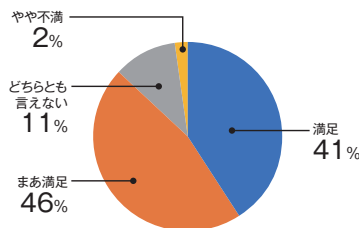


質問11 質問10で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・講義形式でタスクがなかったため。

質問12 総合的にこの講座に満足できましたか。

肯定的回答は87%であった。「どちらとも言えない」が11%で、否定的回答は2%あった。



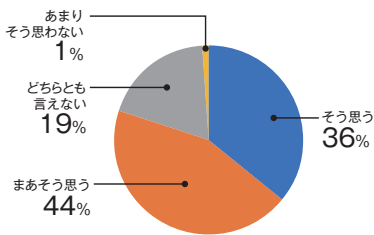
質問13 質問12で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

・第一回や、第十四回の内容の繰り返しが多く、新たな気付きはほとんど無かった。
・音声の中断が残念でした。

質問14

このような機会がまたあれば、受講したいですか。

80%の受講者が肯定的に回答した。「どちらとも言えない」は19%であった。否定的な回答は1%であった。



自由コメント

- 相手にわかるような発音であればいいとわかったので、ALTの先生と積極的に関わって授業を展開していきたい。
- 学校現場には若年層の教員も増えているので、より実践的で授業ですぐに使える内容の講座があると、学校全体でも共有していきやすいと思います。
- 学習指導要領の「目標」と「言語活動及び言語の働きに関する事項」を対応させて参照していくことの大切さを知りました。今後、指導案を書くときは、この両者を対応させて指導に反映させていきたいと思いました。English as global language, Inner, outer, expanding circles (Kachru)のグラフが役にたちました。国際語としての英語(our English)という認識が大事と分かりました。そのためにも調整能力の重要性を意識し、育成できるように今後の英語教育を考えていかなくてはならないと感じました。時代が変わり、Fish BowlからOpen Seasへの意識転換はますます必要となってきたと思っています。英語教育の道具として大きな可能性を秘めているICT, AIについても活用の方法をいろいろと模索していきたいと思っています。とても貴重な資料もいただき、自分自身でももっと深く学んでいきたいと思いました。
- 充実した研修をありがとうございました。
- 近年、小学校での英語教育が推進されていますが、現場では未だ、クラスルームイングリッシュに抵抗を持つ先生、ALTとのやり取りに苦

心している先生は多いと感じます。そんな時、ALTとHRTをつなぐようなTTの存在がいたらいいのかな…と思います。教師が英語のスキルをアップするために努力をするのは必要だと思う反面、日々の業務や新しいことが積み重なることによる多忙感を抱え、なかなかそういった自己研鑽に踏み込めない方も多くいると思います。より良い英語教育の形を作っていくためには、そういった人的なフォローも必要なのかなと感じました。今回の話題は、非常に考えさせられる内容でした。

- 言語を使う状況に入りこんで英語を話すことで、話す内容が変わる。常に目的、場面、状況が明確な授業を心がけていきたいです。
- 「正確さ」より「適切さ」通じることが大切だということを伝えることで、生徒もより安心して英語学習に取り組めると思います。
- 自分の資質を高めるために、まずは、ALTの先生とコミュニケーションをたくさんとっていきたいと思いました。
- 子供たちやALTと積極的に英語で関わろうと思いました。
- 大変勇気付けられました。
- 大変勉強になりました。
- 外国語の授業をするに当たって、不安に思っていたこと、疑問に思っていたことが解消されました。まずは私自身がOpen Seaへ向かって楽しめる授業を行いたいです。
- とてもためになる講座でした。

V

講座運営に対する評価



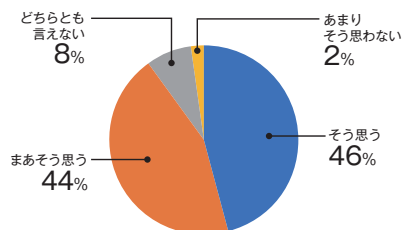
講座全体の運営に関して、受講者から意見や感想をもらうために全講座終了後に全講座総合評価アンケートを実施した。受講者には全15回講座終了後に案内し回答してもらった。このアンケートは、最初に属性に関する質問4つ、次に講座時間の長さや実施時期、実施時間帯、そして講座の実施形態、講座展開、「Zoomによる小学校英語・何でも相談交流室」、最後に講座内容の要望に関する22問の質問、計26問で構成された。アンケートに回答してくれた受講者数は合計302人であった。以下に、その詳細を記す。

全講座総合評価アンケート 結果分析

受講者の属性に関しては、オンタイムで行われた第4回から第15回講座に参加しアンケートに回答してくれた受講者の回答結果を「IV. 講座内容に対する評価」の中で既に報告している。この全講座総合評価アンケートに回答してくれた受講者も共通の回答者であるため、ここでは受講者の属性に関する質問の回答結果は割愛する。

質問1 講座受講の選択制は適切でしたか。

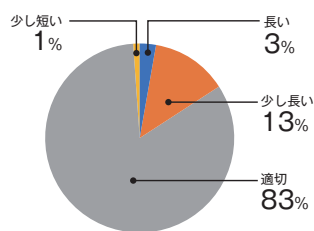
「そう思う」が46%で「まあそう思う」が44%で肯定的回答は合わせて90%であった。「どちらとも言えない」は8%あり、否定的回答は2%であった。この結果から、受講者の9割は講座の選択制について肯定的であることが分かった。



質問2 講座の長さ(60分・90分)は適切でしたか。

「適切」の回答が83%であった。「長い」と「少し長い」を合わせて16%であった。一方、「少し短い」が1%あった。回答者の8割以上は講座の長さは適切であったと回答していることから、概ね「講座の長さ」は適切であったと言える。しかし、「長め」と感じた受講者が一定数(16%)いたことは見逃せない点である。逆に「少し短い」と感じた受講者は1%だけであった。

このような結果の理由は、以下の質問3の回答から推察できる。質問3の回答によれば、夏季休業中であっても90分の講座の長さは負担を感じたようだ。また、内容は良いのだが、時間が負担になるというコメントが目立った。夏季休業中に集中して行われた講座ではあったが、他の業務もあるため集中することが難しいという実態も見えてきた。

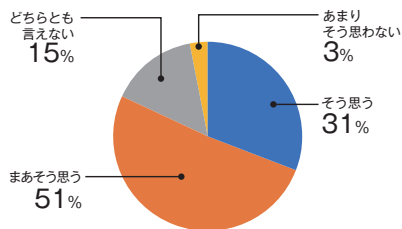


質問3 上記の質問2で「適切」以外を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。(※代表的なコメントのみ掲載)

- オンライン上では少し長いと感じた。
- 協議時間と発表時間が長く感じました。
- 聞いているだけでは長いことがあります。
- 夏休み中、2個連続で受講すると、90分×2の3時間で、集中も続かなくなります。1つの講座の時間を短くするか、講座が連続しないような日程にしてもらえるとうれしいです。
- 夏休みとはいえ、多忙なため、こういった講座は短ければ短いほど良い。そのためには、始めの挨拶などをもっと短くしていただきたい。
- もう少し内容をコンパクトにまとめても良いと感じました。
- 講座時間もそうだが、講座の回数が多いと感じた。
- 内容は濃く良かったのですが、この時期90分の研修は長いと感じました。
- 50分程度の内容がよいです。
- 内容も少し難しく長く感じてしまいました
- 少し長いのでもう少し短くなると参加しやすくなると思います
- 教授の話の内容が重複していたりしていた。
- 聴きっぱなしの講義は苦しいです。
- 評価の回に参加させていただきました。講師のお話をもっと聞かせていただきたいかったです。
- 通常業務との兼任が難しい。
- 集中力が持たなかったため、もう少し短くても良いと思った。

質問4 講座の実施時期は適切でしたか。

「そう思う」と「まあそう思う」を合わせて82%であった。多数の受講者が講座の実施時期を「適切」と感じていたことが分かった。しかし一方、「どちらとも言えない」が15%あり、「あまりそう思わない」が3%あった。この結果に関して、右の質問5の回答から分析すると、講座の実施時期が「適切でない」と回答した受講者にとって、夏季休業中であっても時間を見出すことは難しかったようだ。夏季休業中の講座実施に困難を感じたというコメントが目立った。また、本事業の運営側では設けなかったが、受講講座の指定をした教育委員会があったようだ。どうやら、指定の講座を受けることの困難さもあったようだ。

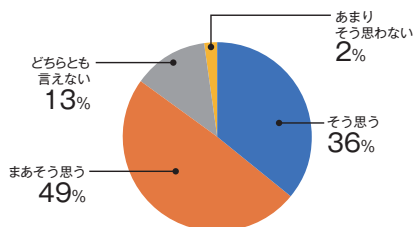


質問6 講座の実施時間帯は適切でしたか。

肯定的回答が合わせて85%あった。「どちらとも言えない」は13%あり、否定的回答は2%あった。この結果から、講座の実施時間帯は概ね適切であったと言える。

ただ、右の質問7の回答から実施時間帯にいくつかの問題点を挙げる受講者もいた。中には、学校の指定した休憩時間と講座の実施時間帯が被ってしまった時があったようだ。また、授業時間との重複により、授業を優先できないことがあったようだ。

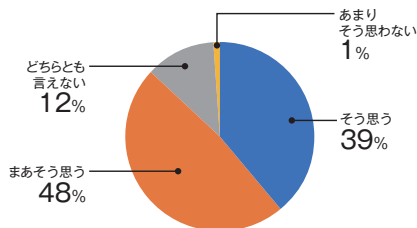
しかし、本事業の受講者の対象地区が全国規模であるため、それぞれの授業時間や勤務時間の開始と終了、休憩時間には違いがある。そのため、全ての地区の要望に100%応えるような講座の実施時間帯を設定することは非常に難しい。



質問8 拠点校で講座を受講された方にお聞きします。講座の受講は適切でしたか。

肯定的回答が合わせて87%あった。「どちらとも言えない」は12%あり、「あまりそう思わない」は1%あった。これらの結果から、拠点校での受講は概ね適切であったようだ。

右の質問9の回答には、講義であれば、一つに集まる必要はなく、参加者がそれぞれ自分で講座に参加する形でよかったとあるが、その通りである。ただ、講師に質問したり、他の受講者とディスカッションしたりするためにはどうしても拠点校に集まる必要があった。それを必要としない場合は、各自で受講することは可能であった。当該教育委員会との決まり等があったのであれば仕方がないが、実施事務局の意図が伝わっていなかったのかもしれない。



質問5 質問4で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- 学校現場は夏季休業中のため、人数がなかなか揃いつらかったため。
- 授業日の講座は、時間を見出すのが難しかった。
- 回数が多い。
- 学校行事と重なっていて、放課後に時間が欲しい時期だったが、今年度転入職員は必ず受講すべきものが市教委から指定されていたためずらず大変でした。
- 仕方ないことだが、評価の時期とかぶっていて、研修を受けるのが少し大変だった。
- 夏季休業期間にも講習が入っていたため、参加が難しいものもあった。
- 土日期間の方が合わせやすい(日直等と被るため)。
- 夏休み閉庁明けはやめてほしかった。
- 夏休みは調整が難しかったです。
- 夏休み期間のものは参加が難しかった。
- 夏季休業中で、暑い最中だった。

質問7 質問6で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- 夏季休業中は良かったと思います。学校のある平日は、学級を空けて受講することになるので、心苦しかったです。
- 参加者と活動をしたり、交流したりする時間がなく、聴きっぱなしの講義は苦しいです。

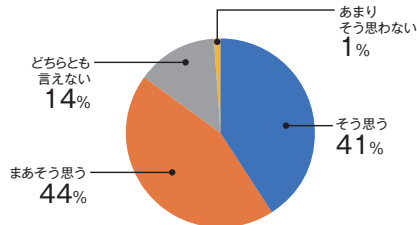
質問9 質問8で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- 講義の中でも、オンラインで視聴する形式のものであれば、市役所などに集まらず、各校から参加した方が働き方改革になるのではないかと思います。
- わざわざ1校に集まる必要性が薄い。

質問10 拠点校以外(ご自分のPCやスマホなどを使って)で講座を受講された方にお聞きします。講座の受講は適切でしたか。

肯定的回答は合わせて85%であった。「どちらとも言えない」は14%あり、否定的回答は1%あった。これらの結果から、拠点校以外での受講についても概ね適切であったようだ。

質問11に1件だけ回答があり、機器のトラブルがあり一部聞こえなかったようだ。拠点校外で視聴されたということなので、おそらく個人のスマホやタブレットか学校の機器などで視聴されたのだろうが、ここで言う機器が個人のものか配信側のものかがはっきりしない。



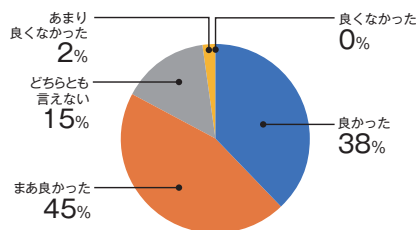
質問11 質問10で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- 機器のトラブルにより、一部が聞き取れなかったのが残念だった。(拠点校での参加ではなかったので仕方がないのかもしれませんが…。)

質問12 Zoomの映像はいかがでしたか。

肯定的回答は合わせて83%となった。「どちらとも言えない」は15%あり、「あまり良くなかった」は2%あった。これらの結果から、Zoomの映像は概ね適切であったようだ。

右の質問13の回答結果から、否定的回答の理由は、配信の途中で画面が止まったり、音声が聞こえなかったりしたことがあったからと、Zoom画面をMeetで映した教育委員会があったようで、それが見づらかったこと、そして拠点校での接続がうまくいかなかったことがあったことが原因のようだ。実施事務局としては、配信テストを行って十分に確認してから配信をしている。この件に関しては、各教育委員会と更なる連絡と確認が必要であろう。



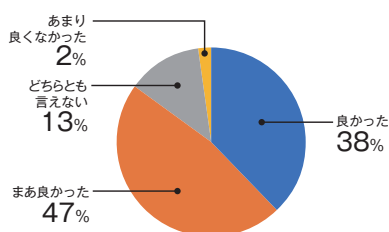
質問13 質問12で「あまり良くなかった」か「良くなかった」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- 各自治体の発表については問題なかったが、動画配信については明海大学HPにアップされたYouTubeを直接見たほうが見やすかった。
- 会場でのZoom画面をMeetで映してあるものでしたので、見づらいことがありました。全員がZoomに入るのは難しいと思うので仕方がないことだと思いますが…。
- 途中で音声が聞こえないまま進んだことがあったため。
- たまにかたまっていた。
- インターネット環境が悪くなって、途中からつながるなどのトラブルがあった。
- 準備ができず接続されていなかったため。
- ミートから見ると、資料が見づらかったです。
- 会場での接続がうまくいかず、自分の携帯で映像をみた。
- スライドの字が見にくかった。
- 授業場面が見えにくかった。

質問14 Zoomの音声はいかがでしたか。

肯定的回答は合わせて85%であった。「どちらとも言えない」は13%あり、否定的回答は2%あった。これらの結果からZoomの音声についても概ね適切であったと言える。

否定的回答の理由としては、質問15への回答から、たまに音声が聞こえないトラブルが発生していたようだ。これに関しては、配信側の問題だけでなく、各会場のインターネット回線の環境がそれぞれ異なっていたため、それに左右されて接続が不安定であった可能性がある。

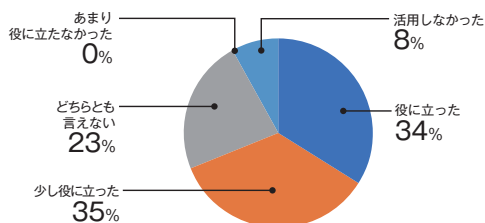


質問15 質問14で「あまり良くなかった」か「良くなかった」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- こちらの環境の問題かもしれないが、途中音声が途切れたりすることもあった。
- 音声が聞こえないことがありました。
- 途中で音声が聞こえないまま進んだことがあったため。
- たまに音声が入らない時があった。
- 聞こえないときが多かったです。
- 空調の風の音に音声が聞き消され、聞こえにくかった。
- 準備ができず、各自のスマホで聞いたため。

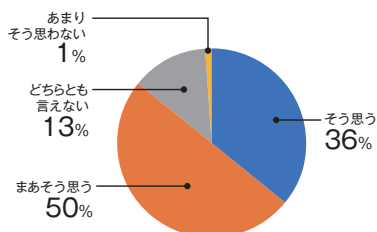
質問16 本事業で作成したWebページはいかがでしたか。

肯定的回答は合わせて69%であった。「どちらとも言えない」が23%とこれまでの回答の中ではかなり大きな値となった。否定的回答は0%だったが、「活用しなかった」という回答も8%あった。多くの受講者はWebページを活用し、それについてある程度満足したが、一定数の受講者はあまり活用しなかったようだ。ただ、「どちらとも言えない」という回答が多かった理由ははっきりしない。



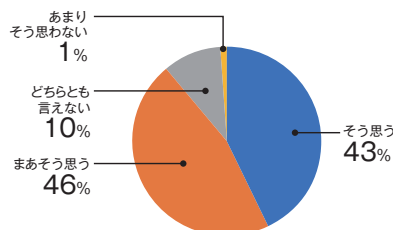
質問18 オンデマンド講座(第1回講座・第2回講座・第3回講座)は良い学びでしたか。

肯定的回答は86%となった。「どちらとも言えない」が13%あったが、否定的回答はわずかに1%であった。



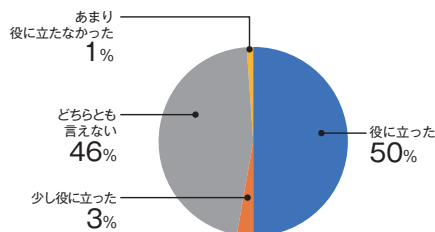
質問20 授業研究講座(第4回~第13回)の構成は適切でしたか。

肯定的回答が89%であった。「どちらとも言えない」が10%で、否定的回答はわずかに1%であった。この結果から、授業研究講座の構成は概ね適切であったと言える。右の質問21の回答から、授業動画は参加者に事前に視聴してもらっておくべきだという提案も散見された。また、グループ協議後のグループ発表は、抽出グループのみで良いという建設的な提案も挙がった。



質問17 拠点校で講座を受講された方にお聞きします。本学からお貸しした機器(テレビ会議システム、iPad、ICレコーダー)はいかがでしたか。

肯定的回答は合わせて67%であった。「どちらとも言えない」が33%とこれまでの回答の中では最大値となった。肯定的回答は2%であった。この回答結果も昨年とほぼ同様となったが、受講者全員が本学からの貸与機材を一律に使用したわけではなく、各教育委員会の担当者や授業録画に関わった一部の受講者のみが使用した。そのために多くの受講者は本学からの貸与機器をテレビ会議システム以外は使用しておらず判断できなかったと推察できる。



質問19 質問18で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- 英語を主とししない小学校教諭の悩み解消にはなっていない気がしたため。

質問21 質問20で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

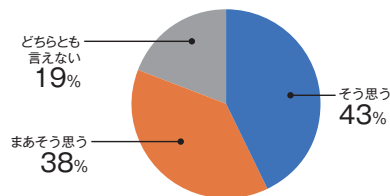
- 動画で授業を見てもわかりにくいから。
- 授業動画は、事前に視聴しておくことが可能なので、講座中での視聴時間は確保しなくてもいいと思う。
- グループ発表は抽出したところだけでもよい。内容が重なりがちであるし、その後の講師評価などの時間が短くなるのももったいないからです。

質問22 「Zoomによる小学校英語・何でも相談交流室」は役に立ちましたか。

肯定的回答が81%であった。「どちらとも言えない」が19%で、否定的回答はなかった。

この企画は昨年からはまった取組で今回で2年目である。15回の講座とは別に時間を設けて4回実施した。否定的回答はなかったが、「どちらとも言えない」が19%あったことから、不満とまでは言えないが、十分に満足できなかったケースがあったようだ。

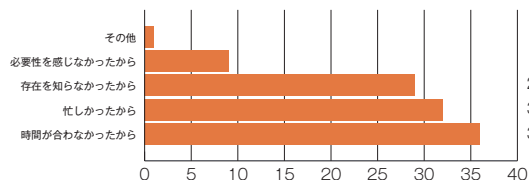
残念ながら相談者は毎回2、3名という少人数であった。結果として、少人数しか利用することがなかった。



質問24 「Zoomによる小学校英語・何でも相談交流室」に参加しなかった理由を以下から選択してください(複数回答可)。

「時間が合わなかったから」が最も多く36%を占めた。次に、「忙しかったから」が32%を占めた。「存在を知らなかったから」は29%であった。「必要性を感じなかった」は9%で、その他が1%であった。

この回答結果から分析すると、やはり小学校教員は多忙のため時間を見つけることはなかなか難しいことが分かった。また、この企画自体を知らないという参加者も3割近くいた。必要性自体を感じなかった参加者は9%なので、大きい割合ではなかった。「その他」の理由は2件あり、一人は講座数が全15回あったため、これ以上受講する講座を増やしたくなかったようだ。またもう一人は、非常勤講師としての雇用形態であったためであった。



質問23 質問22で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- ・回答なし。

質問25 質問24で「その他」を選んだ方にお尋ねします。その理由を簡潔にお答えください。

- ・受講数を減らしたかったから。
- ・非常勤の立場だったから。

質問26 次回講座を受けるとしたら、どんな内容を希望しますか。(※代表的なコメントのみ掲載)

- ・異文化理解教育の具体
- ・日々の授業ですぐに活かせる具体的な事例をもっと知りたいです。授業の展開の仕方、teacher's talkなど。
- ・パフォーマンステスト
- ・今年度と同様、授業研究講座を受講したいです。
- ・中学校の授業の実態を知りたいです。
- ・小中連携、接続
- ・ICT活用事例、タブレットの活用、ミライシードを使った実践授業などを希望します。
- ・低学年や中学年の外国語活動。外国語につなげるためのポイント。
- ・TTとの打ち合わせの方法や会話表現について
- ・すぐに授業で実践できるような指導技術のワークショップ
- ・外部との交流の実践を知りたい。
- ・今年度並みに理論編と実践編があり、選択できると良い。
- ・より多くの言語活動例
- ・目的場面状況の設定についての具体的な例や小学校の評価基準について
- ・スモールトークの題材の選び方を希望します。
- ・出前授業で中学校の先生が入ったTTの授業などがあれば良いです。
- ・ひとつのUNITすべての流れを見てみたい。
- ・実践の共有や一緒に授業を考えるようなワークショップも有効かと考えます。
- ・目的・場面・状況の設定の仕方、評価について(特に主体的に学習に取り組む態度の見取り方)
- ・効果的な中間評価の具体例
- ・書くことの授業などをもっと見ることができると嬉しいです。
- ・英語専科の授業をもっと見たいです。
- ・上手な方の授業参観
- ・テストの仕方
- ・英語の授業でよく使うフレーズ(greetingのときの決まったフレーズ等)
- ・Classroom English の活用について
- ・単元計画を児童生徒と共に作り上げる手法、学習課題を自分事として捉えさせるための手立て
- ・児童が調整しながら学習を進める授業の具体的なイメージ
- ・英語の歌の指導方法
- ・外国語が苦手な子でも楽しめる授業づくりについて
- ・読むこと・書くことの指導
- ・特別支援学級で取り組めることも学びたいです。
- ・配慮を要する児童への外国語指導方法

最後に、受講者からの自由コメントを掲載する。（＊代表的なコメントのみ掲載）

- 夏休み中という比較的業務が落ち着いた時期に開いてくださったおかげで余裕をもって受講できました。オンデマンド型も繰り返し気になったところを確認できてとてもよかったです。
- 拠点校だったので、移動の必要なく質の高い研修が受けられてとてもよかったです。
- 夏休みを中心に研修会を開催していただき、落ち着いて参加できました。また、様々な地域の授業を知ることができ、大変勉強になりました。
- 外国語の授業の流れを理解することができました。今後の指導に生かしていきます。
- タイムリーに受講できなかった場合、後日視聴することになると思いますが、その際の動画投稿を計画的にいただけるとスケジュールが立てやすいです。その際のアンケートやリフレクションシートの送信期日も延長してほしいです。
- 県外の実践を知れてよかったです。
- 大変勉強になる講座でした。今後の実践に生かしていきたいです。
- おおがかりなので運営等も大変だったかと思えます。
- 今年度も、大変勉強になりました。
- 回数が多すぎて、参加するのが大変だった。もっと回数を減らして、内容を重点的に行っていただけると参加しやすい。
- 他の教員の方々と交流が持てたことは、大変勉強になりました。
- 今年度も、素晴らしい講師陣による講座を実施していただき、心より感謝申し上げます。
- 今回も、たいへん有意義でした。学ぶことの楽しさを味わうことができました。
- 今回講座を受講させていただき、日頃の授業づくりに良い変化をもたらされるきっかけとなりました。小学校でも中学校でも言語活動において大切にしているところは共通だと感じられました。小学校での学びを活かした授業づくりができるようにこれからも自己研鑽を行いたいと思います。
- 大変勉強になりました。
- 全国レベルの研修を受講することができ、大変学びが多いです。
- 外国語科の指導方法について困っていたので、実際の授業を見ることができとても参考になりました。
- 開催回数が多すぎるので、小規模校は英語担当の負担が大きくなると感じる。また、小規模校でなくても回数が多いと出張の職員が増えるので校内事情も厳しい時があるのではないかと感じます。
- 小中連携の会、とても良い刺激となりました。
- 外国語(活動)には、苦手意識がありましたが、講座や協議を通して授業の具体的なイメージをもつことができよかったですと思っています。
- お忙しい中、準備運営をありがとうございました。研修で得た知識を現場へ還元できるよう努めます。
- 各学校のさまざまなアイデアを取り入れていきたいと思っています。
- たくさん学習させていただきました。
- 改めて外国語活動のあり方について考えさせられました。
- 大変お世話になりました。児童とともに学ぶ教師でありたいと思えます。本当にありがとうございました。
- 小学校の外国語は、「学ぶ意欲」を育てることが大切とよく分かりました。どうすればそれが育つのか、考える機会を与えていただきありがとうございました。
- 大変勉強になりました。また機会があれば是非お願いいたします。

VI

講座全体の総括



これまで、各講座評価アンケートと全講座総合評価アンケートの結果と分析を提示した。これらを踏まえ、本事業「MEIKAI-JOEプラス2023小学校外国語科等講座」の全体を総括する。

1 参加者の属性

(1) 所属地区

全受講者延べ人数で1,207人がアンケートに回答した。内訳は、釧路市の受講者が20%、浦安市14%、横手市13%、妙高市及び前橋市10%、足立区9%、いわき市及び土浦市7%、そして狛江市及び岐阜市5%という結果であった。

(2) 立場

「5・6年学級担任」が全体の23%で最大であった。次いで「3・4年学級担任」21%、「1・2年学級担任」20%、「他教科専科・アドバイザー・その他」14%、「英語専科」13%、中学校教員6%、「管理職」3%であった。小学校で「外国語活動」を担当する「3・4年学級担任」と、「外国語」を担当する「5・6年学級担任」が全体の4割程度で、「3・4年学級担任」の割合が昨年度から減少した一方で、「1・2年学級担任」、「英語専科」及び「中学校教員」の割合が増加した。これらの結果から、本事業に参加した一部の教育委員会が管轄する小学校で実施している1年生からの英語に関する授業への対応や、専科教員の導入と活用、小中連携強化の必要性等により、様々な立場の教員が本講座を受講していたことが分かる。

(3) 外国語(活動)指導経験年数

「0～3年」が最大の46%を占めた。次いで「10年以上」24%、「4～6年」16%、「7～9年」14%であった。これらの結果から、本講座で受講対象に想定している比較的指導経験の浅い受講者が多いことが分かる。また、昨年度と比較すると「4～6年」「10年以上」の割合が増えていることから、今年度はアーカイブ動画で講座内容を学んだ上で10地域の研究授業を研究・協議する講座構成としたことで、ベテラン教員にとっても有意義な学びの場となったことが推測される。

(4) 外国語(活動)TT経験年数

「0～3年」が49%、「10年以上」21%、「4～6年」17%、「7～9年」13%で、上記(3)とほぼ同じ結果であった。このことから、外国語(活動)の授業においては、ほとんどがチーム・ティーチングで行われていることが分かる。

2 第4回から第13回(授業研究形式)までの評価アンケートから

<第4回から第13回講座内容等一覧>

回	自治体	テーマ	講師
4	釧路市	聞くこと・話すことの指導	井熊 ひとみ(J-SHINE理事)
5	狛江市	小中接続	石鍋 浩、坂本 純一(明海大学)
6	横手市	聞くこと・話すことの指導	井熊 ひとみ(J-SHINE理事)
7	足立区	聞くこと・話すことの指導	井熊 ひとみ(J-SHINE理事)
8	いわき市	聞くこと・話すことの指導	井熊 ひとみ(J-SHINE理事)
9	妙高市	チーム・ティーチング	百瀬 美帆、米村 珠子、 パトリシア・ハヤシ、タイツ・ロート(明海大学)
10	前橋市	聞くこと・話すことの指導	井熊 ひとみ(J-SHINE理事)
11	浦安市	読むこと・書くことの指導	池田 周(愛知県立大学)
12	岐阜市	学習評価	金子 義隆(明海大学)
13	土浦市	チーム・ティーチング	百瀬 美帆、米村 珠子、 パトリシア・ハヤシ、タイツ・ロート(明海大学)

第4回から第13回までの講座は、本事業に参加した10地域の教育委員会がそれぞれの施策や研修実施方針に従い、

示された5つのテーマの中からテーマを選択し、授業研究を行った。以下の数値は、アンケートでの肯定的評価の割合を示す。

(1) 「授業動画の中の言語活動は今後の授業で活用できそうか」

第4回97%、第5回90%、第6回98%、第7回98%、第8回86%、第9回96%、第10回100%、第11回100%、第12回94%、第13回89%であった。全自治体の肯定的評価の割合の平均は94.9%で、高い評価であった。このことから、本授業研究講座が、他の地域や学校で行われている授業の中から言語活動のアイデアを得る有益な機会を提供していることが分かる。

(2) 「動画視聴後の協議で出た先生方からのコメントは参考になったか」

第4回99%、第5回97%、第6回99%、第7回100%、第8回97%、第9回99%、第10回100%、第11回100%、第12回98%、第13回94%であった。全自治体の肯定的評価の割合の平均は98.3%で、極めて高い評価であった。このことから、授業動画を視聴して講師の指導・助言を聞くだけでなく、様々な地域の学校の教員と研究授業で気付いたことや学んだこと、疑問に思うこと、改善の提案等をオンライン上で共有することからも、多くの学びを得ることができていることが分かる。

(3) 「講師の指導・助言は役に立ったか」

第4回99%、第5回95%、第6回99%、第7回99%、第8回99%、第9回99%、第10回100%、第11回100%、第12回97%、第13回97%であった。全自治体の肯定的評価の割合の平均は98.4%で、本項目についても高評価であった。授業動画を通して学んだことや、視聴後の研究協議で共有したことを踏まえ、講師がポイントを整理して指導を評価したり、授業者が求めている助言を与えたりすることで、授業者と受講者にとって一層の指導力向上と授業改善への動機付けにつながっていると考えられる。

(4) 「総合的にこの講座に満足できたか」

第4回96%、第5回94%、第6回98%、第7回99%、第8回96%、第9回99%、第10回100%、第11回98%、第12回98%、第13回94%であった。全自治体の肯定的評価の割合の平均は97.2%で、上記各項目とともに高い評価であった。

(5) 「このような機会があればまた受講したいか」

第4回87%、第5回86%、第6回86%、第7回90%、第8回82%、第9回90%、第10回90%、第11回91%、第12回92%、第13回91%であった。全自治体の肯定的評価の割合の平均は88.5%で、概ね高い評価であった。

3 第14回・第15回講座(講義形式)評価アンケートから

<第14回・第15回講座内容等一覧>

回	テーマ	講師
14	授業研究講座全体を通して見えてくる課題と成果	吉田 研作(上智大学)
15	小学校英語の指導に当たって求められる教師の力と 小学校英語担当者に期待すること	吉田 研作(上智大学)

第14回、第15回講座は、第13回講座までの総まとめとして、講師による講義形式の講座を実施した。以下の数値は、アンケートでの肯定的評価の割合を示す。

(1) 「講座の内容を理解できたか」

第14回90%、第15回87%で、概ね高い評価であった。第14回は、第13回までの授業研究講座を俯瞰し、評価できる点とともに今後の授業改善に向けた具体的なポイントが示されており、受講者にとってより分かりやすい内容であったと考えられる。一方、第15回では、英語によるコミュニケーション力を身に付ける必要性や英語教師が求められていることなどについて、根拠資料となる文献や学習指導要領からポイントを整理して解説されており、特に英語で書かれた資料が示されたこともあり、理解の程度がやや下がったと考えられる。

(2) 「講座の内容は学校現場のニーズに合っていたか」

第14回91%、第15回83%で、概ね高い評価であったが、上述した通り、受講者にとってより分かりやすく実践的な講座内容が求められていることが推測できる。

(3) 「講座内容は自分にとって適切であったか」

第14回61%、第15回55%でやや低い評価であったことから、クロス表とカイ2乗検定による分析を行ったが、受講者自身の指導経験年数との相関関係は見られなかった。より学術的な視点や英語文献資料等が示されたことから、やや評価が低くなったことが考えられる。

(4) 「講座で提示された資料は今後活用できるか」

第14回82%、第15回85%で、概ね高い評価であった。講座内で示されたいくつかのポイント(スモール・トーク、文法の扱い、日本語の必要性、小中連携で共有すること等)の中から、受講者が今後の授業改善に生かせるヒントが得られたと考えられる。

(5) 「講師の説明は分かりやすかったか」

第14回88%、第15回86%で、概ね高い評価であった。(4)と同様、講師の分かりやすい説明から授業改善のヒントが得られたことは、本講座の成果である。

(6) 「講座前のタスクは役に立ったか」

第14回78%、第15回71%の評価であった。タスク(事前課題)は、講座内でも示されたポイントに沿って授業研究を見直す、言語要素の扱い方について考える、というもので、取り組まなかった者もそれぞれ6%、8%いた。講座内容によって事前課題の必要性の有無についても検討が必要である。

(7) 「講座中のタスクは役に立ったか」

第14回76%、第15回74%の評価であった。講義中心であったことから、講師の問いかけに対して考えるなどのタスク(課題)が分かりにくかったことが考えられる。「講座中のタスク」が何を指すのかを明確にすることが課題である。

(8) 「総合的に講座に満足できたか」

第14回87%、第15回87%で、概ね高い評価であった。否定的意見の中には、オンデマンド講座や第14回講座と重複内容があり新たな気付きが得られなかった、講座数が多く負担が大きい、などの回答も見られたことから、講座の全体構成、受講者の負担を踏まえた実施回数、内容の精選等について再検討が必要である。

(9) 「このような機会があればまた受講したいか」

第14回75%、第15回80%で、概ね高い評価であった。

4 講座運営に対する評価

(1) 講座の選択制

講座の選択制が適切であったかについての肯定的回答は90%であった。本事業として全受講者が必ず受講する講座は、第1回のアーカイブ講座及び第14回、第15回講座の3講座とし、それ以外の講座は、各教育委員会の研修実施方針により指定した講座を必修とするなど、地域により受講形式が異なっていた。

(2) 講座時間

83%が「適切である」と回答し、「長い」「少し長い」と回答した割合は16%であった。昨年度、研究協議時間が十分に取れなかったことなどから、今年度は第4回から第13回までの授業研究講座を夏季休業中に90分、第14・15回講座を学期中に60分で実施した。授業研究講座は2回連続で5日間実施しており、夏季休業中においても負担を感じる受講者が一定数いたことが分かった。講座時間の設定は、実施時期と併せて検討する必要がある。

(3) 講座の実施時期

講座の実施時期が適切であったかについての肯定的回答は82%で、「どちらとも言えない」「あまりそう思わない」は18%であった。夏季休業中に授業研究講座を設定することについては、地域ごとに夏季休業期間が異なる、学校閉庁日が設定されている、自治体独自の夏季プログラムがあるなどの理由により、参加率が低い回や自治体がある、日程により不参加の自治体があるなど、課題が明らかになった。一方で、講座時間の確保や参加しやすい態勢という点で、授業研究講座を夏季休業中に設定することは概ね適切であったと考えられる。

(4) 講座の実施時間帯

講座の実施時間帯が適切であったかについての肯定的回答は85%であった。夏季休業中の授業研究講座は午前9時から午後0時10分まで、第14・15回講座は学期中の午後3時20分から4時20分までで実施した。各自治体により休憩時間や終業時間が異なり、全ての教育委員会や拠点校の実態や要望に応えることは困難である状況においては、最大公約数を採用することが最善である。

(5) 拠点校での講座受講

87%が適切だったと回答した。全講座を通して、拠点校に参集した受講者が情報交換や意見交換、研究協議を行うことが大きな学びにつながることに、運営側・講師・教育委員会・受講者が共通認識をもって参加することが重要である。

(6) 拠点校以外での講座受講

85%が適切だったと回答した。拠点校外で受講する場合は、受信環境の確保と機器接続トラブルの回避が重要課題である。

(7) Zoomの映像・音声

映像、音声に関して、それぞれ83%、85%が肯定的回答であった。否定的回答では、接続不良や音声遮断等のトラブル、見にくい動画やスライドの文字、不安定なインターネット接続等が挙げられた。こうした課題については、事前の接続テストを始めとする入念な準備を継続していくことが重要である。

(8) 本事業のウェブページ

肯定的回答は69%で、「活用しなかった」が8%だった。ウェブページをより活用してもらうためには、事前課題・事後課題の提示、オンデマンド講座での予習・復習、次回講座内容概要、欠席時のフォローアップ等、ウェブページの活用方法やそのメリットについて具体的に受講者に示すことが考えられる。

(9) オンデマンド講座

第1回から第3回までのオンデマンドが良い学びとなったかについての肯定的回答は86%で概ね高い評価であった。

(10) 授業研究講座の構成

第4回から第13回までの授業研究講座の構成が適切であったかについての肯定的回答は、89%であった。否定的回答者からは「授業動画は、事前に視聴しておくことが可能なので、講座の中で視聴時間を確保しなくてよい」「グループ発表は内容が重複しがちなので抽出グループのみでよい」といった意見が出た。このことから、ウェブページの活用(事前課題で授業動画を見ておくべきか)や研究協議の構成等については改善の余地があると言える。

(11) 「Zoomによる小学校英語・何でも相談交流室」

「何でも相談交流室」が役に立ったかについての肯定的回答は81%であった。事業2年目の今年度は回数を増やし5回実施計画したが、参加者が0～3人で利用率が非常に低かった。参加しなかった理由として「時間が合わなかった」「忙しかった」「存在を知らなかった」がそれぞれ3割前後、「必要性を感じなかった」が9%いたことから、本企画を受講者にとってより有益なものとするためには、受講者のニーズや勤務状況等を踏まえた計画立案や周知の検討が必要である。

VII

教育委員会 受講者等の総括



1. 東京都足立区教育委員会総括

足立区教育指導部学力定着推進課では、年間2回の小学校外国語活動・外国語科研修を柱とし、区の教育課題の解決に向けた実践的な研修を行ってきた。また、今年度より小中連携をより強固なものとするべく、年度当初に小中合同外国語科研修会を開催し、小中の円滑な接続の実現による英語力向上に向けた授業改善を図ってきた。

さらに、令和6年度に向けて小・中学校各段階での英語教育の学習到達目標とその達成に向けた取組みをトータルで組み立てる「グランドデザイン」を策定し、授業を通じた英語力の底上げと民間事業者や外部人材などを活用した支援の充実を図ることにより、英語4技能のバランスの取れた育成をより一層推進することとした。

このような状況の中で取り組んだ本講座について、足立区の実践を踏まえて総括する。

【成果】

(1) 幅広い受講者の確保と成果の周知

本講座には拠点校として1校、拠点校外でのZoomによる参加校として13校から、延べ524名が参加した。今年度も受講者が希望する講座を受講する「選択制」とし、幅広く受講者を募った。中学校英語科教員の受講者や拠点校外から拠点校へ出張して参加した受講者もあり、昨年度に引き続き、本講座に対する需要の高さが伺えた。

拠点校では研究協議の視点に基づき、各自の考えをグループで交流し、全体共有をするという形式で研究協議を行った。受講者は受講者同士での活発な意見交換や、授業研究を担当した自治体への質疑応答を通して自身の疑問を解決したり、各自治体の受講者の様々な提案や意見を聞いて自身の考えを整理したり深めたりすることができた。また、事前に受講者用ホームページに示される授業動画や協議の視点を受講者に周知したことで、課題意識をもって当日の研修会に臨むことができた。

さらに、今年度の講義・演習の内容や授業研究アーカイブ動画を、各校の授業研究会や小中連携研修会等で紹介することで、各自治体の優れた取組み事例や成果を幅広く周知した。

(2) 4技能5領域を網羅した充実した研究授業

授業研究は10の自治体が、それぞれの英語教育の特色を生かした研究授業及び提案を行い、研究協議では講師から各テーマに沿った指導・講評をいただけたことで、一層理解を深めることができた。

本区の実践は「聞くこと・話すこと」で研究授業を行った。コミュニケーションを図る目的、場面、状況が明確な最終活動の工夫、やり取りとやり取りの間の指導の工夫により、「本当に伝えたいことを英語で伝える」言語活動を行う授業を目指した。

講師の井熊ひとみ氏からは、本時の活動の目的(誕生日に欲しいものについて、詳しく伝え合う)が明確になっていたこと、「詳しく」伝えるために必要な情報について児童と共有した上でやり取りが進められていたことについて評価をしていただいた。一方で、単元の目標を達成するためには、児童の表現したい気持ちと身に付けさせたい表現の整合性を図る必要があると具体的なご指導をいただいた。

【課題】

課題は、夏季休業期間中の講座への参加者の確保である。本区では、夏季休業中に全ての小学校が全校体制で学習の補充や水泳指導を行っており、拠点校への出張はもちろん、オンラインでの参加も厳しい状況があったため、日程によって参加者数に偏りがあった。

また、今回の講座も「選択制」としたことから、外国語活動・外国語科の指導に関心のある受講者を幅広く募ることができたが、一方で全ての講座を受講した受講者は2割程度であった。区教委主催の研究会や研修会等で本研修について

周知したり受講を促したりして、教員の専門性を高める機会を活用していく。

2. 東京都足立区受講者感想

オンラインのメリットを生かした充実した研修であった。日本全国のような自治体の先生方が練り上げた授業を見たり、講師の指導・講評を聞いたりする中で、自分自身の今後の授業に生かしてみたいと思う取組や考え方に、たくさん出会うことができた。

その一つが、学習者の発話の誤りを、会話の流れを途切れさせずに教師が言い直す「リキャスト」という手立てである。児童が使い慣れない外国語の授業だからこそ、必要に応じて自然に、そして積極的にリキャストすることで、誤りを正しい表現に近づけていくことは大切だと感じた。

今回の足立区の提案授業は、私が担任している学級で専科教員が研究授業を行った。動画で見ていただいた本時だけでなく、単元を通して担任として共に授業づくりに携わってきた。児童が積極的にコミュニケーションを行うことができるような手立てを講じたり、発問を考えたりして、教員が試行錯誤する過程こそが研究の醍醐味だと改めて実感した。貴重な機会をいただいたことに感謝する。

足立区立新田学園 5年担任 山本 仁美

受講前は「教科書の内容は全て扱わないといけない」「計画どおり進めなければならない」と、自身の計画を最優先して指導してしまうことがあった。全講義が終わり、改めて自分の指導について振り返ることで、児童の「知りたい」「やってみよう」という思いを大切にしたい授業展開を考える意識が高まった。

また、本講座を通して、児童の優れた表現については、クラス全体で共有していくことで、児童の意欲を高め、コミュニケーションの幅を広げていくことにつながることを学んだ。

全15回の講座を受講し、指導法はもちろん、児童理解の大切さについても学ぶことができた。実践できることはすぐに実行していく。今後も最新の英語教育に係る情報を収集し、児童のためによりよい指導ができる教師になれるよう努めていく。

足立区立伊興小学校 4年担任 若林 修平



3. 千葉県浦安市教育委員会総括

本市は、浦安市教育振興基本計画(浦安市教育ビジョン)が掲げる基本理念「学び 育み 認め合い『未来を創造する』人づくり」のもと、設定された4つの目指す子供像の実現に向け、小中学校の教育を推進している。目指す子供像のひとつ「豊かなかかわり(参画・交流・郷土愛・多文化共生)」では、適切に表現する力を身に付け、人や社会に積極的に関わるとともに、我が国やふるさと浦安に誇りを持ち、多様な文化を大切にできる態度・能力を高める教育の充実を進め、国際理解教育や英語教育を推進している。

小学校1・2年生においては、特別の教育課程を編成し、外国語活動を実施している。市独自のカリキュラム(小学校1・2年生で年間14時間)を活用しながら、児童の発達段階に応じた外国語による様々な活動を充実させ、外国語に慣れ親しむだけでなく、3年生からの外国語活動への滑らかな接続を目指している。また、市立全小中学校に、外国語指導助手(ALT)を派遣し、ティーム・ティーチングによる授業を基本としている。

現在は、ICT機器の積極的な活用を推進しながら、児童生徒の多文化理解及び英語によるコミュニケーション能力の育成を図っている。



【成果】

MEIKAI-JOEへの参加が本年度で4年目となり、本事業が本市小学校教員に広く認知されたように感じる。受講者の割振りは各小学校に任せているが、英語専科教員が在籍する学校であっても全講座を英語専科教員1人で受講するのではなく、他の教員にも講座を振り分けることで、学校全体として外国語教育への理解と指導力向上を目指そうとする学校も見られた。

講座への参加方法としては、参集型とオンライン視聴型の2通りが可能となっていたが、本市では、拠点校に集まる参集型に統一した。浦安市は比較的小さい市であるため、移動時間が短いということが理由の1つであるが、一番の理由は、協議の時間を充実させるためである。結果は期待したとおり、毎回活発な意見交換が行われ、受講者が主体的に参加できる研修となった。

全15回の講座はどれも充実した内容であったが、特に第4回から第13回の授業研究講座では、普段見ることができない県外の小学校での実践を見ることができ、受講者にとって大変貴重な機会であったと感じる。本市は、第11回講座「読むこと・書くことの指導」の授業を担当させていただいたが、授業者はこの講座をきっかけにして、これまでに以上に授業準備やALTとの打合せに前向きに取り組み、短期間で著しい成長が見られた。協議後には、各地域の先生方や講師の先生から数多くの労いの言葉や今後につながるアイデアをいただき、とても貴重な経験をさせていただくとともに、大変勉強になった。

【課題】

本市は、外国語教育における小中連携の推進に力を入れていることから、本年度、中学校教員にも講座への参加希望を募った。中学校教員に限っては、参集型だけではなくオンライン視聴型での参加も可としたが、残念ながら参加希望はなかった。校種を超えて外国語教育の理解を深めることの重要性は誰もが理解するものの、自主的に行動に移すまでの意欲や時間的余裕が不十分であることが考えられる。小学校での取組を中学校での指導へつなげるために、中学校教員の意識をどのように変えていくかが今後の課題である。

4. 千葉県浦安市受講者感想

初めて参加したMEIKAI-JOEだが、アーカイブ動画も利用しながら全15回にわたる充実した内容だった。特に印象的だったのは、吉田研作先生が講話の中で話されていた、「日本の社会(日本の英語教育)」は「Fish Bowl (金魚鉢)」から「Open Seas (大海)」へ変化しているという部分である。

吉田先生曰く、「ネイティブのように話さなくてもよい」「間違っていてもしゃべる」ことが大切であるという。「話したい！なんか楽しい！」という児童の気持ちを維持させることは、とても困難なことである。それでもより良い指導を模索し、頑張ろうと思えるのは、大きな声で英語の歌を歌う楽しそうな児童の姿や、同じ方向を向いてこれからの外国語学習について学ぶ同士(教員)がいるからだ。

私たち教員が「Open Seas」に向かって漕ぎ出していくために必要な多くの勇気を、このMEIKAI-JOEからいただいたと感じている。

浦安市立南小学校 高萩 佐知子

実際の授業を視聴した後、先生方と協議できるため、新しい気付きや考えをもつことができた。特に、ALTと一緒に楽しい雰囲気をつくることや、前向きな発言や明るい表情、身振り手振りなどの表現を増やすことが児童に安心感をもたらし、主体的な行動につながるのではないかと思った。

これまで、私は外国語の授業に対して自信がなかったが、今回の研修で講師の先生の話や市内の先生方の実践事例等を聞いたことで、どんどん英語を使って、楽しい授業を進めてきたいという前向きな気持ちになった。

他者を思いやる気持ちや自分を表現する力を外国語の授業をとおして身につけさせるためにも、今後もこのような研修に積極的に参加し、授業研究に励んでいきたい。

浦安市立東小学校 溝田 文哉

5. 秋田県横手市教育委員会総括

本市では、横手市立横手北小学校を拠点校とし本研修を実施した。参加者は、拠点校の教員6名、市内小学校教員13名、専科教員2名、中学校教員1名の計22名であり、そのうち、外国語活動・外国語(小学校)の指導経験が3年未満の教員の割合は50%、5年未満の割合は64%、10年以上の割合は10%であった。本事業4年目となる今年度の特徴として、これまでには外国語活動・外国語の研修会への参加機会が多くなかった教員からの参加もあり、本研修の機会がより広く与えられるようになっていたことが挙げられる。過去3年間と同様に、すべての市立小学校から参加者を募ることで、研修成果の市全体での享受とそのことによる各校での外国語教育の充実・発展を目指した。



1. 実施方法

本市では、本研修で提供された全15講座を、参加者全員が受講する必修講座(9講座)と参加者が自らの関心や課題に応じて受講する選択講座(6講座)に分けて実施した。必修講座は、第1講座から第3講座のオンデマンド研修と授業研究4講座、総括にあたる第14講座・15講座とした。オンデマンド講座については、本市で推進する授業改善の方向性を考慮し受講講座を市教委が選択する形とした。全講座終了後に実施したアンケート調査では、必修講座(9講座)と選択講座(6講座)の割合について、「ちょうどよかった」と回答した割合は100%であった。日々の業務と本研修の両立が図られるように必修・選択の講座を設定したが、本回答からはその設定が妥当であったことがわかった。

また、拠点校での集合研修を5講座(すべて必修講座)、自校での研修を10講座(必修講座4、選択講座6)と設定した。先述したアンケート調査では、集合研修と自校研修の割合について「ちょうどよかった」と回答した割合は86%であり、「集合型の割合がもっと多い方がよかった」と回答した割合が14%であった。このことから、設定がおおよそ適切であったこと、忙しい業務の中でも集合研修に高い価値を置いた参加者がいたことがわかった。自由記述からは、集合研修で研修の目的や授業改善の方向性を共通理解し、参加者の悩みや問いに答えながら確かな理解へと至ったことが、自校での研修を含めた本研修の充実につながったことがわかった。また、全15講座と講座数の多い研修であったが、このように実施方法を工夫することにより、本研修を効果的に活用することができたといえる。

2. 実施時期

今年度は、(1)アーカイブ動画を活用したオンデマンド研修(5月～7月)、(2)各自治体が提供する授業研究(夏季休業中:7月～8月)、(3)研修総括(9月～10月)の構成に基づいて実施された。第1回検討委員会(5月)の実施から各自治体における授業録画(5月末から7月初め)までの期間が大変限られていたことは、今後の課題として挙げられる。拠点校、授業者、参加者にとってより充実した授業研究にするために、必要な準備期間が確保できるような計画が必要である。

3. 研修成果

第6回講座で実施した本市の授業研究では、「話すこと(やり取り)」の領域で、第4学年の授業を提案した。今年度、授業者は児童の気付きや問いを大切にしたい授業づくり、児童のモデルとなる英語使用、児童が語彙や表現に慣れ親しむための日常的な工夫を行い、コミュニケーションの素地となる資質・能力の育成に取り組んできた。単元のまとめとなる本時の言語活動では、これまでに慣れ親しんだ語句や表現を用いながら、明瞭な発話で、友達とのコミュニケーションを丁寧に図る児童の姿があった。また本実践では、英語での言い方がわからない時には、「How do you say () in English?」とALTに尋ね、児童自らがことばを獲得していくことを目指した。児童はこの表現にもよく親しんでおり、必要な時に主体的に用いてたずねることができていた。このことは、昨年度の本研修において本市の授業改善の新たな視点になったことへの取組であった。「Fish BowlからOpen Seasへ」の学びを意図しながら、必要な語彙や表現を言語活動の中で獲得していくためにはどのような手立てができるのか。今年度はこのことを踏まえ、「How do you

say/write () in English?」などを用いて、自らことばを獲得できる児童生徒の育成を目指してきた。本実践でも自ら働きかけことばを獲得する児童の姿を提案し、参加者や助言者の先生方から評価を得たことは、大きな成果の一つとなった。このように今年度の研修も、成果と改善点を多角的な視点でご意見をいただくことができ、横手市全体の授業改善につながるものとなった。また他自治体の優れた実践や吉田研作先生の総括からは、新たな発見を含め大きな学びを得ることができた。

6. 秋田県横手市受講者感想

今年度本校は、横手市の拠点校として、校長、研究主任、若手教員は全講座受講させていただき、他の教員も複数回ずつ受講させていただいた。前半の講座では「チーム・ティーチング」「話すこと、聞くことの指導」について、指導方法を具体的に示していただき、授業に生かすことができた。また、第6回講座の授業研究では、本校2年目の教員の授業について、市内の先生方のみならず、全国各地域の先生方から貴重なご意見をいただき、校内で共有することができた。さらに、他自治体の授業についても協議を積み重ねていくことにより、単元構成の仕方、単元における1時間ごとのねらいや評価規準の設定の仕方などが明確になり、授業を構想していく際の視点の一つとなった。また、昨年度より受講する自治体が増えたことで、多様な意見に触れることができ、新たな気付きが増えたと同時に、他自治体の先生方の意見発表等は、若い先生方も多く、本校の若手教員にとっても大きな刺激となった。このような貴重な研修の機会をいただいたことに心から感謝したい。

横手市立横手北小学校 佐藤 美穂子

横手市の外国語教育の課題は、「小学校から中学校への円滑な移行」と「中学生の外国語学習意欲の向上」である。しかし小学校外国語について研修不足であることから、本研修に参加させていただいた。授業動画の児童は、瞳を輝かせて意欲的に思いを伝え合い、体全体でコミュニケーションをとっている。そして先生方も、英語が得意不得意に関わらず、シンプルで児童のモデルになる表現を用いたClassroom Englishで雰囲気作りに努めておられた。何よりも、英語で話したくなる課題設定や導入の工夫、適切なヒント、児童の学びの価値付けなど、様々な場面できめ細かな手立が見られた。このような授業を受けてくる子供たちをどのように中学校へ迎え入れるか、小学校での丁寧な学びを生かした中学校(特に1年生)の授業はどうあるべきかを考えさせられた。まだ明確な答えは出ないものの、勤務している中学校の1年生担当教諭と相談しながら、音声重視の授業に段階的な書く活動を組み込むことや、「話したい」「聞きたい」と思う課題、「分かった」実感をもたせるステップを設定することを意識した。本研修を通して改めて小中連携の重要性を認識した。本研修での学びを、自分自身の授業のみならず、他の先生方とも共有していきたい。

横手市立平鹿中学校 後藤 亜希子

7. 福島県いわき市教育委員会

講座全体の総括

いわき市教育委員会として、小学校教員の外国語の指導力向上を目的とした教職員研修を実施しているところではあるが、外国語の授業を担当している小学校教員が全員悉皆で受講することについては、なかなか難しい状況である。そのような中、今年度も、拠点校方式及びサテライト方式により、本事業に参加させていただく機会を得ることができた。また、大学教授等による専門的な指導に加え、授業研究を通じた他地域での取組みについての情報交換を通して、外国語の指導力向上を目指し研鑽に励むことができた。

【成果】

本事業の研修内容や実施方法において、成果と考えられる点は次のとおりである。

○月によっては、サテライト研修と集合研修を選ぶことができたので、研修者は自身の校務の都合に合わせて参加できた。

- 大学教授等の講義では、理論や実践に基づいた示唆に富んだお話を聞くことができ、授業づくりの視点や留意点を学ぶことができた。
- 研究授業を通した研修では、他地域の先生方が取り組んでいる様々な授業実践を動画視聴でき、とても参考になった。事後協議では授業改善に向けた率直な助言を聞くことができ、有意義な協議を進めることができた。
- 本市については、昨年に引き続き拠点校以外をサテライト校と位置づけ、拠点校に集合できない場合は各校での研修として実施した。サテライト校では視聴のみになってしまう一方で、複数の教員が研修に参加できることが大きな利点となった。
- 拠点校を学校ではなく、いわき市総合教育センターとしたことで講座に参加する学校にオンライン研修の準備等の負担をかけることなく実施することができた。
- 拠点校に集合しての研修として市内101校に参加案内をし、市内校から10校の参加(拠点校8校、サテライト校2校)であった。本講座で研修を積んだ教員が研究授業で外国語の授業に挑戦するなど、積極的な取組みがあった。

【課題】

本事業が大変有意義な研修であることから、さらに効果を上げるための視点から考えられる改善点は次のとおりである。

- 研究授業をとおした研修については、協議の時間が短く、深まりの点で課題が残ると感じた。授業動画視聴を事前課題とし、それをもとに協議する形ではどうか。
- 視聴する授業は45分間を通して視聴した上での協議の方が、研修の効果があると感じた。

8. 福島県いわき市受講者感想

○たくさんの授業を見ることができたことは、とても参考になった。英語授業に慣れていないこともあり、ALTの先生との授業プランや、子供たちの主体的な学びにつなげることができる単元構成、英語ならではの楽しい授業のヒントなど、知りたいことをたくさん学ぶことができた。今回の講座は、毎回勉強になった。

平第一小学校 菅野 保子

○様々な授業を参観し、講師の先生方のお話を聞き、日々悩んだり考えたりしていることが解決へと向かう一助となった。目的・場面・状況を考えることや評価の仕方など、自分だけで行うことへの不安があったが、いろいろな授業研究から得るものがたくさんあった。英語専科として外国語指導に携わっているため、この講座に参加できたことがとても心強かった。

小名浜第一小学校 平樂 裕美

○私は小学校における英語授業の一般的な授業スタイルについて学びたいと考え受講したが、たいへん多くのことを学ぶことができた。オールイングリッシュで授業をすることは小中学校共通である。そのため、小学校の英語授業でも、中学校で勤務経験のある先生は、小中ギャップを少なくするため、毎時の帯時間で英単語を見て発音できるようにしたり、書き取りができるように指導したりしていることがわかった。特にこの取り組みは、中学校での書くことの指導に役立つので素晴らしいと感じた。また、言語活動をするにあたって、なぜその活動をするのかについての必然性をもたせることや自然な流れで行うことの大切さも再認識できた。

桶売中学校 渡邊 幸恵

○これまで、私は小中英語パートナーシップ事業や、個人的な小中高の先生方との学習会を通して、小学校英語に関して積極的に学んできた。しかし、今年度15回に渡るこの講座で、参加されている全国の小学校の授業や先生方の姿、講師の先生方の指導助言等から小学校英語の現状と課題が改めてわかった。この講座を通し、思うような小中接続の指導ができず、大きな葛藤を抱えていたことに対しても明確な回答を得た気がする。そのため、この講座で改めて小



学校英語の現状を知ったことで、自分が思い描いていた生徒の学びと現実の違いがわかり、日々の授業の実践が変わったと思う。

内郷第一中学校 宮崎 美穂

9. 新潟県妙高市教育委員会総括

妙高市では、学習指導要領の主旨を踏まえ、「実生活に役立つ英語」をキーワードに、「連続性のある英語教育」に精力的に取り組んでいる。具体的には、推進組織である「外国語教育推進委員会」に市内全ての園・小・中の外国語教育の推進責任者及びALTを構成メンバーに据え、園の年中児から中学校の3年生まで11年間を発達段階に応じて5段階(園の年中・年長、小の低学年、中学年、高学年、そして、中学校)に分けて、指導している。



当市の外国語教育の主な特色は以下のとおりである。

- ・ 当市の規模としては異例の8名のALTを、小・中学校だけでなく、園にも配置し、全ての園児・児童・生徒に計画的、系統的に指導している。
- ・ 園と小学校の低学年については、独自のカリキュラムに基づいて、園(年20～50時間)と小学校の低学年(年20～28時間)で、園はALTが、小学校はALTと学級担任がTTで指導している。
- ・ モデル校(小学校1校)を指定(原則として3年間)し、年に3回(低・中・高)の公開授業並びに研究協議会を実施している。モデル校は当該校の研究推進委員会を中心に全校体制で外国語の授業改善に取り組んでおり、市教委の指導主事はその取組を全面的に支援している。
- ・ 園から小学校へ、そして、小学校から中学校へのスムーズな接続を強く意識しながら取り組んでいる。実際、全ての小学校で外国語の授業公開を実施し、全校体制で公開授業と研究協議に参加しており、児童生徒の姿として着実に取組の成果が現れている。

当市は、令和3年度よりMEIKAI-JOEに継続して参加し、本年度で3年目となった。当市は、数年来外国語教育に力を入れて取組を進めてきた経緯があり、オンラインで気軽に参加でき、しかも、全国的に名の知れた講師陣の指導が無料で受けられる当講座は、そんな当市の小学校に在籍する教員、特に外国語の指導力を高めたい教員にとっては願ってもない研修の機会となっている。

その一方で、3年目ということで、1年目をピークに年々受講者数が減少してきている実情もある。概して現場の教員は多忙であり、たとえ近隣(拠点校)とは言え、勤務場所を離れて研修に参加することは、相応の時間と労力を要するため、受講経験のある教員にとっては、継続受講はなかなかハードルが高い。

今年度のMEIKAI-JOEでは、当市では全15回の講座に延べ人数で229名(昨年度は307名)の小学校教員が参加した。MEIKAI-JOEについての当市に係る成果と課題は以下のとおりである。

【成果】

- ・ MEIKAI-JOEがスタートして4年目(当市は3年目)となる今年度は、既に多くの受講経験者が存在する中で、そうした現状に対応すべく、これまで蓄積してきた講座動画をオンデマンドで視聴する形式を取り入れるなど、受講経験のある教員でも個々のニーズに応じた講座選択ができて、効果的であった。
- ・ 全15回のうちの10回分を授業研究講座に充て、また、現場の教員が参加しやすいように10回すべてを7月末～8月の午前中に集中実施したことは的を射た判断だった。また、当該講座は授業力向上という目的が明確で、実際の授業動画の視聴やその後の研究協議を通じて、新たな知見や気づきを多数得ることができたという肯定的な評価がほとんどであった。
- ・ 日本の英語教育の権威である上智大学の吉田研作先生(日本英語検定協会会長)の示唆に富む講義を2回に渡って受講できたことは、これからの英語教育を担う現場の教員にとっては、自身のこれまでの実践の意味付けや今後の進む

べき方向性を再確認できる有益な機会だった。

【課題】

- ・ 夏季休業中の授業研究講座の期日は事前に決まっていたものの、どの日にどの市区の授業研究を実施するかに係る情報入手が遅れ、本市として、各講座の参加希望調査の段階でそのことに係る情報提供ができなかった。結果として、受講者は授業内容を踏まえた講座選択ができなかった。
- ・ 本研修が次年度も継続実施という前提で、本市として受講者減少への対策を講じていく。

10. 新潟県妙高市受講者感想

私は昨年度、初めて妙高市に赴任して3年生を担当し、MEIKAI-JOE小学校外国語科等講座を受講した。以前から外国語の指導に対する苦手意識があったが、この機会に苦手意識を払拭したいと思った。今年度も全ての講座ではないが、できる限り受講して昨年度以上に多くの学びを得られた。苦手意識が軽減し、この講座を通して好きになったことがある。それは、英語でコミュニケーションすることである。ALTと英語で挨拶し近況を話したり、授業の打ち合わせでsmall talkの練習をしたりすることが楽しい。少しくらい間違った英語でも、互いのことを理解しようとすること自体がおもしろいと感じるようになった。自分の授業で「英語が苦手、英語が嫌い」な子供をつくりたくない。吉田研作先生が講座の中でおっしゃったように、児童に間違いを直させるのではなく、recastやpromptingで児童自らが「気付く」ようにして、これからも子供と共に外国語のコミュニケーションを楽しんでいきたいと思う。

妙高市立妙高小学校 倉井 華子

外国語科が教科化されてから数年が経つが、外国語教育について学ぶことができる場はそれほど多くない。勤務校にいながらオンラインの形式で、全国各地の教育実践から学ぶことができるMEIKAI-JOEの講座は、非常に貴重な機会であった。また、大学の先生方から、理論的な面から見た実践に関するお話をいただける点も、この講座の特徴であると感じている。

今年度の講座で特に印象に残っているのは、第5回狛江市の小中接続の取組である。今までは小中連携という言葉聞くことが多く、小中の教員が互いの授業を参観し合ったり、中学校教員が小学校での出前授業を行ったりする取組を目にすることも多かった。一方、狛江市の実践は、小学生と中学生の交流活動であり、高い目的意識や相手意識をもって取り組む児童生徒の姿が見られた。そういった取組が、小中接続につながることを学ぶことができた。勤務する妙高市では、幼小中の一貫した外国語教育に力を入れている。小中連携が図られている当市の強みを生かし、中学校と情報交換をしながら子供たちの学びの場を広げ、狛江市のような取組に挑戦してみたいと強く感じた。

妙高市立新井小学校 早津 康平

11. 東京都狛江市教育委員会の総括

1 【狛江市の外国語・外国語活動の取組状況】

狛江市では、第3期狛江市教育振興基本計画(狛江市教育大綱)の中に【基本方針】(1)生きる力をはぐくむ質の高い学校教育の推進【施策】③国際社会で活躍できる力の育成として、グローバルに活躍できる資質・能力を伸ばす教育の推進を掲げている。

具体的な施策として、中学生のオンライン・スピーキング・トレーニングや、小・中学生の東京グローバル・ゲートウェイの訪問、外国語指導助手の活用等を展開しており、外国語によるコミュニケーションを重視している。また、令和4年度から市内全校をコミュニティ・スクールとし、中学校区ごとに「ゾーン」を設定し、教科



等、生活指導等の連携を深めている。その他外国語活動及び外国語科については、令和3・4年度小中連携推進事業「かけしプロジェクト」の中で、連携授業に係る検証授業に取り組んできた。小中連携、小中接続にも力を入れている。

2 【講座の実施について】

(1) 受講者について

本市の小学校では全6校中4校に英語専科教員が配置されている。英語専科としての経験を重ねた教員による質の高い授業が展開される一方、異動年限等により、次の担当への引継ぎも課題となっている。そこで、本講座を「英語教育中核教員育成研修」と位置付け、受講者については主に各学校における次の英語教育担当者をターゲットとして、受講者を募った。同時に、初任者課題別研修や中堅教諭資質向上研修Ⅰの選択研修の選択肢の一つとして提示し、受講の機会を設定することができた。

(2) 狛江市の担当講座における学び

昨年度に続き、本市からは小中連携をテーマに授業講座を設定した。協議会では、「中学生による動画の送付・小学生による活用という間接的な交流ではなく、リアルタイムで直接のやり取りができる」とよい、「小学生が受け身にならないような方策が必要である」等の御意見をいただいた。また、講座の講師である明海大学の坂本純一先生から、主に「小・中学生のそれぞれの指導内容との整合性」について、石鍋浩先生から、主に「小中連携の現状」について御指導いただいた。今後の小中連携の実施方法等の改善に向けた視点を得ることができた。

(3) 他自治体の講座等からの学び

本市は上記で述べたとおり、外国語によるコミュニケーションを重視している。講座内容として「聞くこと・話すことの指導」が数多く設定されていたことは、本市のより効果的な外国語教育の推進に向け、非常に参考になった。特に「正確な表現」よりも「適切な表現」を用いることの重要性については、本市の外国語教育におけるキーワードとなり得るものであった。また、教師の外国語を活用しての進行については、「外国語で説明した上で、必要に応じて日本語での説明を行う」という流れを明確にすることができ、本市の中で統一して実施していきたい。

3 【総括】

空間を越えるというオンラインの特性を最大限に生かし、全国各地の拠点校の先生方から多角的な視点で意見を共有できたことは、非常に有効であると感じた。受講者が本講座で学んだことを自身の実践に生かすこと、英語教育中核教員として質の高い外国語教育を推進するという役割を果たすことについては今後の課題である。

昨年度に続き、貴重な機会を御提供いただいた明海大学の皆様、講師の皆様、様々な授業実践を御提供いただいた連携区市の皆様感謝申し上げたい。

12. 東京都狛江市受講者の感想

明海大学講座を受講して、日本全国各地の小学校外国語、外国語活動の様子が見られた事が一番勉強になりました。その中でも、夏季休業中にオンラインで集中的に見せていただいた授業から二学期に実践させていただいていることもあり、役に立つ内容を知ることができてとてもよかったです。

狛江第五小学校 英語専科教員 阿竹 明子

外国語の授業の中で多くの英語に親しむこと、ALTの活用の仕方について学びました。ALTとの打ち合わせが必要となると、英語専科が各校に配置できるようになるとよいと思いました。担当が授業することになったら、学年で担当を決めてやっていきたいと思いました。

緑野小学校 学級担任 藤田 麗未

外国語指導に関しての基礎知識が備わってなかったため、全てが学びでした。特に、45分の授業の中で、ALTへの中間評価を取ることが知識・技能や主体的な学びを深めるために重要だということをオンライン学習後の実践で思ったことです。毎時間積み上げて「How do you say in English ?」が、中間評価時に自然に飛び交うようにできたらよいと思いました。

狛江第六小学校 学級担任 富山 亜矢子

外国語を担当するのが初めてだったので、今回の講座はとても勉強になりました。特に、外国語の授業の流れや子供たちが意欲的に学習する方法、学年による学習方法やねらいのちがいについて理解が深まりました。オンライン講座だったので、他の自治体の実態を知ったり、多様な意見に触れたりできてよかったです。楽しく外国語を学べる授業を目指して、今後も頑張りたいと思います。

和泉小学校 学級担任 市村 明花

実際に外国語の授業を見て協議をすすめることで、自分が授業をしている中では気付くことのできないような視点に気づき、深く考えることができました。さらに授業実践や講義の中で学んだことを自分の授業で実践してみることが、児童の実態等に合わせた指導方法についても考え、生かしていくことができました。

粕江第一小学校 英語専科教員 高取 萌子

授業実践動画を視聴したり、成果と課題についてのお話を伺ったりすることができ、今後の自身の指導に生かしていきたいと感じました。お話の中にあつた正しい表現でのインプットや、使ってほしい表現のリキャストによって、少しずつアウトプットできるようになってきたように感じます。言語活動の説明や指示を行うためのクラスルームイングリッシュの使用が今後の課題だと感じたので、意識して使用し、子供たちの気付きを促せるようにしたいです

粕江第一小学校 英語専科教員 菅原 栄理佳

13. 北海道釧路市教育委員会総括

本市では、第3期教育推進基本計画の基本方策2「社会の変化に対応する力の育成」において「国際的な視野をもつグローバル人材の育成」を掲げており、小学校段階からの系統的な外国語教育を推進し、高等学校卒業段階において、日常的なコミュニケーションができる程度の英語力の涵養を目指している。施策として、令和3年度より「外国語教育アドバイザー」を配置し、市立の小・中・義務教育学校及び高等学校を対象として、年間を通じて延べ約100回にわたる巡回指導訪問を実施している。また、巡回指導訪問においては、校区の小学校と中学校の教員が互いに授業を参観した上で、合同での協議を実施することにより、中学校区における小中連携を推進している。加えて、小・中・義務教育学校及び高等学校の教員の外国語における指導力向上をねらいとした研修を年3回実施するなど、校種間連携の充実に努めている。



このような状況の中、今年度より本講座に連携教育委員会として参加したことで、他の自治体と授業研究等を通して、今求められている外国語教育の授業の在り方について研修を深めることができた。受講対象者は、拠点校の全教員とすることに加え、小学校外国語専科教諭及び小学校で指導する中学校教員をはじめ、拠点校以外の各小学校・義務教育学校の外国語授業担当教諭より1名以上としており、市内全ての小学校が講座に関わることで、外国語の授業力向上を図った。

【成果】

- ・ オンデマンド講座では、個々の教員の課題に応じてテーマを選択することができ、教員の個別最適な学びの実現につながった。
- ・ どの講座も、HPから多様な授業を視聴でき、教員が教材研究に活用することができた。
- ・ 研究授業講座では、普段は見られない他地域の実践を知ることができ、また、その実践について協議することを通して、授業改善における多様な視点をもつことができた。
- ・ 授業提供者にとって、本市の教員との協議だけではなく、他地域の教員から直接質問や感想を聞くことができ、授業改善の方向性が見える有意義な協議となった。

- ・各授業研究講座の講師による講評は、具体的な課題解決につながり、今求められる授業の在り方について理解が深まるものであった。
- ・釧路市として、拠点校に参集できない受講者のためにGoogle Classroomを作成しているが、講座をオンラインで配信することによって講座に参加しやすい環境ができ、多くの教員が受講することができた。また、協議についても、グループごとにGoogle Meetを設定することにより、拠点校に参集するのと同様な参加形態を確保することができた。
- ・まとめ講座では、授業研究講座の授業を振り返りながら、改めて課題と成果を確認することができ、小学校の外国語指導に当たって求められる教師の力について理解を深めることができた。
- ・視察研修会では、講師の方々に本市の小中連携の様子を参観いただき、直接助言を受ける機会を設けることができ、授業者だけではなく、本市全体での授業改善の方向性についても確認できた。
- ・何でも相談交流室では、教員が普段の実践の中で感じている課題について相談ができ、小学校外国語専科教員など、悩みを相談する機会が少ない教員にとって有意義であった。

【課題】

- ・授業研究講座については回数も充実していることから、より多くの教員が自分の課題に応じて受講できるよう、全てに参加することを前提とするのではなく、受講者が選択できるようになるとよいと感じる。
- ・定期的な巡回指導訪問において小学校と中学校の教員が互いに授業を公開・参観し、小中接続の場としていることから、中学校の外国語科教員の参加も促したい。

14. 北海道釧路市受講者感想

毎回様々なテーマで実施されてきた本講座でしたが、どれも明日の授業に生かすことができるエッセンスが詰まっており、大変有意義な時間だった。児童の英語に対するフィードバック、TTの効果的なあり方など、授業における具体的な指導技術を学ぶことができた。「自分の英語で、言いたいことを相手に伝えられるようになった!」という喜びを、子供たちがもっと感じられるような、授業づくり・自己研鑽をしていきたい。 **釧路市立興津小学校 鶉橋 大志**

本講座では、学習指導要領のポイントや授業づくりについての講義と、授業研究での協議があり大変勉強になりました。実際の授業を見せていただいたことで、Today's goalを児童から引き出すところや中間指導での全体共有、振り返りの視点の提示など、すぐに自分の授業に生かすことができるポイントがいくつもあった。教員としての経験も浅く、正直なところ外国語の授業に自信がなかったが、様々な自治体の先生方の実践や講師の先生方からの助言のおかげで、よりよい外国語の授業を行っていきたいと思えるようになった。 **釧路市立美原小学校 山田 真希**

普段は見られない他地域の実践を見ることができた貴重な機会となった。授業実践を見た後に参加者と討議をする中で、自分の課題を把握することができたり、授業改善のヒントを見つけたりすることができた。また、吉田先生をはじめとする講師の先生方の講義を通して、「コミュニケーションを通して育成していく」という外国語教育の本質に改めて気付くことができた。さらに、授業の中での日本語使用の頻度など、他の先生方も疑問に思っていることを解説していただき、モヤモヤしていたことがスッキリした。とても勉強になった。 **釧路市立共栄小学校 加藤 龍二**

英語に対してのマイナスのイメージを捨て、堂々と発音していくことが大切だと感じた。形にこだわらず、意味を考えて適切に使えるようにすることを意識して、授業を構築する必要があることが分かった。コミュニケーションの中で、考えて適切に使えるようにするために、リアクションやジェスチャー、簡単な単語で応援するなどの学級の雰囲気作りも必要であると感じた。今後、外国語の授業を担当する際に、今回の学びを活かし、適切に使うためには、どのように組み立てて授業をすれば良いのか教材研究を進めながら、授業をつくっていききたい。

釧路市立湖畔小学校 北村 春也

15. 岐阜県岐阜市教育委員会総括

本市では、第4期教育振興基本計画において「すべての子供たちが希望あふれる未来を自ら拓く力」を育むため、グローバル社会に生きる英語能力や国際感覚の育成を推進している。具体的な取組の1つとして、平成16年度より小学校1年生から英語教育を始め、平成27年度からは小学校全学年で英語科として実施している。小学校英語専科教員は46校中5校(うち常勤1名)に配置されているが、ほとんどの小学校で担任が英語科の授業を行っている。今年度は第1回小中学校英語担当者研修(悉皆)において、本市の英語教育について理解を深めるとともに、英語教育全般における指導改善の意味を込めて「令和4年度第1回講座新学習指導要領の原点(吉田研作氏)」の講義を全員で視聴した。また本講座全体についても中学校教員にも募集をかけたことで、合計で24名(小学校12名、中学校12名)の教員が受講した。



本講座を受講したことで得られた成果と課題について以下に総括する。

【成果】

①専門的見地からの知見が得られた

学校現場にいと学校外で専門的見地から知見を得る機会が少なく、自ら求めて研修を受ける以外なかなか難しいが、内容が明確でさらに自分の希望する時間にオンデマンドで講義を受講できたことが、現場からは大変好評であった。中には教育委員会で指定した3講座以外にも多くの講義を視聴したという教員もいた。専門的見地からの指導は、現場の教員にとって大きな刺激となった。

②オンラインならではの授業研究

これまでの授業研究会は現地に赴いて参加するしかなかったものが、オンライン上で他市区、他都道県の授業動画をもとに研究会を行えることは大変大きなメリットであった。他市区、他都道県の授業、研究会からそれぞれの自治体が大切にしていることをリアルタイムで見聞きしたことで、本市の取組も客観的に振り返ることができたことは大きな収穫であった。

③本市の主張点の共有

代表校一校が授業動画を撮影し、市内の教員も視聴したことで、本市の取組について共有することができたことも大きな成果であった。研究会中には、小中のつながりを意識したSmall Talkや、ICTを活用した授業方法など、具体的な指導方法について交流したことで、より実践的な研修となった。

【課題】

①授業研究会での発言

他市町からも多くの御示唆をいただいたが、実態や意識の差を感じた研究会となった。研究会の発表はグループ討議の内容ではなく、市としての意見をまとめてから発表をするなど、各自治体の取組と比較しながら発表する必要があると感じた。また、質疑応答の時間を設定してから討議を行ったが、討議内に質問が多く出されたので、研究会の進行については全体で統一した形で行うとよいと感じた。

②講座の参加

第14回、第15回については、リアルタイムでの視聴ということで本市では参集型で行ったが、講義形式で交流する時間もなかったため、オンライン(オンデマンド)視聴でもよかったと感じた。同時に、第14回、第15回の時期に、授業研究会を行うことも可能なのではないかと感じた。

③授業研究への参加

本市では、夏休み期間中に教員研修や閉庁期間が設定されているため、希望していた内容での授業公開、希望日時での授業研究の受講が難しかった。夏休み期間中に全ての自治体の授業研究を集中的に行うのではなく、第14回、第15回

のような時期に午後から行うような形でも可能ではないかと感じた。

16. 岐阜県岐阜市受講者感想

他の自治体の先生方と外国語の授業について交流できたのは、とても貴重な体験であった。また、疑問や課題を共有することで、今後の自身の授業研究に生かすことができた。

吉田研作先生の講座から、授業を仕組む上で、大切にしたい点を多く学ばせていただいた。児童生徒の「気付き」の機会を促すような言語活動やALTのやり取り、言語活動の途中での「中間評価」の充実を図りながら、日々精進していきたいと思った。

岐阜市立長良西小学校 細田 美加代

自分自身経験年数が浅く、「英語教育の基本を学びたい。自分の授業実践に役立てたい。」という思いから、今年度本講座を受講させていただいた。第1回での、上智大学名誉教授の吉田研作先生のお話から、小学校学習指導要領外国語活動の目標を実現するための言語活動を設定することの大切さを学んだ。活動における「目的・場面・状況」を明確にし、児童が英語を用いてやり取りを行う「必然性」を実感することができるような活動を工夫したいと思った。また他県、他地区の先生方の授業実践を見せていただいた中で、ALTとの“本物のやり取り”を児童に見せることの大切さ、児童の思考の足場かけ(再構築の場)とするための中間指導の仕方、指導と評価の一体化を図るための評価規準の作成など、様々な観点から学ぶことができた。

本講座を通して、知らなかったことやより深く理解できたことがあり、学んだことを普段の授業実践につなげていきたいと思った。このような研修の機会を生かし、さらに成長していけるように今後も学び続けたい。

岐阜市立長良東小学校 古澤 雅也

小学校に英語科が導入され、小学校の教員だけでなく中学校の教員も小学校英語を学ぶことが必要であると考え、本研修を受講した。授業研究や講座視聴を通して、必然性のあるSmall Talkの大切さを学び、ALTの活用について考えるとてもよい機会となった。小学校で大切に指導されていることを中学校でも継続し、連続的な学びにすることがグローバル人材の育成には欠かせないと思う。今後も小中接続を意識し、「英語が好き！」と言える生徒を育成していきたい。

岐阜市立陽南中学校 渡邊 彩乃

17. 茨城県土浦市教育委員会総括

本市では、土浦市立中村小学校を外国語科・外国語活動の研修推進校として研究を推進した。外国語科・外国語活動を専科教員が指導する学校も少しずつ増えてはきたが、大多数の学校は英語免許を所持していない学級担任が指導を行っている。この状況に対して、外国語・外国語活動を指導している学級担任が自信をもって学習指導を行うことができるようすること、授業改善をとおして児童が主体的に学習に取り組むことを目指している。授業改善の手立てとして「目的・場面・状況を設定した意味のある言語活動の充実」「中間指導を中心としたSmall Talkの改善」「相手に配慮ができる態度を育てる言語活動の充実」の3つを柱として研究を推進した。

【成果】

オンデマンド講座では、「現行学習指導要領の趣旨」「Small Talk」「チーム・ティーチング」の3つの受講を設定し、参加者各自で理論研修を行った。「現行学習指導要領の趣旨」の講座では、外国語教育の目指すもの、どのように外国語



指導を行っていくかを学習する機会となった。次に「Small Talk」の講座では、Small Talkを行う目的や進め方について学ぶことができた。授業実践の中で、簡単なコメントの返し方、あいづちの効果的な使い方を気付かせる指導を継続したことにより、実際のコミュニケーション活動の中でも簡単なコメントを返したり、あいづちを使ったりする児童が増え、会話を継続することができるようになってきた。また、「言いたくても言えなかった表現は何かありますか。」と必ず学級担任は児童に確認し、児童が相手に伝えたいという気持ちを大切にしながら中間指導を積極的に取り入れる授業も増えてきた。「チーム・ティーチング」の講座では、授業の主導は学級担任が行うこと、ALTとのコミュニケーションを行う中でのラポール構築の大切さを学ぶ機会となった。

授業研修においては、「目的・場面・状況を設定した意味のある言語活動の充実」と「相手に配慮ができる態度を育てる言語活動を充実」を中心に授業設計及び授業実践を行った。学級担任が使用する表現を決めるのではなく、目的・場面・状況に合わせて児童自身で使用する表現を考えさせる授業の大切さに気付く機会となった。また、オンラインで他の自治体から様々な視点で助言をいただいたことで、授業改善への手立てとなった。他の自治体と交流ができた授業研修は大変有意義なものであった。

まとめの講座の受講者アンケートの記述から、「以前の英語教育と、今、求められている資質を獲得するための英語教育は違うということや、学級担任が英語を上手く話せないから劣等感をもつのではなく、まずは伝えたいことを伝えようとする気持ちが大切であると気付いた。」という内容が増えていた。今回の研修で、英語免許状を所持していない学級担任からこのようなコメントがあったことから、大変有意義な研修であったと考える。

【課題】

小学校段階での書くことの目標は、「音声で十分慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにすること。」であるが、中学校ではそのことが十分に伝わっていない面がある。中学校教員が小学校の外国語科・外国語活動がどのように進められているのか、目標は何かを捉えることができるようにしていくことが大切である。また、小学校でも文字を扱うようになり、ワークシートに書かれている文字を頼りにコミュニケーション活動を行う授業が増えている。しかし、相手に配慮をするということは、相手の顔や表情を見ながら話をするのが大切である。コミュニケーション活動時のワークシートの活用方法について今後も検討をしていきたい。

18. 茨城県土浦市受講者感想

今回の研修では、Small Talkやチーム・ティーチングの大切さについて、深く学びました。相手のことを考えながら積極的にコミュニケーション活動に取り組むことは、英語でも日本語でも変わらないものであると、実感している。どの言語においても、コミュニケーションを円滑に行うためにはジェスチャーや相づちが大切である。英語だから、日本語だから、という考え自体が壁を作っていた。今後も、この壁を崩せるように、児童の力を高められるよう、指導していきたい。

土浦市立中村小学校 湯山 渉

Small Talkを授業に取り入れたことで、児童が相手に「伝えたい」という思いをもって取り組む姿が増えた。今回の研修を通して、「正しい文法が分からないから話せない」ではなく、自分の知ってる言葉やジェスチャーを使ってどうにか伝えようとするところから始めればよいのだと感じた。これからは私自身が、AETとのやりとりを楽しんだり、挑戦したり、ときには間違えたりする姿を見せながら、児童とともに楽しく学び、ともに成長できる教師でありたい。

土浦市立中村小学校 飯岡 裕美子

今回、このような研修の場をいただき、「外国語での研修」そして「会議システムを使った研修」と聞いた時には、どのような研修が始まるのかと想像しにくい面もあった。研修全体を振り返ってみると、会議システムを使っただけの講義研修や実践発表・協議会など、学校という場を離れずに、多くの学びの場に参加でき、新たな研修の在り方を感じた。

また、それらの講座をとおして、ALTとHRTの役割分担の在り方やALTの効果的な活用の仕方、Small Talk の取

り入れた方などのスキル面だけでなく、小学校における、外国語活動・外国語科授業で子供たちに何を感じ、身に付けさせるか等、改めて学ぶことができた。

土浦市立中村小学校 岡野 功子

今回の研修では、児童が母語ではない外国語を、どのようにして自信をもって生き生きと学べるかを考え実践してきた。特に、児童にとって抵抗があった外国語のコミュニケーションは、Small Talkを始め、デモンストレーション、中間指導、「完璧な英語でなくても大丈夫」という授業の雰囲気作りを中心に実践することで、少しずつ自信をもってできるようになってきた。今後は、さらにより良い外国語科活動になるように、HRTとALTの役割を考え直し、私自身が児童の前でたくさん外国語を話していきたい。また、児童が学ぶ必要性を感じられるような課題を設定することで、目的をもって活動し、外国語の学びに対するエネルギーに溢れた児童が増えるような授業を作っていきたい。

土浦市立中村小学校 沼知 由希乃

19. 群馬県前橋市教育委員会総括

前橋市教育委員会では、公教育として前橋の学校教育が目指すものを「まえばし学校教育充実指針」として明示し、学校現場における具体的な方途を示している。外国語教育については、「コミュニケーションを図る楽しさを大切にする外国語教育の充実」として、外国語によるコミュニケーションを主体的に図ることのできる児童生徒を育成するために、外国語の音声に慣れ親しみ、外国語でのコミュニケーションの基礎となる力を確実に身に付けることができるよう、単元計画や授業展開の工夫、言語活動の一層の充実を図る授業改善を推進している。



このことについて、前橋市教育委員会学校教育課では、実践研究を進めるために、前橋市立桂萱東小学校を学力向上(外国語活動・外国語)指定校として定めると共に、『MEIKAI-JOE プラス2023』の拠点校とすることで、外国語教育の一層の充実を図ることを目指した。

本市小学校では、外国語活動、外国語の授業を担当することに不安を抱えている教師が多い。しかし、参集しての研修等に参加できないことが課題となっている中、オンデマンドの受講形式での本研修に参加することで、教師の不安を少しでも軽減するとともに、外国語授業の指導力向上を図ることができた。

【実施について】

1. 受講者

拠点校の全教諭と市内小学校勤務の希望教諭、また、各小学校へ配置・訪問している前橋イングリッシュサポーター(MES:担当教諭の授業のサポートを行う外国語の教員免許を有する非常勤講師)の参加があった。

2. 受講方法

オンデマンド講座については、拠点校では、これからの外国語授業研究に向けて、校内研修全体会での視聴を始め、それぞれ理解を深めたい講座を個々が選択して受講した。市内希望教諭とMESは、各々の関心のある講座を自由に選択し、受講した。

授業研究講座については、拠点校において、オンライン研修を開催した。拠点校教諭は校内研修の研究分科会の所属と関連した講座回にそれぞれ参加した。市内希望教諭とMESは、開催日に拠点校へ参集、または各自勤務校からオンライン参加をした。

まとめの講座については、拠点校において、拠点校教諭が2組に分かれ、14回・15回を受講し、その後、校内研修全体会において、情報を共有した。市内希望教諭とMESは、各自勤務校において、オンライン参加した。

3. 成果

本年度、初の参加となり、市教委も手探りでの講座開催となった。しかし、拠点校の校内研修部と協力し、効果的な講座受講とすることができた。

- ・ 拠点校の校内研修として、受講を設定することで、各講座での学びを共有することができた。
- ・ 拠点校の校内研修を進めるにあたっての促進剤となった。
- ・ 必要な講座をいつでも受講できる形が、受講者の研修受講負担を軽減した。
- ・ 普段、なかなか研修を受講する機会のないMESが受講できた。
- ・ 大学の教授等、専門的な講師の方々の研修をこれほどの量で受講できる機会は無く、外国語を担当する教諭やMESにとって、大変有意義であった。
- ・ 本市の授業改善の方向性を示す拠点校での授業について協議できたことは、提案事項に対して、自信になった。また、より良い授業になるよう課題をもつことができた。

4. 今後に向けて

- ・ 外国語の授業担当教諭が授業計画を自信をもって進められるよう、研修を継続して行う。
- ・ 拠点校以外の外国語の授業担当教諭の受講を増やす受講方法を考える必要がある。
- ・ 受講後に、研修の振り返りやどのように授業実践に活かしたかを共有する場を設定し、研修成果を深めていく。

20. 群馬県前橋市受講者感想

本校は、研究主題を「自分の思いを伝えるために豊かにコミュニケーションを図ろうとする児童の育成」として研究を進めている。今年度、前橋市は『MEIKAI-JOEプラス2023』の指定を受け、学力向上(外国語活動・外国語)の推進について取り組んでいる本校を拠点校として参加することとなった。

本校からは管理職をはじめ、全学級担任、専科教員等27名の職員が参加した。オンデマンド講座では全職員で学習指導要領の趣旨について学ぶところからスタートした。アーカイブ動画では本校研究主題に関連する「聞くこと」「話すこと」「Small Talk」などを重点的に視聴し、理解を深めることができた。授業研究講座では、本校の実践も含め全国10都市の授業実践の様子を視聴して研究協議を行い、他の市町村との意見交流を行うことができた。これらは本校の研究に大いに役立ち、研究の振り返りや今後の課題を明らかにすることにつながった。

今回の研修から得た知識や経験を実際の授業に生かしつつ、子供たちの「話したい」「分かってほしい」願いを大切に、さらに外国語活動・外国語の授業を充実させていきたいと考えている。最後に貴重な機会をいただいた明海大学の方々、講師の方々および前橋市教育委員会に改めて感謝申し上げます。
前橋市立桂萱東小学校 校長 高橋 亨

講座では全国各地からの授業実践を視聴することができ、とても勉強になった。児童が楽しく外国語科・外国語活動の学習に取り組んでいる様子や先生たちが熱心に研究に取り組んでいる姿に、「私も頑張らなくては！」と大変励まされた。

本市の授業実践からは、児童が日ごろから英語に慣れ親しんでいる様子が十分に感じられた。「めあてステップ」により、児童が本時で何を学習するのかが分かり、主体的な学習へつながっていると思った。振り返りを丁寧に行い、児童同士が達成感を伝え合うことの大切さも学ぶことができた。

講師の先生方からのご指導は具体的で、大変分かりやすかった。特にFish Bowl モデルとOpen Seasモデルの考え方は分かりやすく、かつインパクトが大きかった。本講座の学びを生かし、今後も授業改善に努めていきたい。

前橋市立桂萱小学校 茂木 千恵子

21. 講師総括

1 吉田 研作(日本英語検定協会会長、上智大学名誉教授)

本年度のMEIKAI-JOEも非常に充実したものだ。各教育委員会の実践は殆どの場合指導のポイントが絞られており、評価の観点が明確だったと思う。それぞれの実践と同時にその後の協議会が非常に活発に行われ、内容的にもポイントをついた有意義なものになっていたと思う。また、担当の講師の話も非常に内容のあるもので大いに参考になった。

MEIKAI-JOEの特徴は、教室現場と教育委員会、そして大学の専門家が1つになって小学校英語教育の改善に取り組んでいるところにある。昨年も述べたが、この3者が一同に会して互いに真剣に議論しながら小学校の英語教育の発展に寄与していることは素晴らしいことであり、一つの教員養成の良いモデルになっていると思う。各地の現場の先生方と教育委員会の指導主事が大学の専門家の助言の下、英語の指導改善に努力することは、まさに理論と実践の融合を実現したものといえる。普段、私のように、個人で授業を見て担当教員や指導主事の先生方を交えて授業の指導をしているが、MEIKAI-JOEの良いところは、一人の講師だけでなく、複数の専門家がそれぞれの得意分野について助言しており、それを他の講師も参考にしながら自分の指導に活かせるという点である。

今回の取り組みは主にオンラインで行われたが、直接学校に行き指導することも含まれている点は非常に良い。特に、直接教室で生徒の様子を観察しながら指導するのは、ビデオを通して授業観察をするのと違って、より細かい生徒の反応を観察することにより、教師の教え方への指導も変わってくるところが利点だといえる。そういう意味で、実際の現場での授業観察の機会を増やすことができると更に素晴らしいプログラムになるだろう。特に、実際に指導に行った時の授業及び協議会の様子をビデオに収め、それをオンラインで視聴し、協議するという方法が考えられるだろう。

このプログラムは文科省の取組として行われているが、今後いつまで続けられるかは、明海大学と各教育委員会の努力にかかっていると思う。しかし、文科省のあらゆる取組がそうであるように、文科省の助成が終わった後にも、同じ規模でなくても、何らかの形でこのような教員養成プログラムを継続できる方法を関係者で考えておく必要があるように思う。

2 井熊 ひとみ(J-SHINE理事、共愛学園前橋国際大学客員教授、育英短期大学非常勤講師)

2023年度明海JOEプラスの講座は昨年度に引き続きのご参加の先生方に加え、新しい地域の先生方が加わりさらに充実した講座となった。また、課題として昨年度の講座からの学びを再度履修し、改めての学びを得ることができた。新しくご参加の先生方にとっても理解を共有したうえで講座が進行した効果であると思う。それぞれの地域でテーマを定め授業計画から授業動画を撮り、検証し、講座内で全国の先生方と協議を行い、積極的な意見交換や、感想、質疑応答などが交わされたことは学年並びに学校をも越えた学びの道すじを双方向で学べた、ほかに例をみない貴重な機会であったと言えよう。

「聞くこと、話すこと」は、言語学習の最初の1歩である。このテーマを取り上げた5つの小学校の授業をリアル感のある動画で拝見できたことは、受講された皆さんにとって、この上ない「学びあいの場」になり、さらなる発展に向けての授業改善が可能になったのではないと思う。指導にあられた先生方には、今、子供たちが学んでいる事がこの先にどのようにつながり、学年間、そして中学校での学びへの連携、さらには将来にいかせるようなイメージの必要性が得られたと思う。そしてその大事な土台づくりこそ、小学校に求められており実践される必要があると思われる。

児童にとって初めて出会う言葉をどのように学び、その言語活動において「使える」ようにすることは容易ではない。その導入には各地の先生方のさまざまな工夫が見られた。子供たちの「学ぶ理由」を授業において指導者と児童が互いに確認し合い、子供たちの納得感をもった授業の進行が必要である。毎時、先生が提示する「めあて」は子供たちにとって必然であったか。そして子供たちにとって学ぶ理由が明確になっていただろうか。そのための導入方法は適切であっ

たか。常に子供たちの視点を念頭におきながら設定されている必要がある。その指導者の視点があつてこそ、納得感があり「めあて」に支えられた活動のひとつひとつが意味をもち子供たちの達成感へと実を結ぶ。学習指導要領で求められた「思考・判断・表現」を耕し、芽を出すための大事な導入方法に始まり、言語活動のひとつひとつが子供たちにとって「意味あること」となることが求められる。指導者の一方的な指導では、得られないことである。「意味あること」とは、子供たちが知りたいこと、伝えたいことを自らのなかにもつことであり、それが「知識・技能」を学ぶ理由にもなり得る。目的をもった学びが「主体的な学習の姿勢」へと結びつくであろう。授業計画を立てるにあたり定めた「めあて」をどのように単元計画に分類し、そのそれぞれの段階の活動が子供たちにとって必然性のある「知りたい、言いたい言語活動」になるための手立てを様々なアプローチで実践された先生方に拍手を送りたい。この講座で交わされた多くの事例や、意見が今後の授業に反映されることは間違いないと確信する。学習者の学習改善、授業者の授業改善は、「対」である。終わりのない進化になるであろう。それゆえに学級において先生と子供たちの間に交わされるコミュニケーションがより多く、より深いものであることを願い、継続的に各地での研修に活かして頂けたらと願うものである。

ご多忙の中でもご協力いただいた各地の教育委員会、教職員の皆さま、児童の皆さんに心から感謝の気持ちをお伝えしたい。

3 池田 周(小学校英語教育学会愛知支部長、愛知県立大学教授)

第11回講座は、浦安市立見明川小学校第5学年の「読むこと」「書くこと」の指導をテーマとした授業研究であった。授業者の齊藤千咲先生が「書くこと」に関して「丁寧な授業を心がけました」と伝えてくださった通り、既習事項を活動の中に効果的に組み込み、机間指導を通して個に応じた支援を行うなど、細やかな配慮がなされた素晴らしい授業であった。ペアでの協同的な学びも生かされており、児童が安心して学習に取り組めるように工夫が凝らされていた。「読むこと」「書くこと」の指導を高学年「外国語」で「どのように、どこまで」目指せばよいのかについて、様々な考える視点をいただいた。

「読むこと」と「書くこと」の指導についても、基本的な考え方は小学校外国語教育を貫くものと同じで、「音声に十分慣れ親しんでから」、さらに「その音声への慣れ親しみを生かしながら習得できるところまで」である。高学年では文字について、個々の名称の発音ができること、そして形の違いを意識しながら任意の文字を書けることを目指す。そして、綴りを「個々の文字の名称」を発音して伝える活動に発展させる。意味のあるやり取りの中でこの活動を行うように留意し、相手に分かりやすく伝えるため、もしくは相手の伝えた内容を確認するために綴りを言うといった「目的・場面・状況等」の設定も必要である。小学校段階では、文字の繋がりの順番や、語の中で文字が表わす音を「知識として」知っていることは求めている。さらに、語句や表現を「書き写す」活動では、まず書き写す対象が聞いて意味が分かる語句や表現であること、かつ自分でも言えることが重要である。そうすれば「言える表現を書き写し、その直後なら書き写したのを見て再度言う」活動に発展できるし、これが高学年「外国語」で十分な音読の姿と言える。小学校の外国語教育を通して、各領域で育成を目指す資質・能力を具体的に描き、それを児童と共有しながら、スモールステップで「できることを増やしていく」指導に取り組んでいただきたい。

齊藤先生、浦安市立見明川小学校第5学年の児童の皆さん、浦安市教育委員会の先生方、貴重な研究授業をありがとうございました。

4 百瀬 美帆・米村 珠子(明海大学教職過程センター・地域学校教育センター教授) パトリツィア・ハヤシ(明海大学多言語コミュニケーションセンター教授) タイソン・ロード(明海大学多言語コミュニケーション准教授)

第9回授業研究講座では、新潟県妙高市立新井小学校の笠野恭子先生とALTのキャルビン先生による6年生のチーム・ティーチングの授業を扱った。本講座の観察の視点として、JTEとALTの役割分担、児童への動機付けと教師の指導技術を取り上げた。JTEが児童の発言をすべて受容したうえで適切にリキャストしたりする一方、ALTは英語母語話者として標準的な発音のモデルを示したり、児童が英語を使わなければならない必然的な場面設定の

ための対話役としての役割を果たした。この明確な役割分担は言語活動においても守られており、JTEは児童の活動を支援する役割を担うことにより、児童が活発にALTとの対話を楽しむことができた。フォニックス指導、リキャストやジェスチャーの多用、机間指導中の個別指導に高い指導技術が発揮されており、児童が英語を使ってコミュニケーションを図りたいという気持ちを引き出していた。

第13回授業研究講座では、茨城県土浦市立中村小学校の湯山渉先生とALTのメイベル先生による3年生のチーム・ティーチングの授業を扱った。本講座の観察の視点として、HRTとALTの役割分担と、話す必然性のある活動を取り上げた。聞き手である児童を意識してわかりやすくジェスチャーを入れながら対話モデルを示したり、ALTが適時適切にほめ言葉を多用したりした点を評価するとともに、より一層の改善に向けて、児童が相手意識をもてる機会を設けたり、段階的に口慣らしさせたりすることを提案した。具体的にはワークシートを持たせずに活動させたり、既習事項を入れながら会話の内容の幅を広げさせたり、「好きな食べ物ランキングをつくる」といったねらいを設定して活動に必然性をもたせたりすることにより、目的、場面、状況に応じたやり取りから意味のあるコミュニケーション活動につながるができる。

5 石鍋 浩・坂本 純一(明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授)

第5回講座では、狛江市の小中学校が連携して行う英語の授業実践への講評をさせていただいた。

最初に、小中が連携した授業においては、小学生にとっては、中学校での英語学習への見通しがもてること、中学生にとっては、英語の力を一層伸ばしたいと思うきっかけになることなどがねらいとなることを確認した。

中学校では先生を英語で紹介するビデオレターとポスターの作成を行う活動、小学校では作成されたビデオとポスターを見ながら紹介されている内容を英語で話す活動が行われた。中学生にとっては相手が小学生であることに配慮した話し方などを指導する好機になることを指摘した。紹介場面では、三人称単数現在のように小学校の学習範囲を超えた文法が使われていたことについて、小学生に対しては、一人称や二人称の文と自然に対比させて、違いに気付かせる程度にとどめることを提案した。

次に、小学校においては、聞き取りの項目を英語の単語で示したあとに疑問文の形で示すという段階を踏んだ提示の仕方を工夫したり、学級を、質問文を言わせるグループと答えを言わせるグループの二つに分けて行う言語活動を工夫したりすることが行われていたことに言及した。

また、小中接続に関する他県の取り組み例と参考資料を紹介した。

小学校の先生方にはぜひともご担当されている子供たちが中学生に成長した姿を想像しながら、小中接続に一層積極的に取り組んでいただきたい。

6 金子 義隆(明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授)

第12回講座は、岐阜市教育委員会が担当した回で、テーマは「学習評価」であった。ビデオ授業は岐阜市立長良西小学校の古田教諭とALTのMarcus先生によるTTで行われた。言語活動をしっかりと軸にした授業で、受講者による講座評価アンケート結果によると「言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうか」という問いに対して、肯定的意見が94%を占めるものだったので、多くの受講者に参考になったようだ。また、「動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメント」に対して、98%が参考になったと回答しているので多角的な視点から各受講者が学びを深めることができたようだ。一方、「講師の指導・助言は役に立ちましたか」という問いに対して、肯定的回答が97%であった。自由コメントにも「講師の話をもっと聞きたかった」という回答が数件あり、講師の指導・助言の時間をもっと確保できるように講座全体の時間配分を工夫できると良かったようだ。総合的講座の満足度も、肯定的回答は合わせて98%であったのでとても満足していただいたことが分かった。

「学習評価」というテーマは、小学校教員にとって大きな関心事であることが今回改めて実感した。現場の教員はどのように評価をおこなえばよいのかとその指針を求めている。今回の講座が少しでもこのテーマに関して理解を深める一助となっていたら幸いである。

1. 事前準備・講座配信

配信には、例年同様Zoomのウェビナー機能を活用した。前年同様、講座開始3時間前に会場へ入り、配信内容に合わせたカメラ・照明器具やマイク、その他機材の配置とリハーサルを行うことで、問題なく実施できることを確認した。また、撮影現場とは別に事務局を設け、撮影現場との音声・映像テストを行うとともに、30分前には各拠点校が入室できるようにウェビナーを開始し、事前に各拠点校との音声・映像の確認をすることで、開始後の音声・映像トラブルを最小限に抑えることができた。音声や映像のトラブルがあった際は適宜事務局より確認をとり対応した。



2. 授業動画の作成

第4回～第13回の授業研究にあたり、各区市から授業動画素材と編集指示書をお送りいただき、担当者と連携を取りながら各講座開始1週間前までに動画を全10本作成した。また、個人名が出ている箇所のカットやぼかし加工を行うなど配慮し、細やかに対応した。

3. Webサイトでの情報提供

明海大学のサイト内にMEIKAI-JOE PLUS 2023特設ページを作成し、情報提供を行った。参加される先生方の予習時間を確保するため、各回1週間前には事前課題や当日の資料、配信後のアーカイブ動画等を掲載された詳細ページを公開した。また、協力機関であるJ-SHINE、公益財団法人日本英語検定協会からの「小学校英語に関する情報」等も掲載し、先生方の学びを深めていただけるような情報提供を行った。

終わりに



我が国の外国語教育、とりわけ小学校段階における外国語教育の導入については、平成4年の研究開発学校の指定にその端緒をみることができる。その後、長い年月を経て、学習指導要領の改訂が行われて、平成23年4月からは、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標として、小学校5年と6年に週1コマの「外国語活動」が導入された。

平成28年12月には、中央教育審議会が、小学校第3・4学年に外国語活動を週1コマ、第5・6学年に教科としての外国語(週2コマ)を導入するといった答申を行った。これを受け、平成29年3月に、小学校学習指導要領が改訂され、平成30年4月からの移行措置に伴い、「Let's Try !」(中学年)と「We Can !」(高学年)といった補助教材の配本・使用が始まった。

令和2年4月から小学校学習指導要領が全面実施となり、小学校第3・4学年に外国語活動(週1コマ)、第5・6学年に教科としての外国語(週2コマ)が始まり、4年目を迎えている。令和2年からの小学校学習指導要領全面実施までの間、文部科学省の様々な環境整備についても計画的に実施されてきた。先に述べた補助教材の作成、英語教育推進リーダー養成研修、専科加配教員の配置、ALT等の配置拡大、英語教育強化地域拠点事業や外部専門機関と連携した英語指導力向上事業の立ち上げ、小学校外国語活動・外国語に関する各種映像資料の公表などがその中心であった。加えて、現職の小学校の教員に対する研修を充実するとともに、教員を養成する大学の教職課程の改善にも着手した。具体的には、英語教育コアカリキュラムの中で、小学校教員を養成する大学にあっては、これまでは、履修の義務付けはされていなかった外国語を学修することが求められ、令和元年度の大学入学生からは、小学校免許を取得する者は必ず外国語を3単位履修するよう免許法が改正された。さらには、令和4年度からの小学校高学年の教科担任制の導入、特別免許状を取得した人材や力量のある特別非常勤講師を活用した取組も始まり、小学校における英語の指導体制については大きく変化してきた。

こうした中であって、令和2年度から4年にわたり明海大学が、「教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業(小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業)」を受託して、小学校等の先生方に講座を提供することができたことは、まことに光栄なことである。今年度、合計15回(うち10回は授業研究)に亘り講座を実施してきたが、受講された先生方が他地域の先生方と積極的に協議し互いに良い刺激を得ている姿は大変素晴らしいものであった。加えて、先生方の指導力が年々向上していることも実感できた。

公益財団法人日本英語検定協会、J-SHINEや小学校英語教育学会愛知支部理事の協力機関の皆さま、東京都足立区教育委員会、千葉県浦安市教育委員会、秋田県横手市教育委員会、福島県いわき市教育委員会、新潟県妙高市教育委員会、東京都狛江市教育委員会、北海道釧路市教育委員会、岐阜県岐阜市教育委員会、茨城県土浦市教育委員会、群馬県前橋市教育委員会及びボランティア・オブザーバー参加の佐賀県伊万里市教育委員会の皆さまや、(株)ハルの皆さまからのご協力があったからこそ、このような結果に結びついたと考える。ここに篤く関係各位に対して深甚から感謝の意を表したい。

また、今回参加された延べ2,431名にも達する小学校等の先生方の指導力向上を祈念するとともに、日本の小学生が英語の使い手としてグローバルな世界の中で成長することを願って止まない。